

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

Bulletin of the Akita Prefectural
Cultural Assets Research Center

第 21 号 2007

講演録「発掘調査で分かる中世城館」 千田嘉博 1

漆塗り糸玉の復元 香澤則雄・河田弘幸・柴田陽一郎 18

秋田県内の縄文時代前期初頭～前葉期土器群の様相再検討

—鳥野上岱遺跡Ⅱ群土器の再分類— 新海和広 31

藏骨器を伴う中世火葬墓の一例

—大仙市水木田遺跡出土の事例から— 高橋 学 61

菅江真澄の記録した「塚」—横手盆地の事例を中心に—

..... 今野沙貴子 70

秋田県考古学関係文献抄録（7）—旧石器時代— 利部 修 75

秋田県埋蔵文化財センター

Akita Prefectural Cultural Assets Research Center

シンボルマークは、秋田県北秋田市（旧森吉町）に所在する
白坂（しろざか）遺跡出土の「岩偶」です。
縄文時代前期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

Bulletin of the Akita Prefectural
Cultural Assets Research Center

第 21 号

2007

秋田県埋蔵文化財センター

Akita Prefectural Cultural Assets Research Center

序

当埋蔵文化財センターは、秋田県の埋蔵文化財の公的調査機関であり、主要な業務の一つとして開発事業等に伴う緊急発掘調査を実施し、調査の記録である報告書を刊行しております。こうした業務を遂行するにあたっては、担当する職員の日常的な研究が必要であり、発掘調査から報告書作成までの業務はそうした基礎の上に成り立つものと考えます。

本誌は、このような職員の研究成果や業務に有益と思われる資料を紹介し、職員及び業務の質的向上をはかる目的で設けられました。

本誌では、平成16年度秋田県埋蔵文化財報告会での千田嘉博氏による講演録「発掘調査で分かる中世城館」、漆下遺跡で出土した漆塗り糸玉の製作方法を現代に蘇らせた「漆塗り糸玉の復元」、秋田県内の縄文時代前期の土器について論じた「秋田県内の縄文時代前期初頭～前葉期土器群の様相再検討－鳥野上岱遺跡II群土器の再分類－」、大仙市で採集された須恵器系陶器を藏骨器として紹介した「藏骨器を伴う中世火葬墓の一例－大仙市水木田遺跡出土の事例から－」、近世経塚を紹介した「菅江真澄の記録した「塚」－横手盆地の事例を中心に－」、旧石器時代に関する文献一覧である「秋田県考古学関係文献抄録（7）－旧石器時代－」を掲載しております。

御一読の上、当埋蔵文化財センターの業務と担当職員の研究活動に、なお一層の御指導と御鞭撻をいただけますようお願いいたします。

平成19年3月

秋田県埋蔵文化財センター

所長 熊谷 太郎

秋田県埋蔵文化財センター
研究紀要 第21号

目 次

講演録「発掘調査で分かる中世城館」	千田嘉博	1
漆塗り糸玉の復元	杳澤則雄・河田弘幸・柴田陽一郎	18
秋田県内の縄文時代前期初頭～前葉期土器群の様相再検討 －鳥野上岱遺跡Ⅱ群土器の再分類－	新海和広	31
藏骨器を伴う中世火葬墓の一例 －大仙市水木田遺跡出土の事例から－	高橋 学	61
菅江真澄の記録した「塚」－横手盆地の事例を中心に－	今野沙貴子	70
秋田県考古学関係文献抄録（7）－旧石器時代－	利部 修	75

発掘調査で分かる中世城館

千田嘉博*

はじめに

ご紹介を賜りました千田です。よろしくお願ひします。昨日から報告会に参加させていただきまして、充実した時間をすごさせていただきました。わたくしが勤めております国立歴史民俗博物館は千葉県佐倉市にあります。国立と名乗っていますが法人化いたしまして正式には、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・国立歴史民俗博物館という長い名称になっています。展示室を全部歩くと全長は3kmにもなり、勉強できますし、体も鍛えられそうです。

博物館としての常設展示、企画展示を行うとともに、共同利用機関としてさまざまな学際的研究に取り組んでいます。展示と研究の両面から歴史学・考古学・民俗学・博物館科学などの分野における研究拠点として機能するよう努力しております。

本日は報告会と合わせて開催されている展覧会で、出土した実物資料を間近かに見せていただくことができました。それぞれ担当の方が懇切な説明を観覧者にされていて、実物資料の迫力とともに、考古学の成果をわかりやすく伝えていくうという真摯な取り組みに感銘を受けました。このまま感動を胸に帰れたらよかったのですが、お話をさせていただくことになっておりまして、逃げ出すこともかなわず、舞台の上に出てまいりました。

「発掘調査で分かる中世城館」というタイトルでお話しさせていただきます。中世の城館や、地元の本荘城のような近世城郭も、今日では発掘調査が行われ、その成果からいろいろなことが分かってきました。以前は中・近世の城跡の研究といえば文献史学や建築史学が中心でしたが、発掘調査から城跡を考えていく意義は一層高まっています。今日は考古学からわかってきた城の実像を各地の発掘成果からお話をさせていただければと思います。よろしくお願ひします。

I. なぜ中世の城跡を考古学から調べるのか？

中世という時代は、みなさんもご存知のようにたくさんの文字史料がございます。文書、記録、絵図などといった紙に書いたり描いたりした史料があります。だから、わざわざ発掘調査をしなくとも分かっているじゃないかと思われるかもしれません。そこでまず、どうして遺跡としての城跡を調べる必要があるのか、ということを考えてみたいと思います。

最初に紹介したいのが、佐賀県にあります肥前名護屋城跡と陣跡群です（スライド1）。この肥前名護屋城と陣跡は、豊臣秀吉が文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）を起こして朝鮮半島に侵略した時の日本側の前線基地でした。名護屋城は多数の船を停泊させができる湾を押さえ、城と港との間には大規模な城下の町も建設されました。城と町を取り巻く広い範囲に、日本各地から肥前名護屋に集まつた大名たちの陣が築かれました。名護屋城跡と数多くの陣跡は、国の特別史跡に指定され、佐賀県立名護屋城博物館を中心に調査・研究、史跡の整備が進められています。

この名護屋城につきましては、たいへんよく知られた絵画史料である『肥前名護屋図（スライド2）』があります（佐賀県立名護屋城博物館蔵）。今は屏風仕立てになっていて、当時の名護屋城下町、あ

* 国立歴史民族博物館助教授（現：奈良大学文学部文化財学科助教授）

るいはその周間に広がっております陣跡の様子をみごとに描き出しています。このすぐれた絵画史料によって、当時の城の様子は手に取るように知ることができます。

名護屋城の本丸を見てみると、本丸の端には立派な天守が建っています。そして本丸には大規模な御殿群が建っている様子などぶさに知ることができます。ところで一般に天守のことを天守閣と呼びます。しかし天守を天守閣と呼ぶようになったのは明治以降のことで（たとえば通天閣などと同じ呼び方）、本来、天守が機能していた江戸期の史料に記されているのは「天守」で、「天守閣」ではありません。つまり「天守」は「天守閣」の略称ではなく、また「天守閣」は「天守」の正式名称でもないのです。「天守閣」は近代以降に広まった俗称なのです。だから学術用語としては天守を用いるのが正しいのです。

中世から織豊期にかけてたくさんの城がありましたが、多くの古文書に記されただけでなく、詳細な絵図史料まで残されているのは、たいへん希なことです。現地の名護屋城跡に行きましても建物はなにひとつ残っていませんし、石垣も崩れていますので、遺跡へ行って調べなくてともこの絵で見れば全部分かるじゃないか、そういう印象をもちます。

しかし本当にそう考えてよいか、もう少し細かくこの絵を見ていきましょう。『肥前名護屋図』では、本丸北東の角に大きな天守があり、本丸北西の隅に、2階建ての隅櫓があったことが描かれています。現地を歩いてみると建物は失われていますが、天守台や櫓台はしっかりと残っていますから絵のように天守と隅櫓があったことを推測することができます。やはり『肥前名護屋図』は正確だなあ、と感心するわけです。

『肥前名護屋図』を注意深く見ると、天守と隅櫓との間の石垣の上には塀が建っていて両者をつないでいたと描かれています（スライド3左）。ところが、今、現地を訪ねてみると、天守と隅櫓との間は塀ではなく、多間櫓（たもんやぐら）と呼ぶ平屋建ての長細い建物が建っていたことが礎石から確認できます。つまりこの点は絵画資料と実際の遺跡が大きく異なるのです。遺跡を調べることで、絵に描かれたのと違う肥前名護屋城の姿が見えてきたのです。

塀か多間櫓か、というのは城としては重大な違いといえます。これは絵師が見誤ったせいでしょうか？しかし、ほかの部分の詳細な描写から考えると、単純に間違いと評価すべきだとは思えません。しかも絵としては『肥前名護屋図』の本丸の姿でもおかしいわけではありません。謎が深まります。

もう一度、現地の遺跡を丁寧に観察すると、本丸を囲んでいる石垣の内側（つまり本丸の平場のなかに）、現在の本丸よりわずかに小さく外側の石垣と平行に伸びた石列があることがわかりました（スライド3右）。その石列をねらって佐賀県立名護屋城博物館が発掘調査をしました。佐賀県立名護屋城博物館は、考古学、文献史学、遺跡整備といった分野の専門家が協力して名古屋城跡と陣跡の調査・研究・整備・活用に取り組んでいるすごい研究機関です。ぜひ機会をつくってお訪ね下さい。

さて、調査成果に話を戻しましょう。発掘すると、現在見えている最終段階の本丸石垣の内側に、ほぼ完全に埋められたもうひとつの本丸石垣が見つかったのです（スライド4）。埋められていた石垣も高さは数メートルはあって外側の見えていた本丸石垣と同じ高さですから、埋まっていた本丸石垣も工事途中で放棄されたのではなく、立派に完成したものであったことがわかりました。

さまざまな情報から考えてみると、恐ろしいことですが豊臣秀吉は肥前名護屋城の本丸が石垣はもちろん天守や櫓、御殿も一旦完成した後に、わずかに敷地を広げる改修を命じたと判断できます。

これによって立派にできあがっていた本丸石垣を埋めて、外側に同じ高さの石垣を築かせ、新たにできた拡幅部分に多間櫓を建てたのです。天下人の力のすごさが伝わってきます。

この改修工事も大工事だったはずですが、なぜかこのことをはっきり記した文献史料はありません。そして精緻に描かれた『肥前名護屋図』も完成直後の肥前名護屋城の姿を描いたので、絵と実際の遺跡との間にズレが生じていたのです。つまり、こうした劇的な本丸の変化は、絵だけ見ていたのでは分からなかったといえます。そして、これほど史料に恵まれた肥前名護屋城であっても、実際の城跡を調べると文献史料や絵画資料とは違う面が見えてくるのです。細かなことまで分かる文献史料・絵画資料に恵まれていない多くの中世・織豊期の城について、遺跡から調べる意義がとりわけ大きいことを、このことはよく示すといえます。

だからといって文字史料から調べなくてよいということではありません。文字史料から分かったことと合わせ遺跡から分かることをどのように捉え・評価して考えていくのか、という学融合的な視点をもつと、今までとは違う一層深い歴史が見えてくるのです。中世・織豊期は多くの文献史料・絵画資料がありますが、遺跡から考えるのも同じだけ大切です。発掘からの研究は文献史料から考える歴史の補助学ではなく、文献史料から考える歴史とは視角の異なるもうひとつの歴史研究だからです。両者を対立的に考える必要はなく、先に申し上げたようにそれぞれのよいところを活かした「知の組み替え」=学融合を推進していくことが必要だと思います。

今日は、「発掘から分かる」ということになっていますが、発掘からしか考えないということではなく、発掘成果を軸にさまざまな文献史料・絵画資料などと組み合わせること=学融合的研究を意識して、お話を進めさせていただきます。

II. 城のつくり方を考える

1. 発掘から分かる城の地鎮

発掘で城が分かるということには、いろいろなことがあります。たとえば記録に「堀普請」と出てきても、どんな堀を掘ったのか、堀だけではなく堀と土塁を組み合わせて一緒につくったのかといった具体的なことは、記録だけでは分からぬことが多いです。たとえば記録があっても具体的なことが文献から分かりにくいものに、地鎮があげられます。詳細は秘伝とされていたので記述がそっけないことが多いのです。しかし遺跡から調べていくと、城は堀や土塁、櫓や門といった物質的な防御施設だけでなく、精神的にも守られていたことが見えてきます（スライド5）。

茨城県の鹿島城からは地鎮具が3種類も見つかりました（スライド6）。ひとつ目は素焼きの土師皿に墨で輪宝と梵字を記したものでした。輪宝は密教具ですが、もともとは武器でした。たいへんありがたいもので、自らぐるぐる回って、悪いものをやっつけました。輪宝と梵字を記した皿を埋めることで、城を築く土地を鎮めたのです。丸い土版に輪宝を型押しした土製品もここでは見つかっています。本来、輪宝は青銅などの金属製ですが、地鎮用の土製品がつくられていたのです。

さらに、鶴と亀を描いたためた吉祥像を墨書きした土師皿も埋められていました。末永く城と城主の家の栄えてほしいという願いが伝わってきます。実際にはこうした皿に五穀などが添えられていたと思われます。先にご紹介した輪宝を埋納することによる地鎮は、江戸時代にもつづいていました。山梨県の甲府城からは青銅製の板を切り抜いて輪宝をつくり、中央に金箔を押したものが見つかって

います（スライド7）。

土地を鎮めたのは輪宝や吉祥像だけではありませんでした。岐阜県神岡町にあります15世紀の館である江馬氏下館からは、呪文を記した土師皿が出土しました。呪文は2枚の皿をセットにして書かれています。一枚は水の神様、金の神様、土の神様、火の神様、木の神様に館の安寧を託し（スライド8）、もう一枚はそれぞれの方位の神様に地鎮を願いました。各方位に神があり、たとえば龍王を奉っていました（スライド9）。

地鎮がどのようにされていたのかを考えるのに、城跡から見つかる地鎮具から分析していくのは有効な方法です。しかし文献史料と合わせて考えると、より全体像が見えてきます。九州の島津氏に仕えた伊集院氏が整えた秘伝書は、特に興味深いものです（スライド10）。文献史料によると地鎮には戦の神様である軍神を勧請し、鍬入れのときには特別な所作や呪文があったことがわかります。季節によってよい方位、悪い方位もありました。複雑な儀式の中で、発掘で見つかった土師皿は埋納されていたのです。

しかし、すべてが分かっているわけではありません。高知県の西山城からは、ひょうに薄い青銅製品に金箔を押した青銅製品が見つかりました（スライド11）。出土状況から城をつくった時に埋められた鎮め物だと思います。本丸の一番高い所に穴を掘って埋められ、皿が一緒に出土しています（五穀を盛ったのではないかと推測されます）。この鎮め物と思われる青銅製品は特異なかたちをしていて管見では類例がありません。陰陽道の流派によるさまざまな違いもあったのかもしれません。まだまだ分からないことも多いのです。

2. 将軍の館はなぜ隅がへこんでいたのか？

土地を鎮め、城と城主の安寧を願う行為の痕跡は、埋めてしまって見えなくなる地鎮だけではありませんでした。今度は絵画資料を見てみましょう。中世の京都を描いた『洛中洛外図屏風』のうち、国立歴史民俗博物館が所蔵する『歴博甲本洛中洛外図屏風』は将軍の館であった柳の御所（やなぎのごしょ）をみごとに描いています（スライド12）。そしてこの館をよく見ますと、館の隅に「鎮守」と貼り札があり、神様をお祭りした御社（おやしろ）を置いていたことが分かります。実は四角い館にあった四つの隅で、この鎮守の御社がある方角は北東の隅にあたっていました。いわゆる鬼門の方角です。そこで鬼門を封じるために隅に鎮守の御社を置いたのです。この結果、館の北東隅は入り隅になって凹んでいたのです。鬼門から悪いものが館に入って、災いを起こすことを防いでいたのです。

将軍の館は京都のあちこちに移転しましたが、いずれも鬼門の方位は入り隅にしていたようです。館は高い堀をめぐらすだけではなく、神の力によっても守られていたことが分かります。一般に発掘調査をしますとすべてを合理的に説明しようと努めますが、もしこうした絵画資料がなかったら将軍館の隅のひとつがどうして入り隅になっていたのか、正しく解釈できるか難しいかもしれません。長野県の上田城は江戸時代の城ですが、本丸の北東の隅を入り隅にしていました。物理的な守りのくふうというより、これは鬼門よけと評価すべきでしょう。秋田県内の城館では、こうした事例はあるでしょうか？改めて見直してみると、たくさん見つかるかもしれませんね。

もちろん平地の館では北東が入り隅になっていないものもたくさんあります。そうした館は鬼門を

意識していなかった、と解釈してよいでしょうか？入り口になつてないなくても、館の内側に御社を設置していた可能性があると思います。そうした視点で発掘成果をよく吟味することが求められるのだと思います。国立歴史民俗博物館が建つ千葉県の佐倉城では、城の鬼門である椎木曲輪の端に御社を置いていました。今では御社は移転していますが、御社の台座がしっかりと残されています。

3. 中世の人びとは気が見えた

ここまで発掘や絵画資料から目で見て分かることを中心で検討してきました。それぞれの力によって城は守られていたのです。そうしたなかで中世の人びとが、城をどう見ていたかを示す興味深い史料があります。やはり九州の伊集院氏に伝わったもので、特別な力をもった中世の人は城の運気を見ることができたことを記しています（スライド13）。

敵の城とどう立ち向かうか、攻めるのか、退くのか、敵は攻めてくるのか、籠城のままか、情勢を判断するのはとても重要なことです。その情勢を判断するのに、城から立ち上る運気を判断するのが大切だ、との史料は説いています。勢いよく運気が立ち上る城は、城兵が元気で敵の勢いがあるのを攻めてはいけない。しかし、へなへなした運気が城から出ているときは、敵は弱っているので一気に攻めよ、ということになります。

すごく面白いのは、誰の目にも見える燃えるような運気が煙のごとく出ているときは、実は城が火事であり、強い運気とは違うので注意せよとわざわざ書いていることです。まじめなのが不まじめなのが中世の人も愛嬌があります。

現代の人間は、たとえば秋田県埋蔵文化財センターからは、どういう運気が出ているかとか、まじめに語り合うことはないと思います。中世の人びとは、わたくしたちが失ってしまったいろいろな部分、もっと見える世界や信心を強くもっていたんだと思います。幸いというべきか残念というべきか、出土例では見つかっていませんが、伊集院氏が伝えた史料には、秘伝中の秘伝として落城寸前の絶体絶命のときにだけ使うべき呪文も残されています（スライド14）。

それによりますと、もうこれはだめというときに起死回生の逆転をはかるためのまじないとして、敵の首を清め、さらに酒をかけ、その額に（戦国時代ですから敵の首を切って持ってきてきちゃうわけです）、咒（まんじ）を書き、そこに鳥・犬・敵などの不思議な呪文を描くとあります。それを時間とか方角とか決まったところに塚を築いて埋めると、攻めて来ていた圧倒的有利な敵はあら不思議、たちまち自滅するというのです。

首は残っていたとしても骨になっていますから、このような呪法の実態を考古学的に実証することは難しそうです。それにしても凄まじい秘伝・秘術の世界が城にはあったのです。

III. 中世前期の城

1. 守りの施設の成立

つぎに考古学的な成果を軸に、城の変化を考え直してみたいと思います。まず中世前期から見ていきます。国立歴史民俗博物館には中世の武士の館の模型があります（スライド15）。鎌倉時代の武士の館をイメージしてつくったものです。ただ最近の研究ではちょっと堀が立派すぎるとか、あるいは土塁も高すぎるとか、中世前期の館というにはできすぎのところがあります。ただし、ある時期まで

の武士の館はこういう姿であるというイメージを最大公約数的にして集めたものとしては、学史的意味は高いと思います。一般にも中世の武士の館といいますと、土づくりで四角い館をイメージするのではないかでしょうか。

ところが南北朝時代の14世紀になりますと違うタイプの城が現れてまいります。『太平記』にも楠木正成の千早城とか赤坂城とか、幕府軍を相手にたいへん高い山の上に立て籠って戦った記事が出てきます。山城の登場です。鎌倉時代、それから室町時代にても、幕府がきちっとしている時には、京都あるいは鎌倉に裁判所があり、武士も公家も問題が起きたら、裁判所へ訴え出ることで問題を解決できました。

ですから鎌倉武士は問題が起きたら、いきなり刀を抜いて斬りつけたり、戦って武力で解決したわけでは決してないのです。つまり鎌倉時代の武士の館の模型に立派な堀や土塁がありました。本拠を堀や土塁で守って自衛する必要は本来、政治や裁判制度がしっかりしていればなかったのです。何かあればそういう制度（裁判）を利用して訴え出て、裁判で決着をつけました。ところが中央権力が力を失うと、自力で問題を解決しなければならなくなります。それで14世紀の内乱時代であった南北朝時代や15世紀の後半以降の戦国時代には、本格的な山城が登場しました。

2. 切岸と堀—虚空蔵大台澗遺跡をめぐって—

高知県の木塚城を紹介します（スライド16）。この山城はまるでプリンを伏せたようなボコボコとした山からできていました。本当はより高い山の上にも山岳寺院を利用した城があったようですが、盆地を制圧できる丘の上に、木塚城がつくられました。春野町教育委員会の発掘調査によりますと、城の曲輪（防御した平場）の周囲は人工的な急斜面に加工されていました（スライド17）。この守りのための急斜面を「切岸」と呼びます。秋田県の埋文センターで調査された虚空蔵大台澗遺跡（こくぞうおおだいたきいせき）でも、厳重な切岸をめぐらしたことのご報告がありました（スライド18）。

切岸をつくることによって、曲輪への侵入を防いだわけです。登れないくらい急な斜面にしたところに意義がありました。先ほどまで精神的な城の守り方を見てきましたが、切岸は物理的に侵入を阻止する守りの施設です。そして14世紀には切岸という急な壁によって城を守った山城が築かれたことが分かってきます。

この後、15世紀の室町時代から16世紀の戦国時代になると、切岸とセットでその裾に堀をめぐるようになりました。空堀と切岸という組み合わせで、城をより強く守るようになったのです。しばらく前までは、そういうふうに説明されてきました。ところがご報告があった虚空蔵大台澗遺跡では、11世紀後半～12世紀にたいへん立派な切岸と、その裾をめぐる空堀がつくられたことが判明しました（スライド19・20）。このことは従来の城郭史の常識を塗り替える成果といえます。遺物をまったく知らないければ、15・16世紀の城と誤解したかもしれません。

日本列島の北の地域では、中世の城としてはひじょうに早い段階である12世紀に、切岸と堀とを組み合わせた防御施設がすでに成立していたのです。これまでの城の歴史は関東や畿内の城をもとに考えられてきました。しかし今回の成果は、城の歴史を考える上で、秋田県をはじめとする北の地域の先進性を明確に示すものです。

先ほどのご報告の際に会場からご質問もありましたが、奥州藤原氏との関係、前九年の役・後三年の役との関連の中で、この地域にいち早く、室町時代の防御施設を先取りしたような、城郭プランが出てきたと評価すべきです。すると北の地域だけでなく西の地域との関わりも視野に入れて検討する必要があります。ただし同時期の日本列島の西の城は、切岸と堀とをセットにすることを実現していません。14世紀になっても切岸主体です。そういう意味では、西の城と東の城はかなり違ってたのです。

3. 北の城と沿海州の城

では海を渡って、さらに北のロシアの沿海州（ウラジオストック周辺）ではどんな城が築かれていたのかという課題が出てきます。日本列島の北の城の成立に大陸からの影響はあったのでしょうか？ウラジオストック市のそばにあるニコラエフカ土城は、12世紀～13世紀に使われました（スライド21）。平地の城郭都市で、周囲には巨大な城壁をめぐらします。ほとんど完全な状態で残っております（スライド22・23）。

同時期の山城もあります。やはりウラジオストックのそばにあるシャイガ山城は、稜線に築いた城壁で谷筋を囲い込んだいわゆる朝鮮式山城の形態をとりました（スライド24・25）。城内には鍛冶工房をはじめとしたさまざまな工房群、段々に削った削平地に建ち並ぶ住居群、政府跡や倉庫群などがあったことが発掘によって判明してきています。山の尾根筋に築いた土塁線に開いた出入口には、鍵の手状に土塁を曲げた外枡形を備えて守りの工夫をしていました。また塁線上には馬面と呼ぶ、側射もできる櫓の張り出し（カタバトルの台座）が点々と設けられていました。

こうした城郭の構成要素を比較していくと、沿海州の城と日本列島の北の城とは異なっており、單純に伝播や影響では説明できません。そうすると虚空蔵大台滝遺跡のような12世紀の城はどのように成立したのか、東アジア全体の中で考えるべき大きな問題だといえます。報告書がまとめられることを楽しみに待ちたいと思います。やはりここでも資・史料を比較したり境界を越えて学融合的に考える視点が重要になります。

IV. 中世後期の城

1. 戦国期拠点城郭への転換

つづいて室町時代、戦国時代のお城について見てまいりたいと思います（スライド26）。室町時代の城は、先ほど『洛中洛外絵図屏風』をご覧いただきましたけれども、あいだ将軍の館を基本にいたしまして各地の守護大名が、それぞれの館一いわゆる守護所と呼ばれる館一をつくりました。応仁・文明の乱の後、それぞれ各地の大名は、自分の力で地域を治めていくということの必要に迫られました。

その結果、平地の館を拠点にすることをやめて、戦国期の拠点城郭と呼ぶ新しい山城が出現してきました。どんな城かと申しますと、政治機能、居住機能、文化的機能、宗教的機能、そして城下の経済中心的機能、そして防御機能といった、館と砦に分離していた諸機能を統合したのが戦国期拠点城郭です。地方によって戦国期の拠点城郭が出てまいります時期は、微妙な違いはありますけれども、大きな転換としては1530年代、元号では天文年間が転換点になったと考えております。

現在、米沢市所蔵の『上杉本洛中洛外図屏風』には細川管領邸が描かれています（スライド27）。管領は將軍にお仕えし最も高位な武士でした。正面に2つの門—正式な門と通用門—がありました。正式な門の内側には大きな広場があり、広場に面しては主殿という正式な儀式を行う建物がありました。また館の中には大きな庭がありまして、庭に張り出した会所と呼ぶ人間的な関係を深める儀礼や宴会・文芸活動をするという空間がありました。その奥には日常の住まいなどが建ち並んでいました。こうした館の構成はまさに將軍の館をお手本にしたものでした。

あまり残っていませんが、主殿といった建物も現存しているものがあります。たとえば滋賀県の園城寺光浄院の客殿（国宝）は、『上杉本洛中洛外図屏風』に描かれた細川管領邸の主殿とそっくりです（スライド28）。館のプランの規範性の強さが分かります。

2. 観音寺城

戦国時代の第2期、16世紀第2四半期になって、館を中心とした武士の拠点から山城に変わっていくようすを、今度は山城側から見ていきたいと思います。その事例として滋賀県の観音寺城を紹介します（スライド29）。城主の六角氏は、鎌倉時代以来の由緒深い武士で、もともとは小脇館（おわきやかた）という平地の館を拠点していました。まだ内部の発掘調査が進んでおりませんけれども、先ほどご覧いただいたような、主殿・会所をもつ將軍の館を模した館であったと推測されます。

六角氏は戦国時代になりまして平地の館を捨て、比高差300mもの高い山の上に本拠を移動しました（スライド30）。観音寺城はおびただしい曲輪から構成されていました（スライド31）。六角氏の日常の館は山の主要な尾根筋にありました。六角氏をあるとき連歌師が訪ねてきました。そのとき六角氏の当主は伏せっておりまして、家臣とは会わないといっていたのですが、親しい連歌師が参りましたので会おうということで、いろいろ楽しく宴を開いた記録が残っています。

そのとき館から遠くの大和の国ですか伊賀の国とかまで見えたと書いています。館が山の上にあったことがはっきり分かるのです。從来の常識では山城は合戦のときに立て籠る、日ごろは麓の館に住んでいて、いざというときだけ山城へ逃げ込む、と考えられてきました。しかし病気になって寝込むのも山の上ということは、大名自身の生活の主体が山城にあったことが確実です。

観音寺城内の尾根筋にある池田丸では発掘の成果を藤村 泉氏が分析されて、建物プランが詳細に復原されました（スライド32・33）。会所と渡り廊下でつながる常御殿があり、常御殿には台所、居間、寝所、広間、茶室、花壇もありました。曲輪の奥には蔵もありました。たいへん整った御殿でした。これは到底、臨時に逃げ込むという砦的な施設ではありません。實際、出土した遺物でも、擂鉢、壺・甕、灯明皿、硯、水滴などが見つかっていて、この点からも山の上でくらしたことが判明するのです（スライド34）。

3. 村の城

大名の城の動きを見てまいりました。しかし戦国時代には、地域に密着した村の殿様、あるいは国人領主という武士たちの動きを捉えることも重要です（スライド35）。大名というのは、江戸時代の大名に最後はつながっていきますように、大名を頂点にいたしました縦の権力編成を組んでいこうとしていきました。ところが中世というのはたいへん面白い時代でありまして、それに対抗して横のつ

ながりでみんなが連合して地域を治めていくという、そういう動きが非常に活発に行われておりました。戦国時代はそうした大名の縦の編成と中世の横のつながりといったものが激しくぶつかり合うという時代になってまいります。

地域からの動きによってもたくさんのが城館が築かれました。たとえば三重県の風呂谷館は、まわりに堀をめぐらし土塁を備えた四角い平地の館でした（スライド36）。内部に建っていた建物は、農家の立派なもののようなつくりでした。先ほど大名たちの將軍の館を模した主殿や会所を備えた上級武士の住まいを見てきましたが、地域の中から現れた村の殿様・国人領主の館には主殿や会所といった典型的なプランに則った建物はまったくありませんでした。先に述べましたように江戸時代の農家の建築に近い建物プランでした。

そういった、まったく上級武士の館のあり方とは全然違う、別のタイプの館が下克上の流れに沿って広く造られていました。そうした村の殿様・国人領主の館も、実はいろいろなタイプがありました。三重県の木原氏城は、5つの館がちょうど丘の隅にきれいに横に並ぶという城でした（スライド37）。ひとつひとつの館は、お互いの間の堀ですかと土塁を共有し合って、仲良く並んでいました。一人の強い殿様が村を治めていたというタイプだけでなく、村の中の有力な人びとが擬似的な血族関係をつくったり、あるいは実際に婚姻形態を結んだりして本当の同族関係になり、有力者連合という形で村を治め、さらには村と村、地域の領主層が連合して横に連結した政治構造を構成したのです。

それを中世の用語でいいますと、一揆（いっき）となります。そうした領主連合が盛んに行われるると、誰かが飛び抜けた存在になるのは難しく、横並びの政治構造に対応した横並びの館が広く分布しました。城の形態は、まさに政治の形態に対応したのです。

4. 岩倉館に見る守りのくふう

室町・戦国時代の城館の話ををしてきました。さて今回の報告会で岩倉館跡のご成果をお伺いすることができました。発掘によりますと15世紀頃の室町時代の館跡で、たくさんの曲輪を組み合わせた山城でした（スライド38）。残念ながら土取りで城跡の一部はすでに失われていました。先に虚空蔵大台滝遺跡では切岸の下に堀がめぐるという、進んだ防護方法をとっていたのですが、岩倉館では切岸で館を守ったところが大部分でした。このことだけを取り出すと、発展の順番が逆転してしまっています。

もちろん進んだ部分もありました。岩倉館の中心部分から伸びた尾根筋を、すたずたになるほど堀切りを入れて断ち切っていたのです（スライド39）。岩倉館の殿様は、よほど尾根筋から敵が攻めてくることを心配していたようです。こんなに堀を築いたのは、心配で夜も寝られなかったのかもしれません。こうした弱点を克服した尾根筋の堀切りは興味深いものです。

もう一つ面白いのは、堀切りで切りまくった尾根筋の堀切りのひとつに尾根を完全に切断せずに、堀り残した所があることです（スライド40）。ふつう土橋といいます。しかし尾根筋は切って切って切りまくっていましたから、土橋としても向こう側にはとても行けないですね。ですから、何らかの改修の結果を示しているのか、堀底を伝って尾根の右から左へ通り抜けることを防ごうとしたものかもしれません。いずれにしましても、一つひとつの要素を見ていきますと、細やかな配慮をしてつくったことが偲ばれます。

V. 発掘の成果を活かす

秋田県埋蔵文化財センターは毎年報告会を開催され、また発掘の主要な遺物を実際に見ることができます。こういった取り組みは、発掘調査の重要性の理解を深め、発掘成果を共有して成果を地域に活かしていくために、重要で意義ある活動です。最後に、そうした成果をいかに活かしていくのか、という点から、ベルギーのエーナム遺跡博物館を紹介させていただきます。

エーナムはベルギーのゲント市の南にあります。中世以来の城や修道院とそれを核にした町の遺跡です。その遺跡を中心に遺跡整備や遺跡博物館の整備が進んでいます。エーナム遺跡博物館の展示室は、日本の歴史博物館の展示室にはない、波うった形の展示ケースです（スライド41左）。展示されている遺物の量はとても少なく、みんなきれいなアクリルのケースに入れられています。ライティングも下から上から間接照明みたいな形で当たりとか、なんかブティックに来たような、そういうきれいな展示あります。

日本の歴史博物館に親しんでいる者としては、もっと展示してよ、なんかこれじゃ物足りないよ、どうしてこんなちょびっとしか展示してくれないのかなあと思うのですけれども、それには深いわけがありました。その展示ケースの反対側には巨大なモニターと連動したタッチパネル画面があります。それを触ることで大画面と連動したコンピュータグラフィックスを自在に操れるのです（スライド41右）。

ふつうコンピュータグラフィックスは、遺跡のもっとも整備された時期を描きますが、面白いのは、任意の場所で、タッチパネルを指で上から下へ、下から上へなどっていきますと、コンピュータグラフィックスが指と連動して、描かれた景観がどんどん古くなったり、新しくなったりするのです。時代の変遷をもコンピュータグラフィックスとして描いています。具体的には1500年、1250年、1150年、1040年と同じ場所の移り変わりが映像として示されます。エーナムという場所を長い間発掘調査しておりますので、変遷をたどることができるようになっているのです。

この画面は多機能でありますと、チョンチョンとクリックしますと、好きな所で画像をアップで見ることができます。アップにしますと、さらに情報画面に飛ぶことができるようになっていて、画面が切り替わって、遺物の写真やデータを見ることができます。年代、機能を決めるために、決定的な役割を果たした遺物の情報が呼び出せます。そして、その遺物の実物をモニターと対になっている展示ケースで見られるというわけです（スライド42）。

背後に並んでいる展示ケースというのは、このコンピューターグラフィックスと連動する形で有機的に結び合って、こういったことから歴史像が見えて来ただんだということを示すという、そんなつながりで展示しています。よく作り込んだ展示です。

次の展示室に参りますとたいへんガラッと雰囲気が変わりまして、「エーナム千年の宴」という展示になります（スライド43）。30人ほどの原寸大の表情や衣装まで精密に再現された古代から現代までのエーナムにくらした1000年間の人びとが宴会をしています。人形の前に円盤状のテーブルがありまして、その中央に遺物が並べられています。その周りには緑色に光るスイッチが並んでます。このスイッチはテーブルの中央の遺物に対応しているのです。

奥の人形は、実は発掘で見つかった遺物をもとに再現された人間なのです（スライド44）。たとえば卵の殻が出土していますが（スライド45）、卵のかけらのスイッチを押しますと人形の中のひとり

の女性にスポットライトがあたります（スライド46）。そして背後の大画面に、その女性が映像で登場いたします。発掘調査の時、卵のかけらが中世の層から出てまいりました。ふつう、そうしますと、ああ中世の人びとも卵を食べたんだなというぐらいのことと、終わってしまいます。

ところが、ここの博物館では中世の時代に修道院に卵が運ばれてきて料理に出されているっていうことは、その卵を朝集めてきて、修道院に隸属的に仕えているそういう人々がいたに違いない。いたから、そういう遺跡に殻が放り込まれているんだろうと、だからそういう人を復原しようということで、ここでは1253年頃の隸属的立場の18歳の女性を復原したのです。

こういうふうにエーナム博物館では発掘の成果というものを、どこまでわかりやすく歴史を再現して伝えられるかを、極めようとしています。ちょっとやりすぎているかもしれません、市民にとってどんな歴史展示がわかりやすいのか、共感してもらえるのか、踏み込んでいます。ただ発掘で見つかった遺物を並べることで、歴史を考えて下さいという展示がもっとも優れてるのか、それだけではなく直接、人間をモノ資料から再現し、その人に直接語ってもらうことで示される歴史のわかりやすさは魅力的に思えます。日本では、まだここまで踏み込んだ博物館はありませんが、考古学の資料をどう活かしていくのか、ということも、もっともっと知恵を絞る必要があるのでしょう。

遺跡を解明する楽しさ、土器を読み解くよろこびが尽きることはありませんが、モノとしての観察に留まらず、モノからそれぞれの時代の人間の喜びや苦しみをも見通していくことに、人びとが共感できる歴史があるのではないかと思います。そうした意識をもって中世の城跡を研究ていきたいと願っています。最後までご静聴下さいまして、ありがとうございました。

（追記）

本稿はテープ起こしをしていただいた講演記録をもとに、大幅に補筆したものである。

なお講演時に千田は国立歴史民俗博物館・研究部に属していたが、2005年4月から奈良大学 文学部 文化財学科に異動している。

I. どうして城跡を調べるのか?
—肥前名護屋城跡から—



スライド 1



名護屋城中心部（肥前名護屋図）
（註1）

スライド 2



「肥前名護屋図」と外堀の構造
（註2）

スライド 3



発掘調査で検出された石垣（名護屋城）
（註3）

スライド 4

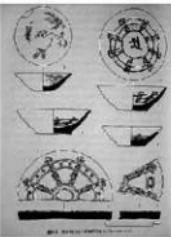
II. 城館と地鎮

- 中世の城館は堀や土塁で守っただけでなく、さまざまなまじないや陰陽道の儀式で守られていたことが発掘によってわかつた。

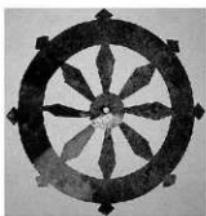


スライド 5

吉祥・輪宝による地鎮



スライド 6



山型城 甲府城出土 輪宝
（註4）

スライド 7

呪文による地鎮

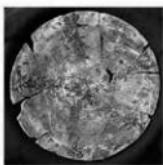
- 一億元水神
- 口口元金神
- 五儀元土神
- 口口元火神
- 三主元木神



呪文を書いた土御皿をあわせ口にして
四方に埋納する（15世紀 江戸氏下鏡）
（註5）

スライド 8

- ・中央黄帝黄龍王
- ・西方白帝白龍王
- ・北方黑帝黑龍王
- ・東方青帝青龍王
- ・南方朱帝朱龍王



(註4)

スライド9



中世の城館に際しての地鎮・草神勅諭

(註5)

スライド10



高知県 西山城 本丸の跡地

11

スライド11



15世紀前半の足利御室御所
(足利本治中治外園庭園)

(註6)

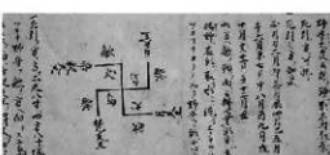
スライド12



中世の運気の読み方「風氣論」

(註7)

スライド13



中世の戰勝の呪法

(註8)

スライド14

III. 中世前期の城館



中世の武士の館(模型)

(註9)

スライド15



南北朝期の山城—高知県木堀城—

スライド16



高知県木塚城の調査の様子

17



秋田県 虚空蔵大台庵遺跡 全景

18

スライド17



秋田県 虚空蔵大台庵遺跡の切岸と空堀

19

スライド19



秋田県 虚空蔵大台庵遺跡の空堀

20

スライド20



ニコラエフカ土城

21



ニコラエフカ土城

22

スライド23



ニコラエフカ土城

23

スライド22



シャイガ山城

24

スライド24



シャイガ山城

スライド25

IV.守護・戦国大名の拠点

- ・将軍の館を手本とした守護大名段階の平地居館(守護所)から戦国期拠点城郭への変化
- ・戦国期拠点城郭は、政治・居住・文化・宗教・経済・防御の諸機能を統合した拠点
- ・守護所から戦国期拠点城郭への転換は、1530年前後(天文年間)。



「上野本洛中落外圖屏風」による細川吉矩邸

スライド27

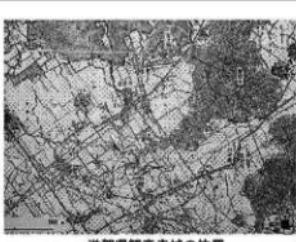


滋賀県 関城寺光明院各殿

スライド28

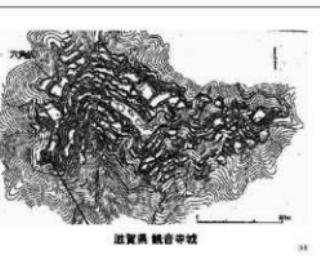


スライド29



滋賀県観音寺城の位置

スライド30



スライド31



滋賀県 観音寺城中心部

スライド32

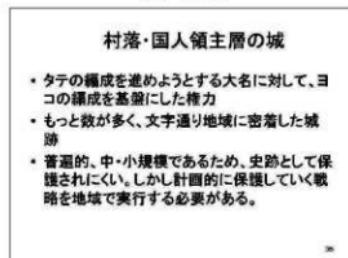


スライド33



滋賀県 観音寺城の出土遺物 (註12)

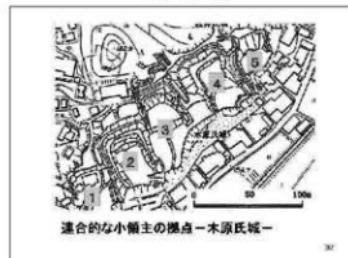
スライド34



スライド35



スライド36



連合的な小領主一本原氏城—

スライド37



秋田県 岩倉館跡

スライド38



3つの堀 (秋田県 岩倉館跡)

スライド39



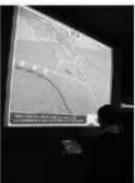
堀の中の掘り残し部分 (秋田県 岩倉館跡)

スライド40

V.発掘成果を地域に



ベルギー エーナム博物館



スライド41



展示物と運動した映像パネル
(ベルギー エーナム博物館)

スライド42



出土遺物と千年の宴
(ベルギー エーナム博物館)

スライド43



様々な時代の人々
(ベルギー エーナム博物館)

スライド44



出土した脚の股
(ベルギー エーナム博物館)

スライド45



脚の股から復元された当時の女性
(ベルギー エーナム博物館)

スライド46

註1 所蔵：佐賀県立名護屋城博物館

註2 高瀬哲朗 『名護屋城の築城と改造について』 「佐賀県立名護屋城博物館研究紀要第1集」 1995(平成7)年 佐賀県立名護屋城博物館

註3 所蔵：岐阜県・飛騨市教育委員会

註4 同上

註5 所蔵：東京大学史料編纂所

註6 所蔵：国立歴史民俗博物館

註7 註5に同じ

註8 同上

註9 註6に同じ

註10 所蔵：山形県・米沢市上杉博物館

註11 資料提供：滋賀県・長山圓城寺

註12 所蔵：滋賀県立安土城考古博物館

漆塗り糸玉の復元

沓澤則雄^{*1}・河田弘幸^{*2}・柴田陽一郎^{*3}

1 はじめに

撚った糸に漆を塗った漆糸を束ねて結んだ、あるいは編み込んで作った「糸玉」は、縄文時代独自の加工技術で作られた製品である。この糸玉は全国でも検出例が12例と少なく、新潟県の青田遺跡、福島県の荒屋敷遺跡、北海道の忍路土場遺跡など東日本を中心に主に後期から晩期にかけての遺跡で出土しており、赤漆を塗ったものが多い。このうち、繊維を束ねて途中で結んだ例は出土しているが、^(註1)ドーナツ形のものは秋田県の漆下遺跡以外に類例がない。本稿ではそのきわめて珍しい赤漆を塗った糸玉の復元について、その経緯、実際の作業工程を記録したものである。

復元に至る経緯については次のとおりである。秋田県埋蔵文化財センター主催の「平成16年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会」は、平成17年2月19日（土）～20日（日）に、本荘文化会館を会場にして実施された。ここでは、北秋田市（旧 森吉町）漆下遺跡の報告と出土品展示もあり、その展示品中に漆塗り糸玉（縄文時代後期中葉～約3,500年前）が含まれていた。この折り、秋田県埋蔵文化財センター北調査課長の小林克から、伝統工芸である川連塗りなどの漆器産業が盛んである湯沢市（旧 稲川町）が柴田の出身地であることから、漆塗り糸玉を復元してくれる人を紹介してほしいとの依頼があった。

同年3月、沓澤則雄氏の親戚である三春恒子氏を通じて、全国で初めて出土したドーナツ形の漆塗り糸玉の復元を依頼したい旨を伝えていただいた。以前から日本の先史時代、とりわけ縄文時代に深い関心を持ち、それをイメージした作品を発表していた沓澤氏は大いに関心を示し、いづれ見てもらえることになった。この後は、沓澤氏宅を柴田が何回かお邪魔することになったのでその概要を記す。

4月初旬、糸玉の出土状況写真を見てもらい、今の技術で同じものができるか、またできるとすればその行程を記録に残したいことを依頼した。5月初旬、再度訪問し、復元の快諾を得る。沓澤氏によれば『古代より防腐剤として使われていたベンガラと、強い接着性のある生漆があれば復元できる』ということであった。ベンガラと生漆は手元にあるので、原材料の可能性がある植物繊維の「カラムシ」の入手を依頼された。5月下旬、小林が入手したカラムシ糸を持参した。この時、沓澤氏が知人から提供していただいた4種類のカラムシ糸を見せてもらった。この頃から復元作業が開始され、7月中旬に復元作業が終了した。（柴田）

2 漆下遺跡の概要

漆下遺跡は、森吉山の北麓を西流する小又川左岸の段丘上に立地する。当該地域では森吉山ダムが建設中で、平成13年度、14年度、18年度の3カ年にわたり発掘調査が行われた。遺跡の面積は約18,000m²と広大であり、縄文時代後期を主体とする大規模な墓域ならびに祭祀関連遺跡である。

遺跡の主体である西部には、後期中葉以降を中心とする掘立柱建物跡や土坑・配石造構などが密集する。遺跡縁辺部には約100棟の掘立柱建物跡が環状に建ち並び、この掘立柱建物跡と切り合いながら約500基の土坑やフ拉斯コ状土坑が作られている。掘立柱建物跡はほとんどが4本柱や6本柱の方

*1 漆芸家－秋田県湯沢市川連町在住（日展審査員・会員、現代工芸美術家協会理事、秋田県文化功労者）

*2 北秋田市立鷹巣南小学校教諭（元 秋田県埋蔵文化財センター北調査課学芸主事、漆下遺跡平成14年度調査担当者）

*3 秋田県埋蔵文化財センター南調査課副主幹（兼）調査班長

形であるが、亀甲形を呈するものも数棟ある。炉は伴わず、住居として使用されたものか、祭祀関連施設などの機能については現在検討中である。土坑やフラスコ状土坑には、副葬品として土器や石器が埋納されているものや、土坑上面に礫を配するものもあり、ほとんどが墓と考えられる。礫を配する土坑の中には、いわゆる日時計状の形態を呈するものが1基ある。この日時計状配石遺構の周りには別の配石遺構が数基構築されており、さらに梢円形を呈する土坑墓が軸を同じくして並んでいる。これらの遺構は後期中葉に構築されたと考えられる。本遺跡の掘立柱建物跡や土坑が環状に巡っているのは時期ごとの小単位の集まりの結果としてであろうが、中央部には遺構が少なく広場として機能していたと思われる。

遺跡北側斜面では、比高差5.8mの斜面に長さ16mにわたり石積階段が見つかった。斜面を浅く掘りくぼめ、約80個の扁平な川原石を丁寧に積み並べている。礫を設置するための掘り込みから出土した土器により、この階段は後期後葉に作られたと考えられる。斜面下の低位段丘面では遺構は見つからず、小又川を舟で行き来した人が登り降りしたのであろうか。

東部には、「X字状」、「日の字状」・「弧状」・「列状」など様々な形態をした配石遺構が数多く構築されている。平成14年の調査では、挙大の礫を半円状に敷き詰め内側に配石遺構群を作ったと考えていたが、平成18年度の調査により、敷き詰めたと考えていた礫が段丘の基盤の中に含まれている礫であることが判明した。さらに、これらの配石遺構のほとんどは下部に掘り込みを伴い、墓であることも確認された。また、遺構内から出土した遺物により、この配石遺構の構築時期は当初考えていた後期初頭ではなく、後期中葉の可能性が高いことが分かった。いづれにしろ、平成18年度で遺跡の全範囲の発掘調査が終了し、本遺跡の解明に向けて大きく前進した。(河田)

3 捨て場について

塗下遺跡の南側高位段丘面には二重鳥遺跡群が立地する。この高位段丘面西北側には沢が開析し、塗下遺跡に伸びている。この沢により、塗下遺跡東側と南側に低湿地が形成される。東側の斜面にはS T101捨て場とS T311捨て場が形成され、南側斜面にはS T202捨て場が形成される。また、西側斜面は縄文時代中期前葉以後に開析された沢が入り込み、S T01捨て場が形成される。この4カ所の捨て場からは、土器や石器、土偶や土製品、石製品などの遺物が整理用中コンテナで約3,000箱出土しており、復元された土器は1,000個体を超える。

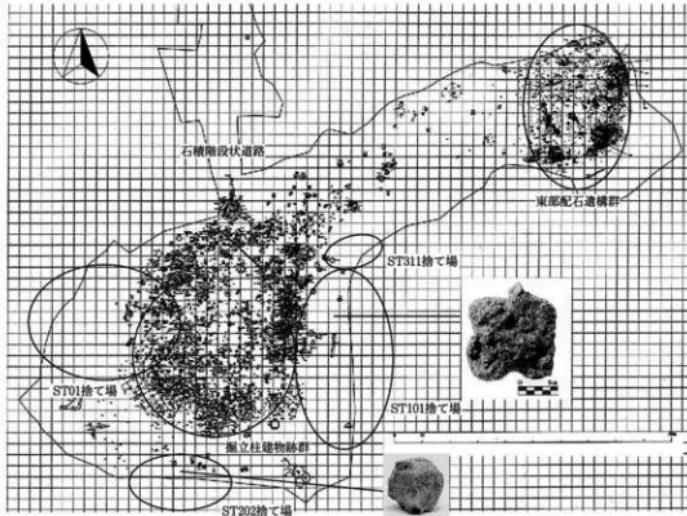
S T202は縄文時代に捨て場として利用されていたが、捨て場の規模はそれほど広くなく遺物量も他の捨て場に比べるとずっと少ない。S T202は縄文時代にすべて埋まっていたわけではなく、中世に台地上の平坦面の南側が造成され、それに伴い一気に埋め立てられたと考えられる。埋め立てた斜面には、生産に関わると考えられる炉が2基構築されている。この捨て場からは、マスクでも一躍有名になった人面(猿面)付土器が出土したが、これは中世に埋め立てた時に混入したものであり、詳しい時期は不明である。

S T01は後期全般にわたり捨て場として利用されており、捨て場面積としては4つの中で最大である。前葉では捨て場に焼き火痕も見られ、何らかの祭祀的な行為が行われていた事を伺わせる。中葉になると、炭化材が混入している層から土器破片が出土する。これは、平地で何らかの祭祀的な行為を行いそれを沢に破棄したと考えられる。また配石遺構も構築される。後葉になると谷頭部はほとん

ど埋積し、整地された可能性も考えられる。掘立柱建物跡や配石遺構、焼土遺構が形成され、崖際から遺物が投下される。これらの遺物には完形土器が数多く見られ、この捨て場自体で何らかの行為が数多く行われたのだろう。

S T101とS T311はごく低い稜線により分けられているが、本来は同一の捨て場と見なしていいだろう。このS T101は、遺物の出土量的に見ると本遺跡最大の捨て場である。この捨て場はS T01同様に後期全般で活用されているが、すべての時期において完形土器の出土が多い。捨て場には径1m程の焼土が厚く広がるなど祭祀的な行為が行われた痕跡が多く見られる。それとともに、大量の土器や石器、土製品や石製品が出土している。赤漆が塗布されている注口土器や、黒漆と赤漆で表面と裏面に文様を描いた浅鉢形土器などが出土した。また、長さ70cmもある後期後葉と考えられる石棒が完形のまま見つかった。そのほかにも、櫛の一部や植物で編んだ籠（装飾品の可能性もあり）の一部も見つかっており、量的にだけでなく質的にも目を見張るものが多い。そんな中でも、県内で初めて出土した「糸玉」は、縄文時代の工芸技能の高さを示す代表的なものであろう。

櫛や籠、糸玉は低湿地に捨てられたことで腐らずに見つけることができたものであるが、出土したときの糸玉はさらに小さな赤い点々が數ヶ所見えるだけであった（写真1）。供伴する土器には完形品ではなくわずかに土器破片が数点出土したのみであるが、出土した層からこの糸玉は後期中葉の所産と考えられる。糸玉が見つかったのはほんの狭い範囲であり、何か袋のようなものにでも入れて捨てたのかもしれない。見つかった糸玉は、すべて土ごと切り取り保存処理を行った。その後、この糸玉が径15mm程のドーナツ状を呈していることが分かった（写真2）。糸玉は秋田県では初見であるが、東日本を中心に後期から晩期にかけて出土している。しかし、本遺跡のようにドーナツ状を呈する例はなく非常に珍しいと言える。（河田）



漆下遺跡遺構配置図



写真1 漆塗り糸玉の出土状況



写真2 保存処理後の漆塗り糸玉

4 集落の変遷について

平成18年度の発掘調査により、配石造構が多数検出された遺跡東側で縄文時代前期中葉の堅穴住居跡が検出された。当該期の土器埋設炉は検出されていたが、堅穴住居跡の検出により前期中葉に初めて集落が営まれたことが判明した。その後、中期中葉になり西側に集落を営む。さらに平成18年度の調査により、複式炉を有する堅穴住居跡が東側で検出され、再び東側で集落が営まれたことが分かった。その後、後期初頭に東側と西側を結ぶ細長い尾根上に集落を形成する。堅穴住居跡が5軒見つかっており、すべて立石+土器埋設炉を有する。また、平成18年度の調査で隣接する東側で数基の土器埋設造構が検出された。この土器埋設造構には焼土が伴うことより堅穴住居の土器埋設炉の可能性がある。時期的には尾根上に形成された堅穴住居とはほぼ同時期であり何らかの関連があるのかもしれない。いずれにしろこのように後期初頭には、遺跡の東側に集落が形成される。後葉の堅穴住居跡は西側南端部で重複しながら数軒^(註2)検出されている。このように漆下遺跡では、小集落が広大な遺跡内を時期により異なる場所で営まれていた。

遺跡の主体である縄文時代後期に営まれていた集落は小集落であり、検出した多数の造構や出土遺物に見合うものではない。これらの造構を構築した人々はどこから来たのか、また掘立柱建物の機能など、この大規模な祭祀関連遺跡の今後の解明に期待がかかる。(河田)

5 糸玉の復元

秋田県埋蔵文化財センターから、北秋田市（旧 森吉町）にある漆下遺跡より出土の赤色漆塗糸玉を、平成17年5月に拝見した。

半分土に埋もれている状態であった。話によると、約3,500年前（縄文時代後期中葉）のものとの事である。土に埋もれた二つの赤いドーナツ形の糸玉で一つは完全な形を留めているが、もう一つはコイル状に巻いた糸の間から微かに芯と思われる繊維の痕跡がみられた。顕微鏡による漆塗り糸の断面観察報告によると漆の部分は残っているが、中の繊維は風化して無い様で、当時どのような繊維で形作ったのかということから、私の作業が始まった。

種々の参考資料と秋田県埋蔵文化財センターの話により苧麻ではないかとの推測から、苧麻の繊維と糸の調達から糸玉作りに入った。秋田県埋蔵文化財センターで苧麻の繊維を探してくれた。また、工芸仲間の織物を作っている方に苧麻の話をしたら、四種類の糸を撫ってくれた。その中から最も粗い撫りで丈夫な手編み糸を選んで使ってみた。国産生漆とベンガラはいつも私の仕事で使っているので手持ちのものを使い、まず試みに生漆とベンガラを混ぜ合わせベンガラ漆を作り、苧麻の糸と繊維に浸み込ませてみた。ベンガラ漆を作るにあたって、縄文時代には出土品により白状の石（石皿）を台に、丸い石でベンガラをすりつぶし生漆と混ぜ合わせたようであるが、私の作業の中では木製（柄材）のものを使った。道具も材料も理屈は縄文時代のものと同じである。ベンガラ漆はよく浸み込んで約1日で乾燥（固化）した。乾燥した糸は固い針金状になった。完全乾燥してしまったら固くなってしまうので、漆糸玉をつくる作業の中では完全乾燥する以前に、糸を卷いたりしなければならないのではないかと思った（以下の写真15～18の展示パネルは北調査課が作成した）。

作例1（写真15）

まず、一つの方法で糸玉を作った。直径7mm、長さ12cmの細い木を削って芯を作る棒を作り（縄文時代には木の枝でも使ったかもしれない）、それに苧麻繊維を巻き付け、輪を作った。その周間にコイル状に苧麻糸を巻き1.7cmの糸玉を作った。それにベンガラ漆をたっぷりと指で浸み込ませて見た。毛管現象により糸玉の中迄、漆がよく浸み込んだ。それを乾燥させたら外側は約1日で固くなつたが、中はまだ充分乾燥しなかった。二日目に糸玉はかなり固くなつたので、もう一度ベンガラ漆を指で塗った。漆が乾燥したらツヤのある糸玉が出来た。

作例2（写真16）

芯になる苧麻繊維にベンガラ漆を浸み込ませ、作例1同様に木の棒に巻き付け、形を作った。1日で固く乾燥状態になった。糸にベンガラ漆を浸み込ませ乾燥させる。漆で固くなつた芯にこの糸をコイル状に巻き1.7cmの糸玉を作る。この時点では芯と巻いた糸は完全密着していない。出来た糸玉にベンガラ漆を塗り仕上げる。最後に塗った漆が接着剤になり、中の芯と外側の糸が密着し固い糸玉になつた。

作例3（写真17）

木の棒に苧麻繊維を巻き、芯がほぐれない程度に苧麻糸で巻く。それにベンガラ漆をたっぷり浸みこませる。漆が完全乾燥する前に苧麻糸を巻き1.7cmの糸玉をつくる。出来た糸玉にまたベンガラ漆を塗って乾燥させる。完全乾燥したらベンガラ漆を重ね塗りすると仕上がり。

作例4（写真18）

苧麻の繊維を芯に同じ繊維で巻き付け1.7cmの糸玉をつくる。繊維のみで作った糸玉にベンガラ漆を浸みこませた。約1日漆を乾燥させ同じベンガラ漆を重ね塗りして仕上げた。

4例にて漆糸玉を作ったが、出来上がりは同じように仕上がつた。漆を糸玉に浸み込ませてみたら、思ったより以上に中迄漆が浸み込んで乾燥（固化）後には固く軽い糸玉が出来た。漆による糸玉作りをしてみて、出土した赤い糸玉から水銀が検出されなかつただろうか、もし検出されたらベンガラ漆ではなく水銀朱の可能性が有るような気がした。何にしても縄文時代にこのような漆と繊維の技法が有り、漆の強力な接着性や漆とベンガラの防腐性を知り尽くし、死者への弔いの儀式や、神への祈りの用具又生活の中で種々取り入れていたことは正に驚きである。（沓澤）

6 終わりに

今回の復元にあたっては、以前から日本の先史時代に興味を持っていた沓澤則雄の熱意によって、復元を依頼してから復元終了まで短時間で実現した。

糸玉の用途についてはまだはっきりしておらず、ドーナツ形の糸玉もしかりである。以前、秋田県立博物館で「よみがえる縄文ファッショ」ン」という企画展が開催された。この時の展示図録に復元された縄文時代の衣服の写真が掲載されている。この中の衣服にボタンもしくはボタンのような装飾品

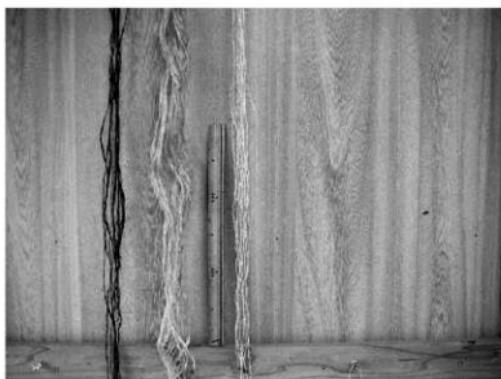


写真3

苧麻繊維一定規は30cm。
左・ベンガラ漆を浸透させたもの
中・苧麻繊維
右・糸に撚ったもの



写真4

木を丸く削った型
(径7mm、長さ12cm)
に苧麻繊維を巻き、芯を作る。



写真5

苧麻繊維で作った型に苧麻糸を
コイル状に巻き付けて糸玉を
形造る。
糸の先には動物の骨で作った針
を使用。



写真 6

ベンガラを擂り潰し、ベンガラと
漆を混ぜ合わせる道具。

(現代のもの、柄の木製)

縄文時代は石の臼（石皿）の中で
磨石を使いベンガラを磨り潰した。
定規は30cm。



写真 7

生漆を容器から取り出す。

(縄文時代は漆容器に土器を
用いた)



写真 8

ベンガラと生漆を混ぜ合わせ、
練ってベンガラ漆をつくる。

(少量なのでへらで練り合わせて
いるが、大量の際は下の練り棒を
使う。縄文時代は丸い石)



写真9
ベンガラ漆。



写真10
ベンガラ漆を苧麻繊維に
浸み込ませる。



写真11
ベンガラ漆を糸玉に指で塗る。
(浸み込ませる)



写真12

漆の量を多くすると中まで
浸み込んでゆく。



写真13

ベンガラ漆を浸み込ませた糸玉を
乾燥（固化）させる。
細い木を削り（ツマヨウジ状）
穴に通して支える。

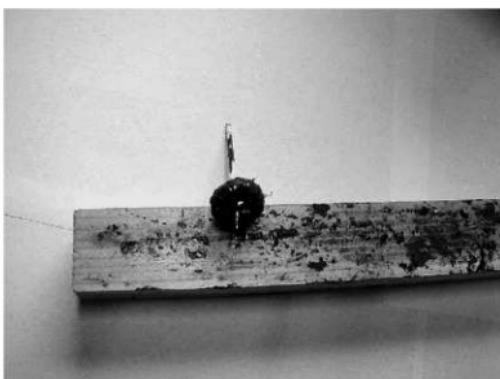


写真14

細い木をもって乾燥させる。
次第に回して移動させると下の台
にくっつかない。

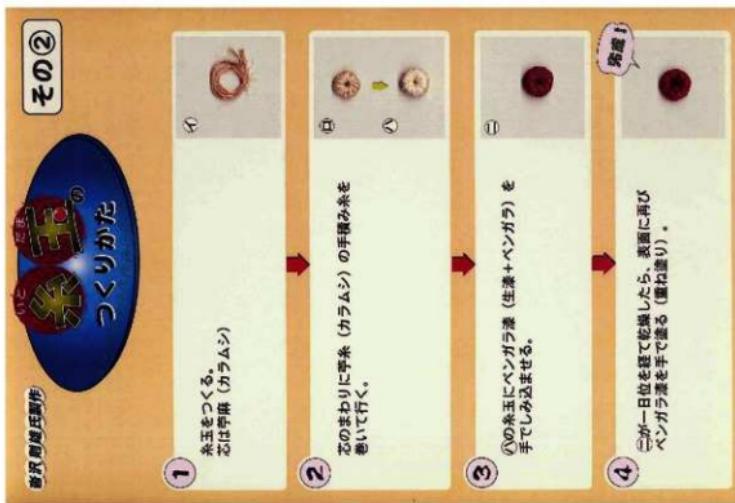


写真16 作例2



写真15 作例1

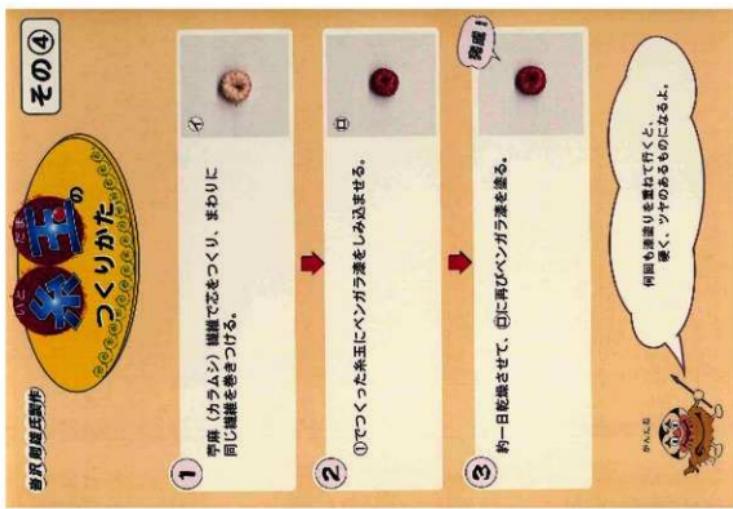


写真17 作例3

写真18 作例4

(註5) を付けたものが2点あるが、写真で見たかぎり、その可能性もあるように思える。

復元された糸玉は、平成17年に国土交通省の森吉山ダム広報館で埋蔵文化財学習会「小又川の1万年」が6月から11月までに4回開催されたがその折に、会場で期間中、展示された（写真19）。また、平成18年10月13日～16日の「漆・遙かなロマン 沢澤則雄 漆芸展」（「第14回川連塗りフェア2006」との併催－湯沢市生涯学習センターで開催）では、漆下遺跡の漆塗り糸玉の復元品を取り込んだ大作「縄文出土」（型体：パネル、寸法：127cm×94cm）と復元した糸玉などが展示された。この間、秋田魁新報（夕刊）や、「広報ゆざわ」にも紹介された。今後は秋田県埋蔵文化財センターの特別展示室でも活用すべく、準備を進めている。また、今回の復元を契機に、カラムシを敷地内に植えたが、カラムシの製作などを体験学習のメニューに加えることも検討している。

今回の糸玉復元にあたって、次の方々にご教示・ご協力ををしていただいた。染織家 安倍まゆみ氏（宮城県在住）からカラムシ糸を提供していただいた。また、糸玉について山田晃弘氏（東北歴史博物館）、荒川隆史氏（新潟県歴史博物館）、カラムシ糸やその製作情報について桐生正一氏（岩手県滝沢村埋蔵文化財センター）、カラムシの植生やカラムシ糸や布の制作等について岩手県一戸町の御所野縄文博物館の高田和徳氏、中市日女子氏より種々のご教示とお世話ををしていただき、実際に体験をさせていただいた。芳名を記してお礼に代えさせていただきます。（柴田）

註1 小林克 「考古資料としての出土織維」『季刊考古学第91号－特集 原始・古代の出土織維－』2005（平成17）年 雄山閣

註2 河田弘幸 「小又川流域の縄文時代の堅穴住居跡について(1)」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第18号』2004（平成16）年 秋田県埋蔵文化財センター
河田弘幸 「小又川流域の縄文時代の堅穴住居跡について(2)」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第19号』2005（平成17）年 秋田県埋蔵文化財センター

註3 「秋田県漆下道路出土漆製品の漆膜構造調査」2002（平成14）年 株式会社吉田生物研究所

註4 草麻（ちよま） いらくさ科 多年性草本 野生も有るが栽培もされている。日本ではカラムシともいわれ、茎（カラ）を蒸して皮をはぎ取るからこう呼ばれている。

英国名：チャイナグラス 仏国名：ラミー 朝鮮名：モシ

註5 「衣類の復元」 図録No.21 衣類⑦、図録No.27 衣類⑧の2点である。秋田県立博物館企画展示図録「よみがえる縄文ファッション－衣服・髪形・装身具－」1991（平成9）年 秋田県立博物館

註6 秋田魁新報（夕刊）「アングル」欄 「縄文の技術に迫る－漆塗りの糸玉を復元－」2005（平成15）年7月14日付 秋田魁新報社

「広報ゆざわ」Vol.8 表紙一漆器製作の技が光る、裏表紙「第4回今月の表紙の人 縄文時代の漆糸玉を復元 沢澤則雄さん」 2005（平成17）年8月1日 湯沢市役所情報統計課



写真19 森吉山ダム広報館での糸玉の展示の様子

秋田県内の縄文時代前期初頭～前葉期 土器群の様相再検討 —鳥野上岱遺跡II群土器の再分類—

新海和広*

I はじめに

鳥野上岱遺跡は、能代市(旧二ツ井町)駒形字鳥野上岱1外に所在する縄文時代を中心とした遺跡である。平成16年度に一般国道7号琴丘能代道路建設事業に先立ち、秋田県埋蔵文化財センターが調査を実施した。その結果、縄文時代中期後葉～末葉の複式炉を伴う堅穴住居跡や、縄文時代前期の遺物包含層が見つかっている。この成果はすでに報告書(秋田県教委2006)として平成18年3月に発刊・公表されているが、報告書刊行後の収蔵作業時に新たに接合した資料や未掲載遺物の確認があったため、今回追加で報告する次第である。また、報告書のまとめで十分に資料対比ができなかった、秋田県の縄文時代前期初頭～前葉期土器群の様相についても、新資料を交えて追加検討を行ってみたい。

なお今回追加報告で掲載した第1、2図には、報告書と同様に胎土に纖維を含まないものについて断面図に▲印を示した。

II 再接合・未掲載遺物について

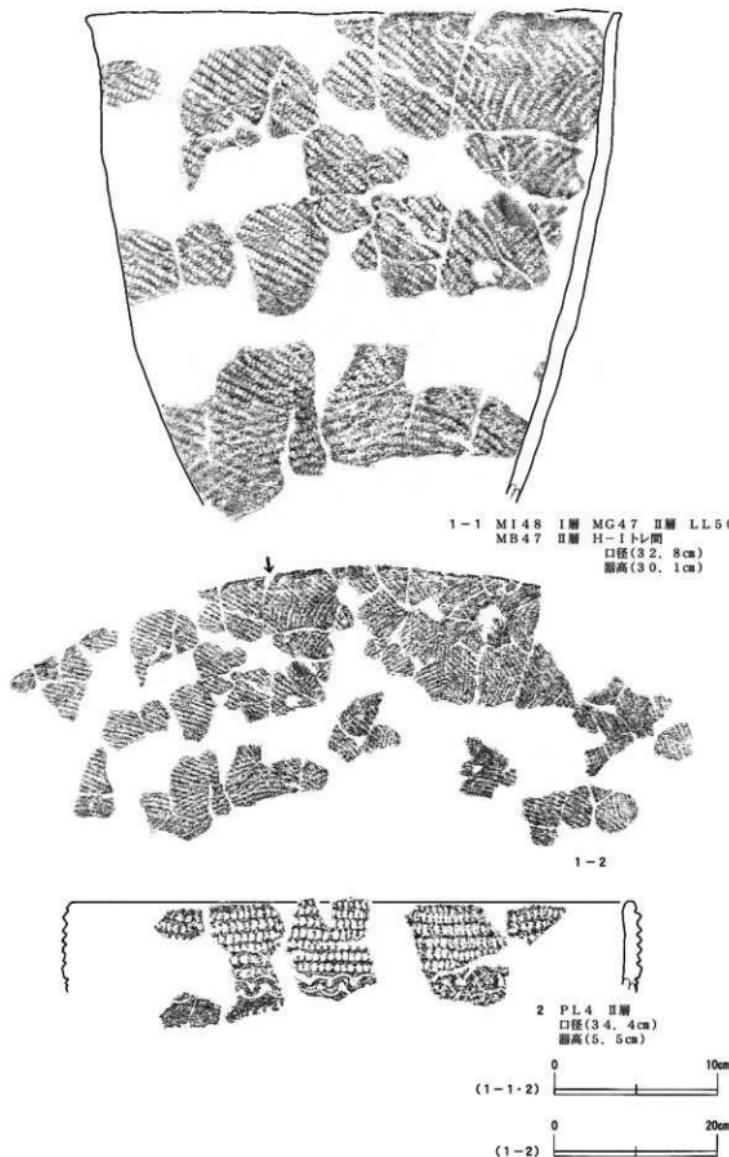
刊行済み報告書に掲載できなかった資料を1・2図に掲載した。

1図は前期初頭～前葉に属する土器である。1は、報告書第65図1と第66図3の左半分が接合したものである。報告書において65図1はII群2類B d種、66図3はII群2類B f種に分類しており、細分種別の枠を超えて接合したことになる。報告書においてもII群2類中のa～d種については、地文施文における規則的な横位帶状施文が認められないことを挙げて、種別分類を越えた接合の可能性を予測していたが、帶状施文の上下境界部を原体末端回転文により区分するB f種の接合は全くの想定外であった。

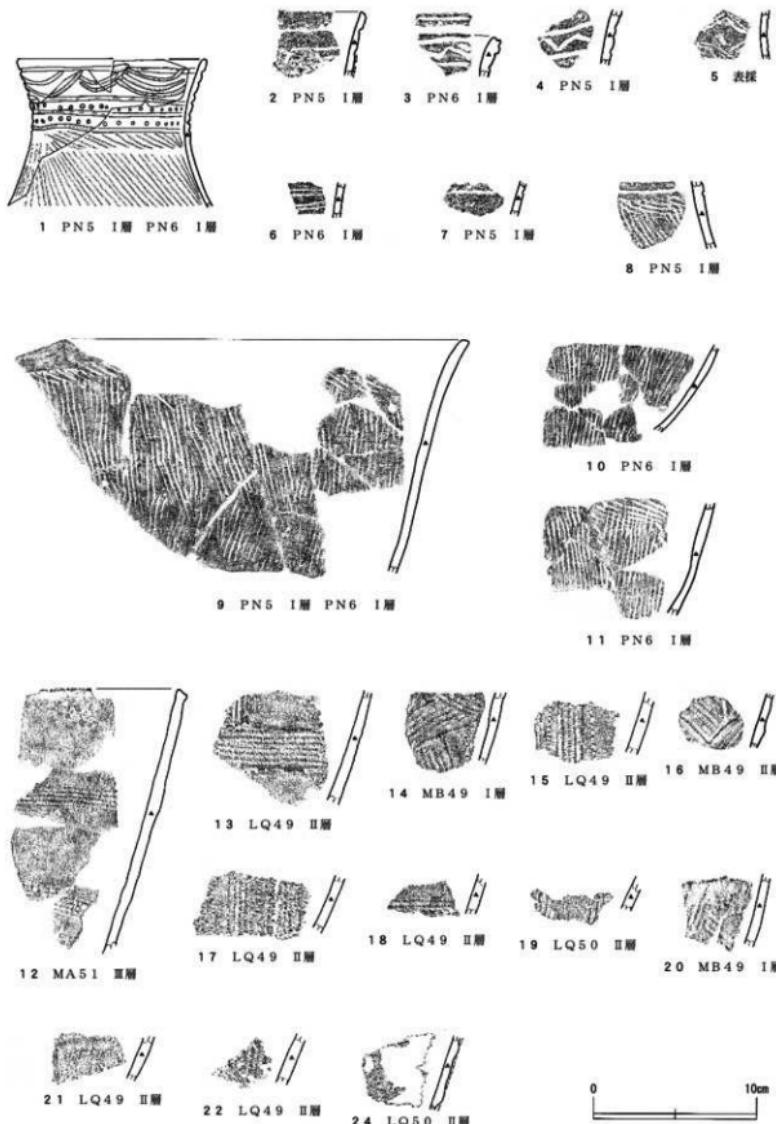
1の底部は丸底状と考えられる。胴下半部から緩やかに立ち上がり、口縁部付近で直立気味になり、弱く外反する器形である。口唇部は平坦だが面取りではなく、土器製作時に逆さまに置いたことによると思われる。1-1には、結節回転文を伴う規則的な横位帶状施文部と、原体を縦横に回転させ重複気味に地文を施す部位の境界線を、ほぼ正面にして図示している。左半分では、原体末端回転文を上下の区切りとして4～5段のR L斜繩文を施している。一方右半分では、同種原体の異方向回転施文により横位羽状の地文を施す。全体として左右の境界部分では、縦位羽状繩文の表現になる。胴下半部は、同種原体の斜位回転施文による横走繩文帯をもつ。1-2は展開図である。「↓」の位置が上述した地文の境界部である。境界部よりも右方向にかけては複雑な異方向回転施文による横位羽状繩文または、縦位羽状繩文や交差状施文により地文を構成する。回転方向に対する規制のない施文になっている。

2は、報告書第127図5に掲載した土器片に、同一個体資料を加えて復元したものである。口端部から下へ6～7段の連続刺突文を巡らし、その下に半裁竹管状工具によるコンバス文を施している。連続刺突文は平行沈線文を下地としている。

*秋田県埋蔵文化財センター南調査課文化財主事



第1図 烏野上岱遺跡出土 第II群土器



第2図 鳥野上岱遺跡出土 第IV群土器

2図には、弥生時代後期または続縄文に属する土器を示した。1～8は沈線による文様をもつ土器である。1は頸部が屈曲して口縁部が外反する壺形の器形である。口端部から頸部にかけて4条の横位沈線を巡らして狭い文様帯をつくり、一番幅広の1段目には2～3重の連弧文を、以下2段には刺突列を施している。頸部以下は撚糸文による地文のみが確認できるが、口頸部直下の地文のみ施文角度を変えて特殊化している。2～4は口縁部または口縁部文様帶の破片で、横走沈線と波状・鋸歯状の沈線文を施している。5・6は細い平行沈線により文様を施している。9～11は色調や胎土から同一個体と考えられる。口縁直下を無文とし、それ以下を撚糸文による地文のみで構成する粗製の深鉢で、1と同様に地文最上段部は施文方向を変えることにより特殊化させる。

以上の土器は、口縁部文様帶を有する精製土器とそれを有さない粗製土器に大別でき、精製土器はさらに文様で連弧文と波状・鋸歯状沈線に、使用工具で棒状工具使用と半裁竹管状工具使用に細別可能である。しかし破片資料が多いこと、断片的ながら確認できる横位沈線による文様帶の区画と横位連結文様や、地文最上段部の異方向施文による特殊化などの共通点から、これらを一つの土器群として考えたい。なおこの土器群に近似する資料として、秋田市上新城所在の松木台Ⅲ遺跡の資料がある。この資料は壺形の土器で、頸部に比較的広い無文帯を有し、口縁部には横位平行沈線と内部に刺突文を充填する連弧文を、胴部には撚糸文による地文を施す。撚糸文は最上部のみ回転方向を変えて特殊化しており、鳥野上岱遺跡出土資料と近似する。

12～23は続縄文土器で後北C2-D式に相当すると思われる。12は口縁部資料で、間隔をおいて2条の横位特殊縄文が認められる。13～16は微隆起線文を軸に特殊縄文と連続刺突文を施すもので、縦横・斜位に文様が展開する。17～23は表面の剥落が激しいが、わずかに確認できる文様と胎土の状態から、これらに属すと考えられるものである。なお今回図示したもので、極小片のものを除いて続縄文期に属する土器は全て図示したことになる。

III 秋田県における前期初頭～前葉期土器群の様相再検討

鳥野上岱遺跡出土のII群1類～5類に相当する県内出土土器の比較検討を通して、前期初頭～前葉期の秋田県における土器様相及び変遷の把握を目的とする。

1 県内の該期土器群把握の流れ

秋田県内における該期土器群報告の初期のものは、児桜貝塚や岩井堂第2洞穴資料である。児桜貝塚の報告書は1965年に刊行され、富樫泰時氏により貝塚出土土器群が、大木1・2a・2b式土器に対比されること、これらが岩井堂第2洞穴出土土器や鷹巣町湯車出土の連続刺突文を有する土器群、角間崎貝塚や小坂町付近出土の内面縄文、外表面が縄文または羽状縄文の土器群が所属する「羽状縄文土器群」、最後に位置付けられるという編年観が提示されている。岩井堂第2洞穴出土資料は、1967年の『日本の洞穴遺跡』における報文で山下孫継氏が、「第2洞穴内外からは東北地方南部太平洋岸の前期前半の土器片、上川名上層式もしくは室浜式、大木1式以降大木5式に到るもののが多数出土している。」と述べている。これら初期の報告では、羽状縄文土器群としてまたは仙台湾周辺の土器群との対比による編年的位置付けが主体であった。県北部の資料では、1973年に報告された鹿角市餅野遺跡資料で、羽状縄文や斜縄文または「半裁竹管文の押型文に似た土器」を、県内では神沢海岸遺

跡に対比しながらも、その時間幅は早稲田4～6類相当として青森県資料との対比が意識されている。

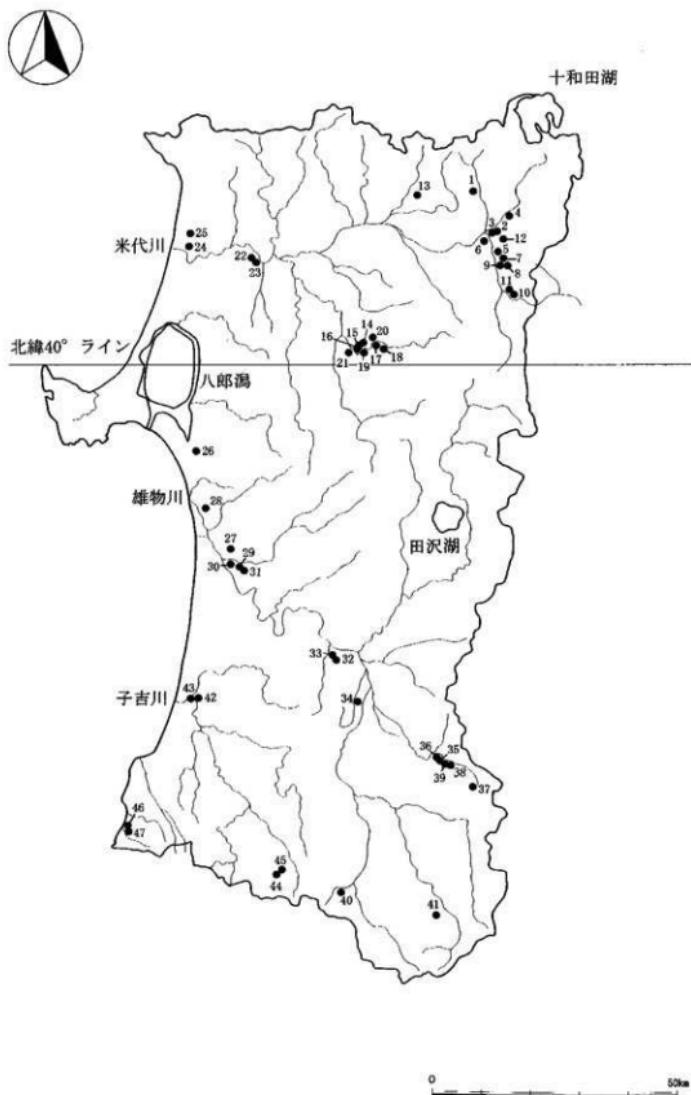
1980年代以降は、大規模開発の増加に伴い資料もバリエーションを増す。1984年の柏木森遺跡の報告で小林克氏は、鹿角地域の早期後半～前期初頭の型式変化を、青森県編年との比較検討により柏木森I群1類(赤御堂式)→案内II遺跡(長七谷地Ⅲ群)→柏木森I群3・5類、上葛岡IV遺跡(早稲田6類c)→柏木森I群8類(早稲田6類a・b)→柏木森I群2類(表館式)という変遷を示し、県北部資料と青森県資料との関係を具体的に捉えている。

1990年には竜毛沢館跡と下田遺跡の報告書が刊行される。竜毛沢館跡の報告で能登谷宣康氏が、青森県の編年研究を整理・援用して、秋田県北部の土器編年を赤御堂式→早稲田5類→長者森II群a類・唐貝地貝層→長七谷地Ⅲ群→表館式→早稲田6類a→早稲田6類bとして提示している。また、ループ文の重層押圧施文による山形文的文様構成を東北地方南部に多い例、一方早稲田6類が東北北部に多い例として暗に対置させ土器群の地域差を指摘している。下田遺跡の報告で谷地薰氏は、出土土器をA群=I期、B群=II期、C群=III期に3大別し、この順に土器群が変遷することを想定している。I期を表館式の比較的新しい段階、II・III期は表館式に後続する早稲田6類としながらも、地文のみの施文が多いことから、早稲田6類cや仏沢Ⅲ遺跡第II群土器との関連を想定している。なお、下田遺跡出土の早稲田6類c相当資料は「表館式と並行関係にあってその影響を受けながらも独自に変遷するものである。」として、該当土器群の再検討の重要性を指摘している。

1991年には小出I・II遺跡や上熊ノ沢遺跡の報告書が刊行される。小出I遺跡報文において高橋忠彦氏は、小出I遺跡I群土器をそれぞれ、2類が花積下層式、3類が長七谷地Ⅲ群、4・5類が長七谷地Ⅳ群、6類が組紐回転文の觀点では宮田Ⅲ群に、網目状燃糸文については大木2式に併行するとして土器群を位置付けている。上熊ノ沢遺跡報文における武藤祐浩氏の見解では、上熊ノ沢遺跡Ⅲ群土器をそれぞれ、1類aが長七谷地Ⅲ群、1類bが花積下層式、2類が上川名Ⅱ式に関係するとしている。両者に共通するのは、東北地方南部的な様相の中に東北地方北部的な要素が一定量存在することを認める点である。

以上簡単に、該期土器群に対する県内の研究・検討または、土器群の位置付けに関わる部分を抜き出した。明らかなのは、県北部では青森県編年を軸にした編年観が、県南部では東北地方南部的な要素に県北部的な要素が一部含まれることが認められていることである。これら秋田県における南北の基本的な地域性は共通した認識と思われる。この他、下田遺跡の検討で早稲田6類cに属する土器群に独自の変遷過程を想定し、単系統の変遷案に一石を投じたことは特記される。

上述した遺跡以外は、破片資料が少量出土する遺跡が多いため全体像把握が難しく、資料間の関連性を論じるのが困難な状況が基本的に現在でも続いている。そのため、県外資料との対比や編年案の導入により県内資料の一定の方向付けが行われてきた。しかし、県外の編年案も確立されているわけではなく、その趨勢に大きく左右される。資料の量的・状態の問題、または出土状況などからの層位的な検討は困難であり、型式学的な検討に頼らざるを得ない状況ではあるが、県内資料の変遷を確立するには、やはり基軸をなすのは県内資料同士の比較検討や関連付けであると考える。そこで、近年加わった物見坂I・II・III遺跡や鳥野上岱遺跡等出土の良好な資料を交えて、筆者なりに現段階で可能な限りの検討を行い、県内資料で把握可能な土器群の変遷を抽出して、該期土器群の変遷に一部でも流れを見出せねばと考える。



第3図 前期初頭～前葉期土器出土遺跡位置図

現市町村名	旧市町村名	番号	遺跡名	備考
小坂町	小坂町	1	はりま館	県南部主体の第2段階土器が出土
		2	物見坂I・II	長七谷地Ⅲ群Ad類と上川名式(原頭II群)がそろって出土
		3	物見坂III	早稻田6類の新段階資料がまとまって出土
		4	大湯理状列石	表館式と早稻田6類古段階が出土
		5	天戸森	非結束羽状縄文土器が出土
		6	太田谷地館	非結束羽状縄文・交差縄文・結束羽状縄文が出土
		7	案内II	縦区画をもつ非結束羽状縄文が出土
		8	案内VI	同一個体と見られる長七谷地Ⅲ群Ad類が出土
		9	柏木森	表館式と末端結束回転文をもつ斜縄文が出土
		10	湯瀬館	全面刺突文とコンバス文が出土
		11	上山田	表館式が出土
		12	越野	斜縄文系土器群と刺突文・組織状縄文が出土
大館市	大館市	13	谷地中	口縁部押引文と結節回転文土器が出土
		14	姫ヶ岱A	側面圧痕文古段階・表館式・早稻田6類古段階が出土
		15	姫ヶ岱C	末端結束回転文・斜縄文・燃糸文系が出土
		16	姫ヶ岱D	結節回転文が出土
		17	地蔵岱	表館式が出土
		18	深渡A	ループ文地に刺突文で山形文を施す土器が出土
		19	日廻岱B	早稻田6類と結束斜縄文が出土
		20	森吉家／前C	非結束羽状縄文が出土
		21	桂の沢	非結束羽状縄文・早稻田6類古段階・内面条痕施文が出土
		22	鳥野上岱	前期初頭～前葉期土器群がまとまって出土
		23	童毛沢館	横位多段刺突文・ループ文・結節回転文が出土
		24	金山館	長七谷地Ⅲ群Ad類・表館式・ループ文施文土器が出土
		25	重兵衛台II	表館式と見られる土器が出土しているが写真のみで詳細不明
秋田市	秋田市	26	大沢	ループ文地に横位押引文を施す土器が出土
		27	大杉沢	表館式出土
		28	児桜貝塚	非結束羽状縄文・施文幅の狭い斜縄文・横走沈線文・結束羽状縄文・結節回転文・燃糸文が出土しており時間幅のある資料
		29	松木台III	スリット状刺突穴を施す表館式出土
		30	岱III	縦区画をもつ非結束羽状縄文が出土
		31	石坂台I	上下幅の狭い羽状縄文と字型連続刺突を施す土器が出土
大仙市	南外村	32	小出I	表館式成立期と燃糸文施文・組紐施文土器の2時期が主体
		33	小出II	基本的に小出I 遺跡と同内容だが長七谷地Ⅲ群Ad類や横走縄文を伴う点で県北部的要素が見られる
		34	下田	スリット状刺突穴を施す表館式とそれに伴う斜縄文系土器群が主体で口唇部加飾に特色がある
横手市	山内村	35	小田V	非結束羽状縄文と斜縄文が出土しているが小片のため詳細は不明
		36	小田IV	口唇部加飾を伴う非結束羽状縄文と結束羽状縄文が出土
		37	越上	口唇部加飾を伴う斜縄文が出土
		38	岩瀬	上川名式(原頭II群)と長七谷地Ⅲ群がそろって出土しているがどちらもやや古手の様相を示す
		39	虫内II・虫内III	口縁部に多段にループ文を施す土器が出土 虫内IIでは結節回転文や網目状燃糸文も出土
湯沢市	雄勝町	40	岩井堂第2	非結束羽状縄文・結節回転文・全面刺突文・結束羽状縄文が出土
		41	湯元	上下に密接した結束羽状縄文が出土
由利本荘市	本荘市	42	上谷地	表館式の新段階・古段階と結節回転文が出土
		43	子吉川川底	上川名式(原頭II群)・上下幅の狭い斜縄文・末端結束回転文を伴う斜縄文・上下幅の密接した結束羽状縄文・ループ文が出土
		44	畠平III	非結束羽状縄文と見られる小片が出土
にかほ市	象潟町	45	上台	上川名式(原頭II群)の大型破片が出土
		46	ヲフキ	上川名式(原頭II群)が出土 口唇部や口縁内面に側面圧痕文を施すのが特徴
		47	上熊ノ沢	上川名式(原頭II群)と結束羽状縄文・ループ文・燃糸文施文土器が出土 極小片のため詳細は不明だが斜縄文系土器も伴う可能性がある

第1表 秋田県内の前期初頭～前葉期土器出土遺跡一覧

2 秋田県内各遺跡の様相

各遺跡ごとに前期初頭～前葉にかけての出土土器群を概観して、その順序と土器群組み合わせの大略を把握する。概観にあたっては、米代川中・上流域、阿仁川流域、米代川下流域、県央・県南沿岸域、県南内陸部(雄物川左岸)、県南内陸部(雄物川右岸・上流部)の6地域に分けて行う。また各遺跡の土器群の分類は、仮にアルファベットを冠して分類名とする。

(1) 米代川中上流域(第4・5図)

この地域の主要な土器群は、物見坂I・II遺跡、餅野遺跡、柏木森遺跡、大湯環状列石、物見坂III遺跡出土土器群で、これらの分類を基軸に他遺跡資料を当てはめる。

◆物見坂I・II遺跡…A：側面圧痕文(4図1～8) B：横走縄文(4図9～12) C：地文のみ(4図13～15)

◆餅野遺跡…A：斜縄文主体で地文のみ(5図15～24) B：刺突文施文(5図14) C：組縄状原体(5図25
・26)

◆柏木森遺跡…A：口縁部に連続刺突列を胴部に上下施文幅が狭い非結束羽状縄文を施す(5図30～
36) B：施文境界部に不規則に原体末端回転文を伴う斜縄文(5図45～50)

◆大湯環状列石…地区ごとに土器群の様相が違う。

F 1区…A：連続刺突文(4図17・18) B：交差状縄文(4図22) C：縄文地に沈線や押引
文で文様を描く(4図23～32)

F 6区…D：口縁部に2段の刺突列を巡らせる(4図35・36) E：無文地に多段の押引文や
沈線文を施す(4図38～40) F：ループ文(4図41・42)

D 9区…G：結束羽状縄文のみを施す(4図43～48)同一個体と見られる

◆物見坂III遺跡…A：ループ文や結束羽状縄文を地文として幾何学文を施す(4図49～52) B：横走
沈線文を施す(4図53～57) C：結節回転文や撫糸文を施す円筒下層a式に相当も
しくは近接する土器(4図63・64)

案内II遺跡(5図4～7)・案内VI遺跡(5図8～13)は、非結束羽状縄文を施す点で物見坂I・II遺
跡とほぼ同内容だが、地文が縦区画を伴う点で相違する。前者は鳥野上岱遺跡II群1類に近い要素で
ある。また、はりま館遺跡(5図1)・天戸森遺跡(5図2・3)の非結束羽状縄文土器は物見坂I・II遺
跡の地文に近いが、5図1～3は地文施文帯境界部に原体末端回転文を伴い、さらに5図1は口唇
部に刺突を伴う点で相違する。湯瀬館跡(5図51・52)・上山田遺跡(5図53)は、コンバス文を伴う点で、
柏木森遺跡の刺突列土器群に近い。しかし、刺突列の状態で5図30～36の連続刺突文と5図29・
37・51・53のやや間隙のある刺突列に分かれる。この点では4図17・18や5図14も後者に含まれる。
谷地中遺跡の(5図54)は大湯環状列石(4図35・36)に、(5図58)は物見坂III遺跡(4図63)にそれぞれ
近い。上葛岡IV遺跡(5図59)は全面複節の結束羽状縄文を施す土器で、寸胴形の尖底土器で底部がや
や突出する器形である。物見坂III遺跡(61・62)とは明らかに違う形状を示し、ループ文を伴わないこ
とからこれよりも古手の土器と考えられる。

以上の土器群の前後関係を各遺跡の土器群構成から見れば、物見坂III遺跡(4図49～62)のセットと
(4図63～65)のセットは、連続するとまではいかないが時期的に近いと考えられ、これらは前期前葉
期でも比較的新しい段階の土器群と考えられる。大湯環状列石F 1区・D 9区の土器群は、物見坂III

遺跡(図49・53)の文様構成に近い4図23～32を含むが地文にループ文を伴わないことから、物見坂III遺跡に先行する土器群と考えられる。大湯環状列石F1区・D9区と柏木森遺跡の土器群の比較からは、柏木森遺跡では結束羽状縄文や沈線文を施すものが少なく、これもまた前者に先行する可能性をもつと考えられる。以上を総合してこの地域の主要土器群の順序を示すと以下のようになる。

第1段階：(物見坂I・II遺跡B類・案内II遺跡・案内VI遺跡)=(物見坂I・II遺跡A類)

第2段階：(餅野遺跡A類)=(柏木森遺跡)(はりま館遺跡・天戸森遺跡)

第3段階：(大湯環状列石)(上葛岡IV遺跡)=(湯瀬館跡・上山田遺跡)(餅野B・C類)

第4段階：(物見坂III遺跡A・B類)

第5段階：(物見坂III遺跡C類)

いずれの土器群も、前後の時期の土器を少量含むと考えられるが、主体をなす土器群によって段階を位置付けている。

(2)阿仁川流域(第6図)

この地域の土器群は断片的な資料が多く、時期差を含んだ土器群である可能性が高い。

◆姫ヶ岱A遺跡…A：側面圧痕文施文(6図1～3) B：狭い口縁部文様帯に2段の押引文・沈線文

(6図4・5) C：連続刺突文(6図6) D：地文上に沈線文で文様施文(6図7～9)

◆姫ヶ岱C遺跡…A：原体末端回転文を伴う斜縄文(6図10～12) B：斜縄文主体の土器群(6図13～19)

C：撚糸文施文(20・21)

◆姫ヶ岱D遺跡…A：結節回転文を伴う斜縄文(6図22～28)おそらく同一個体と考えられる

◆森吉家ノ前C遺跡…A：原体末端回転文を伴う非結束羽状縄文(6図29～30)

◆日廻岱B遺跡…A：押引文(6図31) B：斜縄文(6図32・33) C：結束斜縄文(6図34)ループ文(6図35)

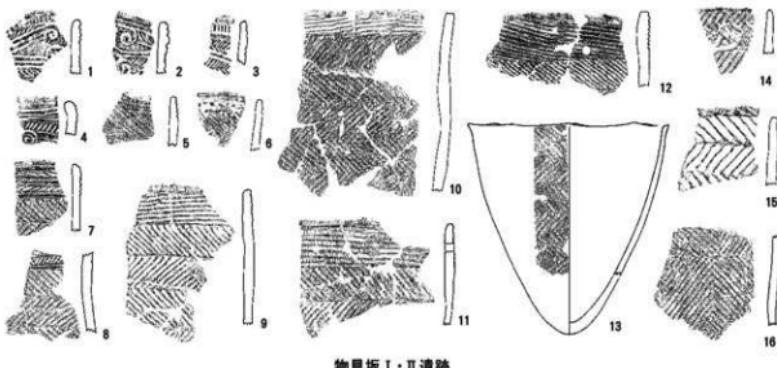
◆地蔵岱遺跡…A：連続刺突文(6図37・40・41) B：ループ文(6図38・39)

◆深渡A遺跡…A：連続刺突文(6図42) B：ループ文を地文とする土器(6図43～47)

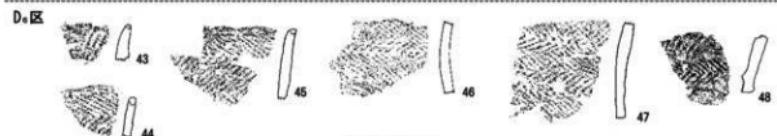
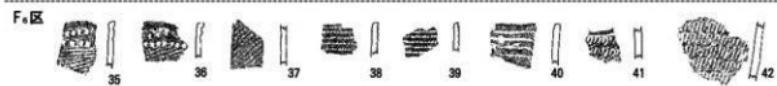
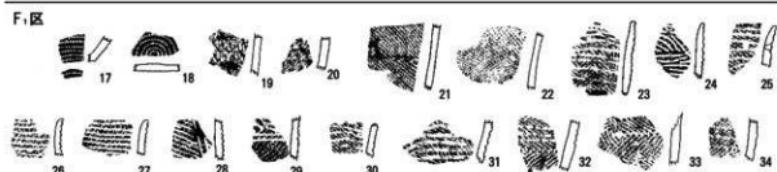
◆桂の沢遺跡…A：非結束羽状縄文(6図48～50) B：狭い口縁部文様帯に連続刺突文(6図51・53)

C：沈線文(6図54～56) D：内面条痕文(6図57～60) E：撚糸文施文(6図61・62)

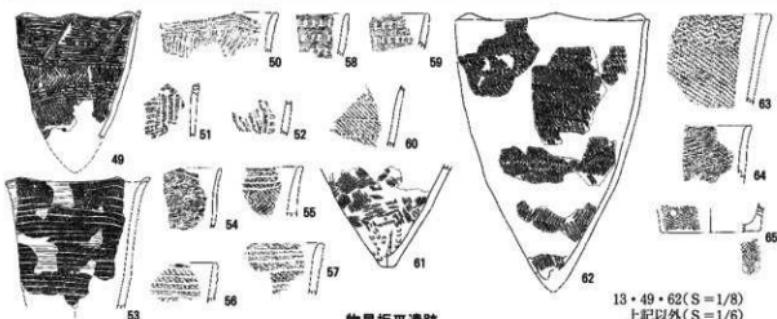
桂の沢遺跡では、物見坂III遺跡と同様に沈線文施文土器C類と撚糸文による文様施文土器E類が出士しており、これらが前期前葉期の新しい段階と考えられる。なお桂の沢遺跡では内面条痕施文土器D類(註1)が出土しており注目される。各土器群を位置付けるにあたって特徴的な要素を列挙する。姫ヶ岱A遺跡B類は、斜縄文を地文として鳥野上岱遺跡II群2類Aa種と共通するが、いずれも口唇部が先細りの形状で、また6図5は波状口縁になることから、鳥野上岱遺跡II群2類Ab種に近い土器と思われる。さらに6図9は地文の状態が似ており、姫ヶ岱A遺跡B・D類は同一時期となる可能性が高い。姫ヶ岱C遺跡A類は、底部付近と思われる6図11で縄文の施文方向が変わり、横走縄文に近い施文を示しており、鳥野上岱遺跡II群1類に後続すると考えられる。姫ヶ岱D遺跡A類は結節回転文を伴う土器だが、6図28の尖底部形状は物見坂III遺跡4図61に近似しており、同一時期のものと考えられる。日廻岱B遺跡C類は類例のない土器だが、結束原体により全面施文する点で上葛岡IV遺跡5図59と同時期である可能性が高い。地蔵岱遺跡A類は、刺突文が連結する状態と胸部地文が上下施文幅の狭い非結束構成であり柏木森遺跡A類に近い。深渡A遺跡B類は波状口縁でループ文



物見坂 I・II 遺跡



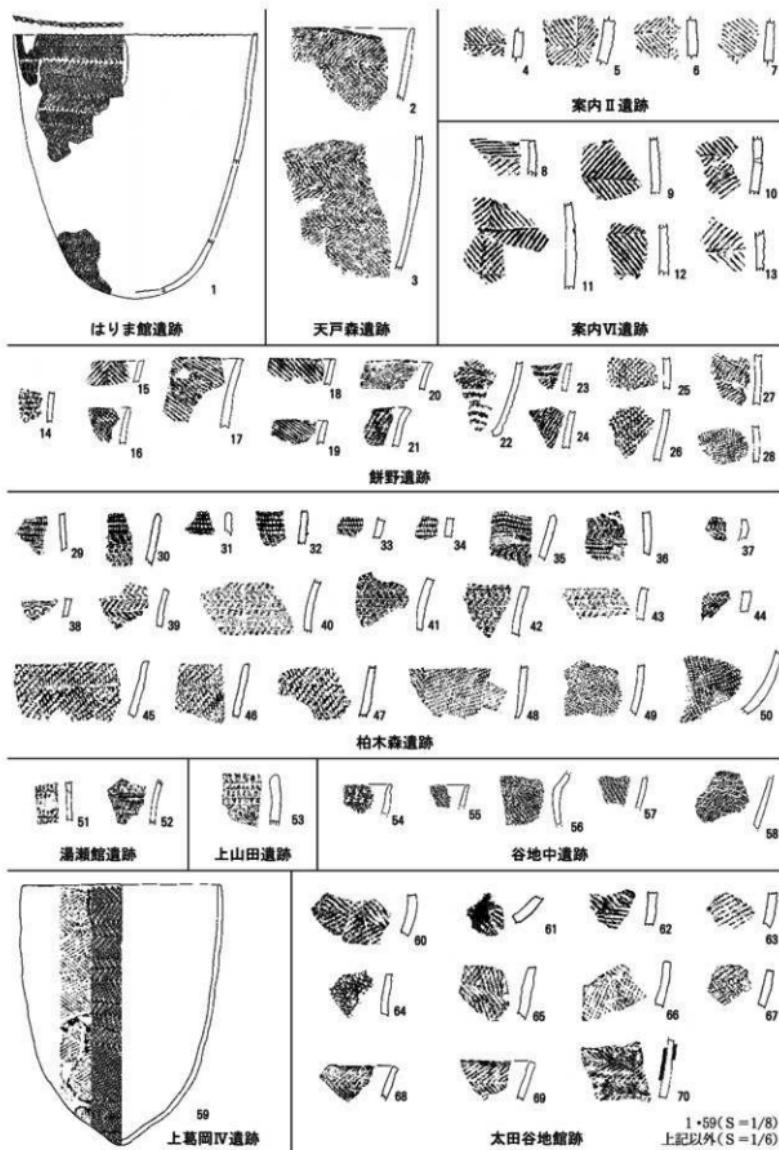
大湯環状列石



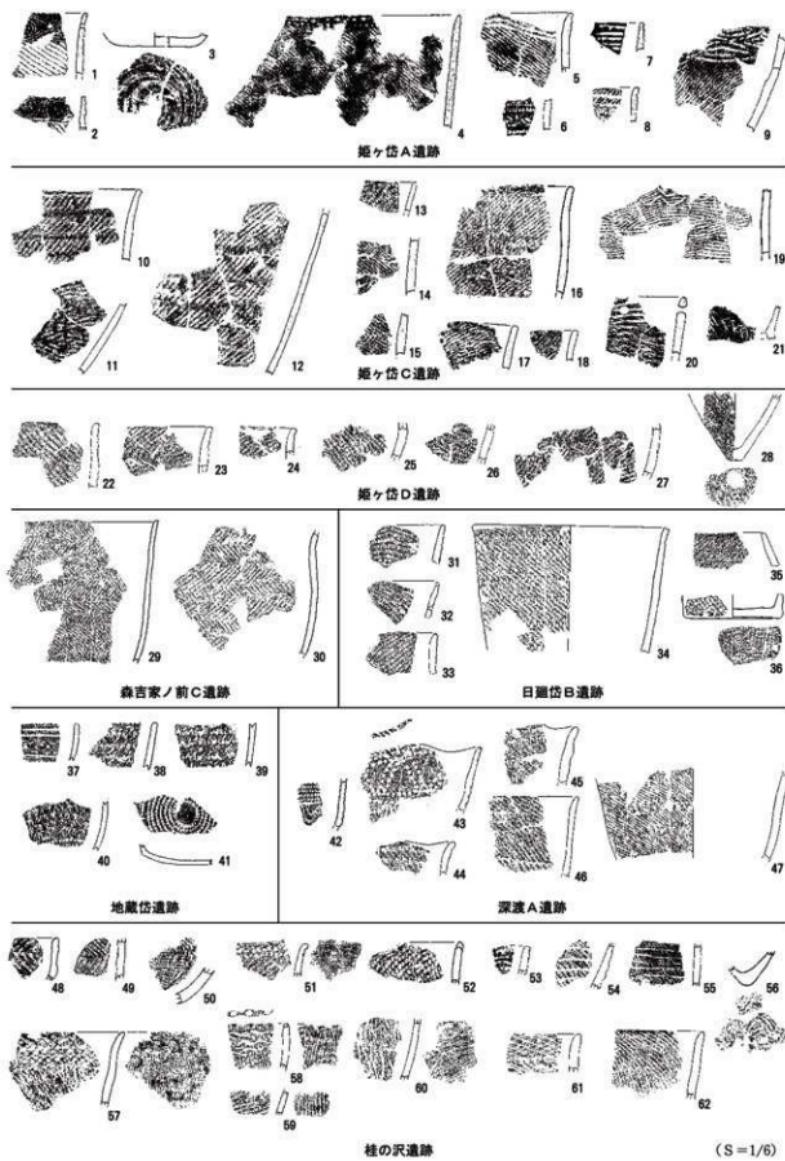
物見坂 III 遺跡

13 + 49 + 62 (S = 1/8)
上記以外 (S = 1/6)

第4図 米代川中上流域の前期初頭～前葉期土器群1



第5図 米代川中上流域の前期初頭～前葉期土器群 2



第6図 阿仁川流域の前期初頭～前葉期土器群

を地文とすることから、物見坂III遺跡A類に対応する土器群と考えられるが、6図43は無文地の口縁部文様帶に列点状刺突文により口縁部文様帶の上下区画と横位連続山形文を施し、口唇部に加飾していることから4図49とは系統を異にする土器と考えられる。

米代川中・上流域の土器群との対比により土器の特徴を概観したが、桂の沢D・E類以前に属すると思われる土器群の順序を整理すると以下のよう段階設定になる。

第1段階：(姫ヶ岱A遺跡A類)(桂の沢A類)

第2段階：(姫ヶ岱C遺跡A類)(森古家ノ前C遺跡)=(姫ヶ岱A遺跡C類・地蔵岱遺跡A類)

第3段階：(姫ヶ岱A遺跡B・C類)=(日廻岱B遺跡A・C類)

第4段階：(桂の沢遺跡C類・姫ヶ岱遺跡D類)=(深渡A遺跡B類)

第5段階：(姫ヶ岱C遺跡C類・桂の沢遺跡D・E類)

(3)米代川下流域(第7・8図)

この地域の土器群では鳥野上岱遺跡II群土器が最もまとまりがある。鳥野上岱遺跡の土器群は報告書においてその変遷を検討したが、今回の資料集成を通して報告書における分類や変遷過程について見直しが必要であることが判明したため、以下に報告書での分類を援用しつつ再分類したい。

1類…異種原体の交互帯状施文による区画の明瞭な非結束羽状縄文の地文施文が主体の土器群

A種(口縁部文様帶あり)…a：側面圧痕文による文様施文(7図1~3) b：横走縄文を施文(7図5)

B種(口縁部文様帶なし)(7図4)

2 A類…基本的に非結束原体により地文施文を行う土器群

胴下半部横走縄文や部分的な非結束羽状縄文を前段階から引き継ぐ一方、工具文による文様要素の置換や末端結束回転文が見られる。

A種(口縁部文様帶あり)…列点状刺突列のものがある(7図7)

B種(口縁部文様帶なし)…a：部分的に非結束羽状縄文を施文(7図9~11) b：複雑な方向に回転施文(7図18) c：横走縄文(7図17)

※それぞれ原体末端回転文を伴うことがある

2 B類…非結束原体による地文施文が主体の土器群

前段階に比べ使用原体が細いものが目立つようになり、口唇部形態が先細りまたは全体的に薄くなる。一部結束原体による地文施文が伴う可能性がある。

A種(口縁部文様帶あり)…a：押引文(7図8) b：交差状縄文(7図14・15)

B種(口縁部文様帶なし)…a：結節回転文を伴う斜縄文(7図19) b：縦走縄文(7図16)

2 C類…2 A・2 B類に伴うと思われる斜縄文系土器群(7図25~36)

3 A類…上下幅の狭い非結束羽状縄文を地文にする土器(8図1~3)

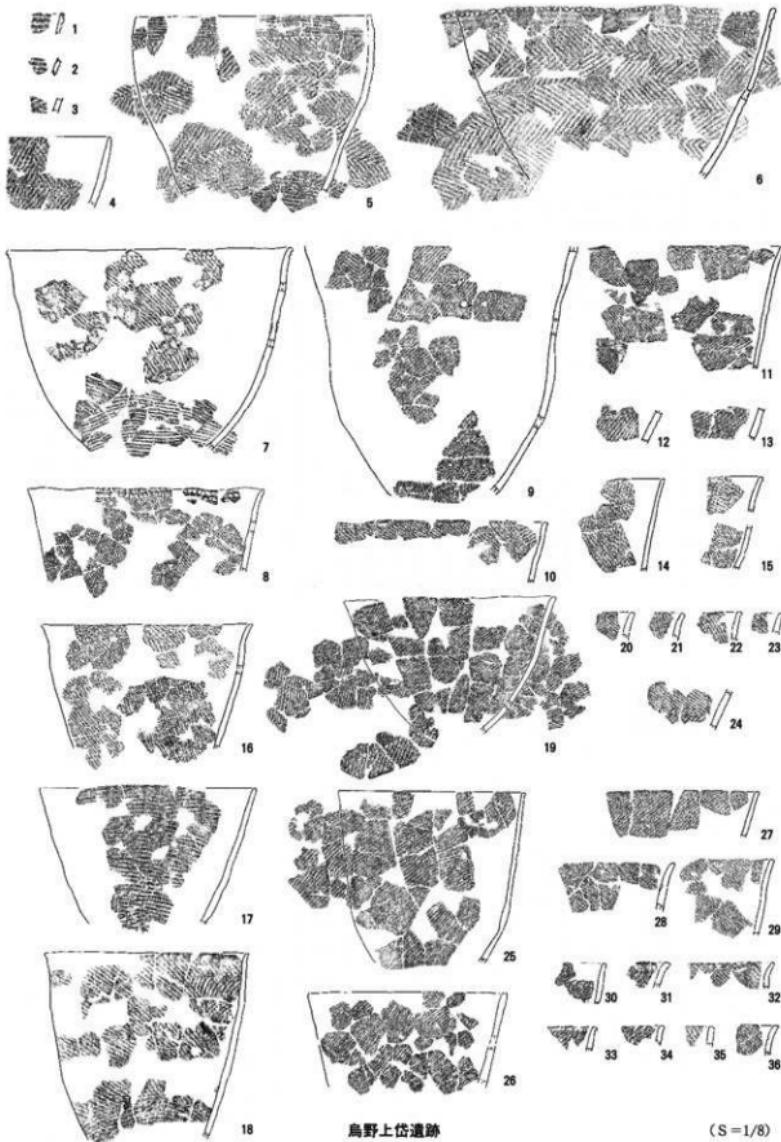
3 B類…無文地の口縁部文様帶に幾何学文を施す土器(8図4~7)

4 A類…狭い口縁部文様帶に数段の連続刺突文を施す土器群(8図4~7)

4 B類…地文上に押引文や沈線文で文様を施す土器群(8図18~32)

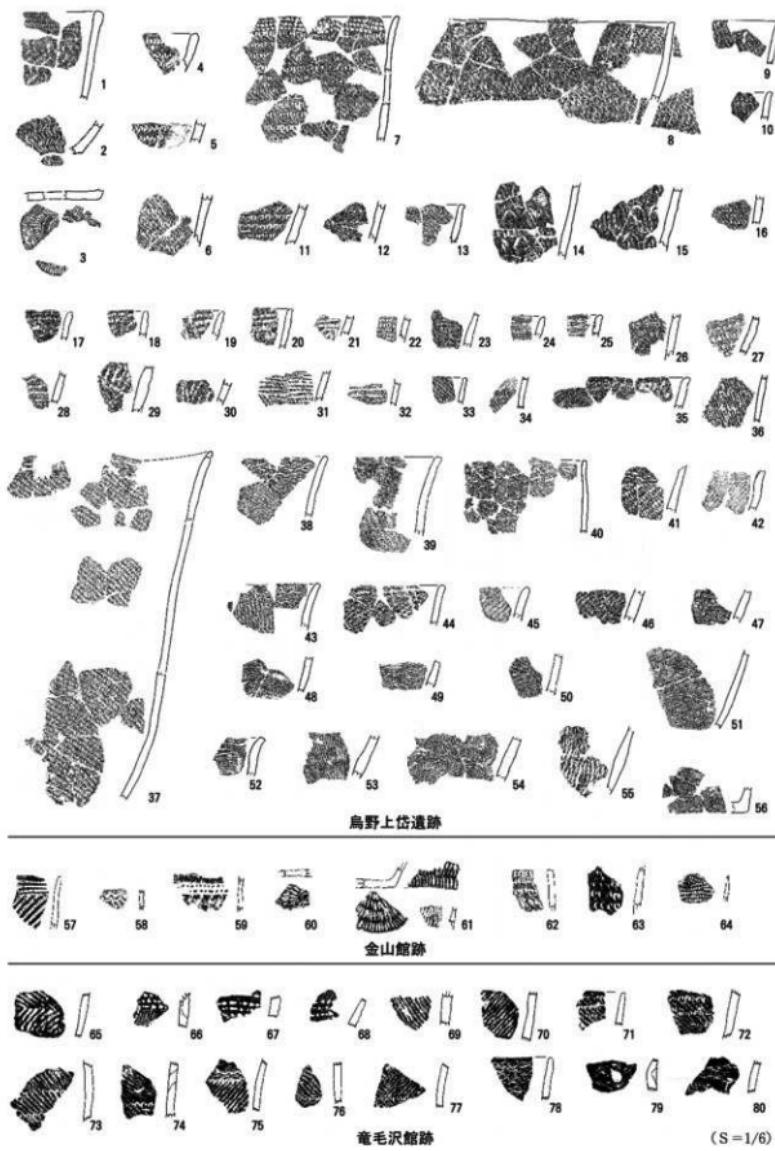
4 C類…結束羽状縄文やループ文を施す土器群(8図8~16・33~36)

5類…燃糸文や附加条原体により文様を施す土器



第7図 米代川下流域の前期初頭～前葉期土器群1

(S=1/8)



第8図 米代川下流域の前期初頭～前葉期土器群2

A種(口縁部文様帶あり)…a：結節回転文を施文(8図37～43) b：附加条縄文を施文(8図44～47)

B種(口縁部文様帶不明)…a：撫糸文・附加条縄文を施文(8図48～56) b：縄文を施文

以上が鳥野上岱遺跡II群土器再分類だが、1類と5類については変更がない。報告書と違うのは2類をA類(報告書でのA a・B a・B d・B e種とB f種の一部)、B類(報告書でのA b・B b・B c種とB f種の一部)、C類(報告書でのB g種とB f種の一部)に3細別し、3・4類は一端統合してほぼ別項目の分類で5細別した。

この再分類により、位置付けが困難になった土器群が旧2類B f・B g種である。断定は難しいが、B f種については、原体末端処理の不明な原体末端回転文と末端結束原体の回転押捺による結節回転文の2種類に分けられる。施文帯境界部の強調化が進むという観点から、今回の分類では前者を2A類に後者を2B類に伴うと考えた。旧B g種については2A・2B類への振り分け及び、3・4類に伴う可能性も残しており、明確な分類は現時点において困難である。

◆金山館跡…A：口縁部横走縄文(8図57) B：連結刺突文(8図59) C：連続刺突文(8図61) D：地

文ループ文(8図62・63)

◆竜毛沢館跡…A：非結束羽状縄文(8図65) B：押引文(8図66～68) C：ループ文(8図71～77) D：

結節回転文(8図78～80)

この地域の土器群を鳥野上岱遺跡II群土器を軸に段階設定すると以下のようになる。

第1段階：(鳥野上岱遺跡II群1類・金山館跡A類・竜毛沢館跡A類)

第2段階：(鳥野上岱遺跡II群2A類)=(鳥野上岱遺跡II群3A類・金山館跡B類)

第3段階：(鳥野上岱遺跡II群2B類・竜毛沢館跡B類)=(鳥野上岱遺跡II群3B類・金山館跡C類)

第4段階：(鳥野上岱遺跡II群4A・B・C類・金山館跡D類)=(竜毛沢館跡C類)

第5段階：(鳥野上岱遺跡II群5類・竜毛沢館跡D類)

(4)県央・県南部沿岸地域の土器群(第9図)

この地域では全体形状が分かる資料はないが、上熊ノ沢遺跡、上谷地遺跡、児桜貝塚から比較的まとまりのある土器群が出土している。またヲフキ遺跡と上台遺跡からは、上川名式(原頭II群)に相当する好資料が出土している。

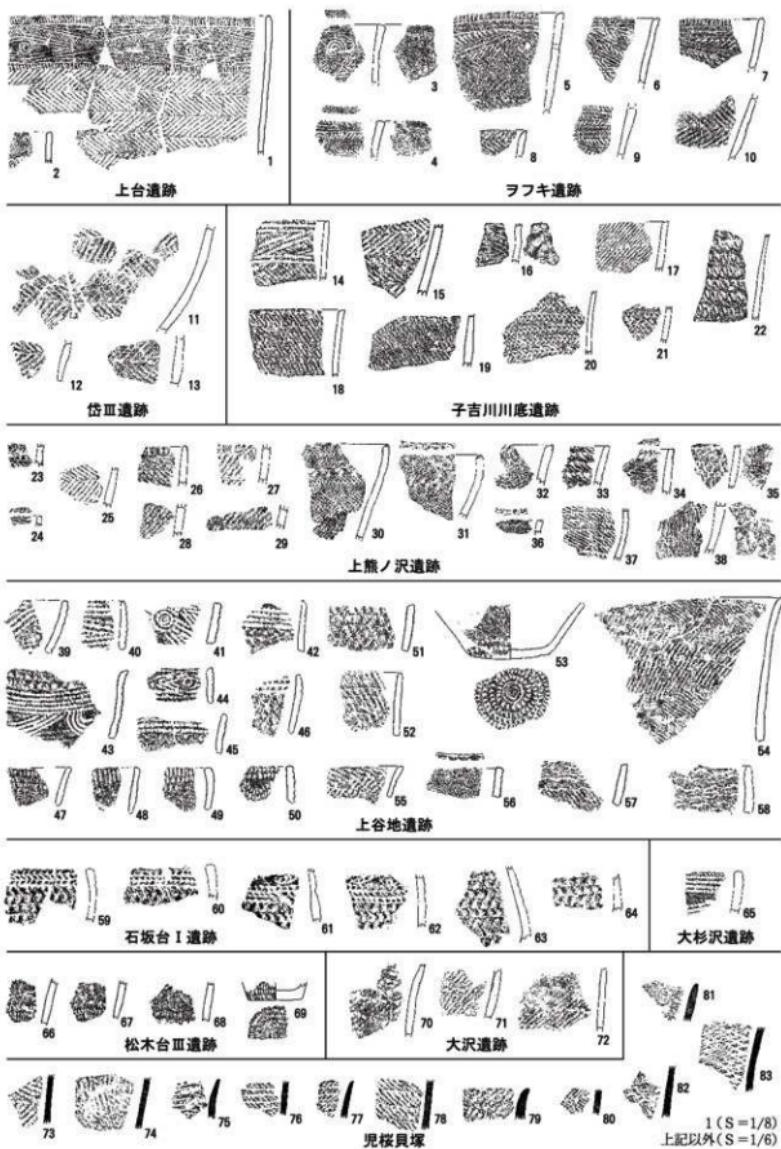
◆ヲフキ遺跡…A：側面圧痕文(9図3～7・9) B：非結束羽状縄文の地文のみ(9図8)

◆子吉川川底遺跡…A：側面圧痕文(9図14) B：原体末端回転文を伴う斜縄文(9図17) C：施文帶上下幅の狭い斜縄文(9図18) D：施文帶上下幅の狭い結束羽状縄文(9図20・21)
E：ループ文(9図22)

◆上熊ノ沢遺跡…A：側面圧痕文(9図23) B：横走縄文(9図20) C：口端部にスリットを施す斜縄文(9図26) D：結束羽状縄文(9図30～32・36) E：ループ文(9図33・37) F：撫糸文施文(9図34・35)

◆上谷地遺跡…A：連結刺突文(9図39～46) B：連続刺突文(9図47～49) C：施文帶上下幅の狭い斜縄文(9図52) D：部分非結束羽状縄文(9図54) E：結束羽状縄文(9図55) F：ループ文(9図56) G：結節回転文(9図57・58)

◆児桜貝塚…A：非結束羽状縄文(9図73) B：沈線文(9図75・76) C：斜縄文(9図79) D：結束羽状



第9図 県央・県南沿岸部の前期初頭～前葉期土器群

縄文(9図80) E : ループ文(9図77) F : 撫糸施文(9図81~83)

ヲフキ遺跡A類には、9図3・4のように口唇部や口縁部内面に側面圧痕文を施すものがあり、少なくともこの段階で口唇部施文のものが存在することを示している。なお9図1の上台遺跡資料は、同時期の大型破片である。上谷地遺跡A類は、脣部に施文帯上下幅の狭い非結束羽状縄文を、口縁部文様帯には円形竹管文を起点として、連結刺突文による幾何学文を描く土器である。口縁部文様帯の文様構成は、ヲフキ遺跡や上台遺跡の側面圧痕文施文土器群の渦巻文と斜走文や蕨手文の文様構成を引継ぎつつ、側面圧痕文に表現が近い連結竹管文への文様要素の置換が認められ、両者は連続する土器群と考えられる。A類の好資料として獅子内遺跡(13図7~11)が挙げられる。13図9には充填刺突文の代わりにコンパス文が施されており注目される。連続刺突文を施す点で共通するB類には、9図47のような縦区画や、縦長の刺突文が主体になるなどやや後出的な様相がみられる。地文のみの土器も非結束から結束原体へと変化する可能性が高くA・C・D類→B・E類のセットへの変遷を考えられる。前者に近いのが石坂台I遺跡の土器群、後者に近いのが松木台III遺跡の土器群である。上熊ノ沢遺跡C類の口端部スリットも上谷地遺跡B類に似ており、上熊ノ沢遺跡E類がこれに伴う可能性が高い。大沢遺跡(9図70~72)は同一個体と考えられる資料で、ループ文を地文として横位多段の押引文が見られる。この特徴に最も近いのは、物見坂III遺跡のA類と考えられる。早稲田6類の南限は不明だが、大沢遺跡資料や児桜貝塚B類は、県央部における早稲田6類の展開を想起させる。

第1段階：(ヲフキ遺跡A・B類・上台遺跡・子吉川川底遺跡A類)

第2段階：(上谷地遺跡D類)=(上谷地遺跡A・C類・石坂台I遺跡・大杉沢遺跡)

第3段階：(上熊ノ沢遺跡C類)=(上谷地遺跡B・E類・松木台III遺跡・上熊ノ沢遺跡D類)

第4段階：(大沢遺跡・児桜貝塚B類)=(上熊ノ沢遺跡E類・児桜貝塚E類)

第5段階：(上熊ノ沢遺跡F類・上谷地遺跡G類・児桜貝塚F類)

(5) 県南内陸部(雄物川左岸)の土器群(第10・11図)

地域設定はしたが取り扱う3遺跡は近接した遺跡である。小出I遺跡と小出II遺跡はお互い隣接する台地でありほぼ同遺跡の関係である。また下田遺跡は小出I・II遺跡とは同じ山地の反対側麓に所在することから、この3遺跡に地域差はほぼないと考える。

◆小出I遺跡…A : 側面圧痕文間に刺突文を充填(10図1・2・4) B : 側面圧痕文間に別の側面圧痕文や平行沈線を充填(10図7・8) C : 施文区画が隆起線状を呈する非結束羽状縄文(10図10・13~17) D : 施文区画に原体末端回転文を伴う非結束羽状縄文(10図11・12・24~40) E : 交差状縄文(10図43~46) F : 結束羽状縄文(10図41・42) G : 網目状撫糸文を施文(10図49~54) H : 橫走撫糸文を施文(10図55~57) I : 組紐回転押捺施文(10図58~60)

◆小出II遺跡…A : 側面圧痕文と刺突文で文様施文(10図61・62) B : 口縁部横走縄文(10図63・64) C : 口縁部縦区画をもつ非結束羽状縄文(10図71~77) D : 施文区画に原体末端回転文を伴う非結束羽状縄文(10図81~86) E : 多段の刺突列(10図87・88) F : 橫走縄文(10図89~100) G : 結束羽状縄文(10図89・90) H : 頸部に縦走平行沈線文を並列施文(10図101~105) I : 橫走撫糸文(10図111~116)

◆下田遺跡…A：多段に刺突文施文(11図1～18・21～23) B：列点状刺突列(11図19・20) C：口唇部や
口端部に加飾を施す地文主体土器(11図24～48) D：非結束羽状縄文(11図49・52～55) E：
鋸歯状縄文(11図58・59) F：交差状縄文(11図50・51・60～62) G：縱走縄文(11図66～68) H：
組繩状原体回転押捺施文(11図69・70) I：結節回転文施文(11図75～77) J：斜縄文のみ
(11図71～74) K：結束羽状縄文(11図87～99) L：ループ文(11図100・101) M：組紐回転押
捺施文(11図103)

小出I・II遺跡が非結束羽状縄文を主体とする土器群と撚糸文を併用する土器群に2大別できるのに対し、下田遺跡は圧倒的多数の斜縄文系土器群に刺突文施文土器と結束羽状縄文やループ文の土器が少量伴う土器群であり、土器群の特徴に重複する内容があまりない。このため、小出I・II遺跡羽状縄文系土器群→下田遺跡斜縄文系土器群→小出I・II遺跡撚糸文併用土器群の変遷が考えられる。

各土器群の特徴的な要素として、小出I・II遺跡の非結束羽状縄文土器群は、口縁部文様帯を有する土器が少ない一方、末端結束回転文を伴う非結束羽状縄文を施すものがかなりの割合を占める。これと連動する要素として、側面圧痕文と充填刺突文による典型的な幾何学文構成の規制が強い小出I遺跡A類に対し、やや文様構成が乱れる小出I遺跡B類・小出II遺跡A類や、小出II遺跡C類の存在など、県内他地域の上川名式(原頭II群)の様相とは異なる点が見られる。小片のため明確な比較は出来ないが、小出I遺跡B類・小出II遺跡A類のような文様構成のくずれは、左道遺跡(13図2～5)のような土器群に近いと考えられ、典型的な上川名式(原頭II群)よりも後出的な要素と考える。また小出II遺跡では、B E F類のように鳥野上岱遺跡II群1類や2 A類に近い土器群が存在し、県北部的な土器群が一定量存在することも特徴である。これが側面圧痕文を主体とする口縁部文様帯保有土器群の割合が少ないと影響している可能性がある。つまり県北部同様に地文に特化した土器群が、構成の主体を占める様相になっていると考える。この傾向は下田遺跡にも当てはまる視点である。両遺跡で出土する底部資料は、表館式に相当する底部資料以外は基本的に丸底である。小出I遺跡A・B類や小出II遺跡A類の底部は不明であるが、小出II遺跡では、非結束羽状縄文の丸底資料(10図80)が出土しており、下田遺跡の様相や小出I遺跡H・I類の底部形態を併せて考えれば、これらの時期に尖底・丸底土器群が系統的に存在したものと考えられる。これは典型的な上川名式(原頭II群)や表館式の平底土器群(註2)とは対照する様相であり、本地域においては両者が混在する。

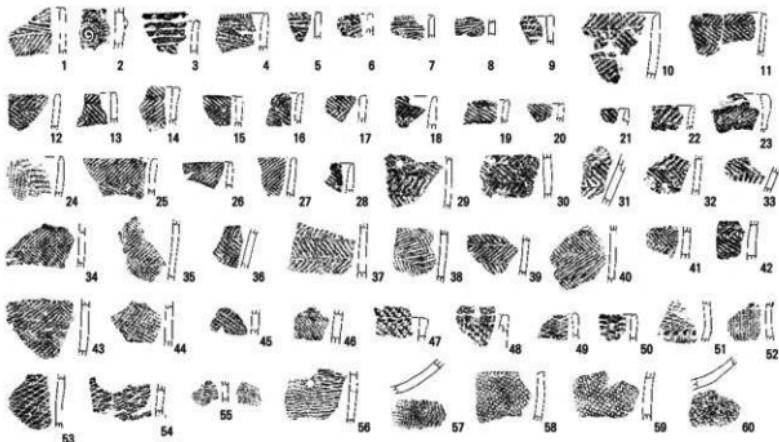
下田遺跡で特徴的な土器群はC類である。これは小出II遺跡D類の口唇部加飾を伴う土器に関連が深いとみられ、後者は非結束羽状縄文で前者は斜縄文のみであるため時期的に峻別されるが、口唇部または口端部加飾の系統が存在することを想起させる。なおこの口唇部加飾土器群は、下田遺跡の報告書では工具文刺突を古段階として、指頭圧痕や縄文施文のものが比較的新しいという見解が示されており、前後2段階に分離される可能性を含む。この他に特記すべき要素として、下田遺跡C～J類に伴うと考えられる底部が、弱くではあるが乳房状尖底になる点である(11図88～96)。尖底形状の比較でみれば、上葛岡IV遺跡5図59が最も近い形狀のものと考えられる。

第1段階：(小出II遺跡B類)=(小出I遺跡A・C類)

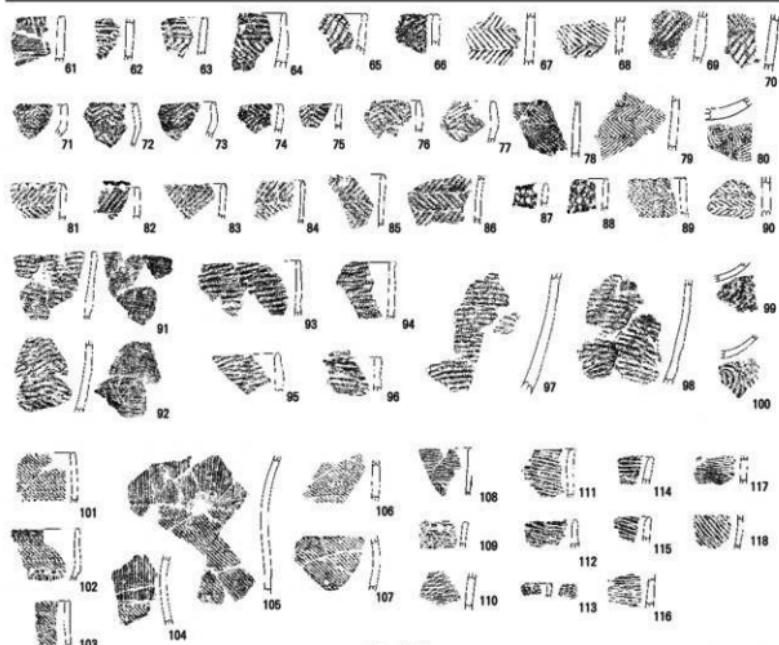
第2段階：(小出II遺跡E・F類)=(小出I遺跡B・D類・小出II遺跡A・C・D類)

第3段階：(下田遺跡A～K類)=(小出I遺跡E・F類・小出II遺跡G類)

第4段階：(下田遺跡L類)…(下田遺跡I・J・K類)？



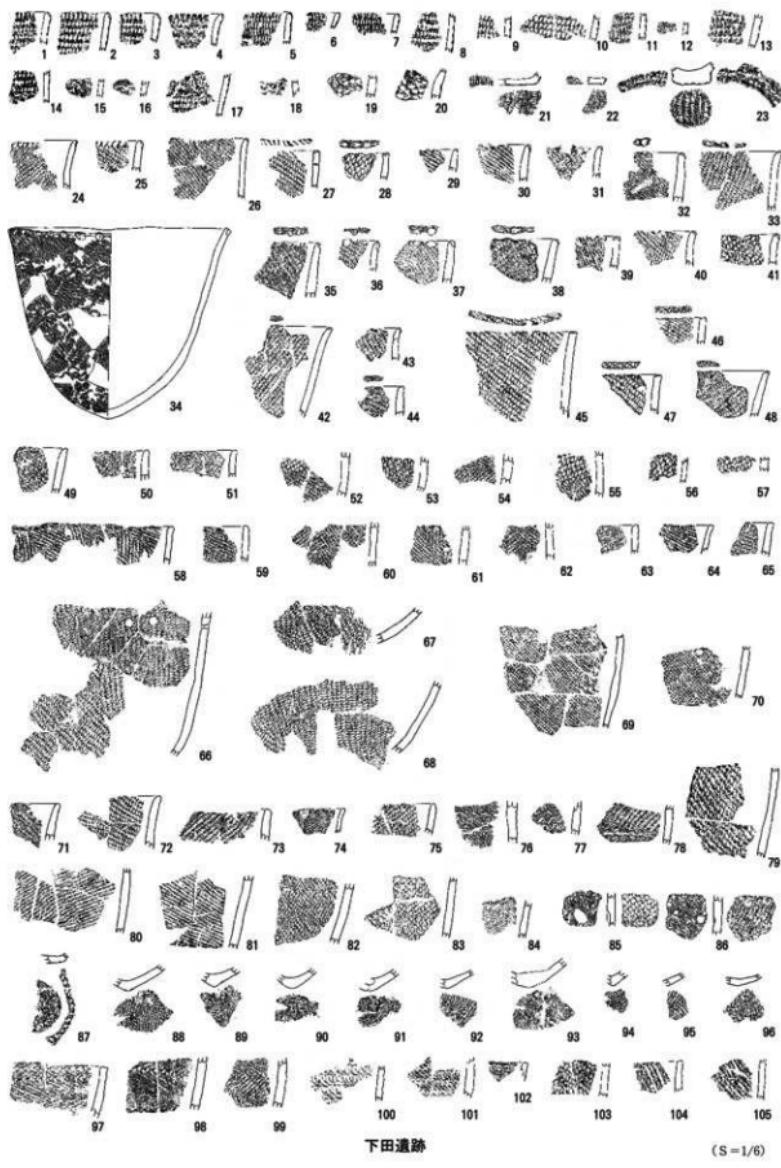
小出 I 遺跡



小出 II 遺跡

(S = 1/6)

第10図 県南内陸部（雄物川左岸）の前期初頭～前葉期土器群1



第11図 県南内陸部（雄物川左岸）の前期初頭～前葉期土器群2

第5段階：(小出I遺跡GHI類・小出II遺跡HI類)

(6) 県南内陸部(雄物川右岸・上流域)の土器群(第12図)

この地域の資料は小片が多く明確な変遷過程の把握は困難である。

- ◆ 岩瀬遺跡…A：側面圧痕文施文(12図1) B：口端部スリット施文(12図2・4・8~10) C：口縁部横走繩文(12図5~7) D：縦走繩文(12図14・17) E：平行刺突文(12図18) F：沈線文(12図19)
- ◆ 小田IV遺跡…A：非結束羽状繩文(12図20・21) B：結束羽状繩文(12図28・29)
- ◆ 小田V遺跡…A：非結束羽状繩文(12図34~37) B：斜繩文(12図38~41)
- ◆ 虫内III遺跡…A：ループ文(12図67) B：撚糸文施文(12図68・69)
- ◆ 岩井堂第2洞穴…A：非結束羽状繩文(12図77~80) B：結節回転文施文(12図81・82) C：刺突文施文(12図83~85) D：結束羽状繩文(12図86)

比較的まとまりのある岩瀬遺跡の土器群は、上川名式(原頭II群)と長七谷地III群Ad類の組み合わせだが、12図8のように樽型の器形で垂直のスリットをもつものは上川名式(室森B)に、5の胸部縦走繩文や7の口縁部内面施文などは長七谷地II群にそれぞれ近い要素であり、今まで県内他地域で見てきた同段階資料の中でもやや古手の土器群である。

小田IV遺跡A類は口唇部に刺突文を施しており、小出II遺跡D類の口唇部加飾資料に近い要素と見られる。越上遺跡資料は斜繩文のみの小破片だが、12図53には口端部にスリットが見られることから、下田遺跡の斜繩文系土器群に近いものと考える。湯元遺跡資料(12図70~76)は同一個体と思われるもので、口端部のスリットと全面に横位密接結束羽状繩文を施す点で、下田遺跡出土の11図97と同類の土器である。虫内II・III遺跡の63・67は口縁部に3段のループ文を施す土器で、竜毛沢遺跡8図71と同類と考えられ、口縁部からループ文を施す点では物見坂III遺跡4図62に対応すると考える。虫内III遺跡では口縁部に結節回転文(68)や網目状撚糸文(69)を施すものが出土している。大木2a式の可能性もあるが、小出II遺跡の10図108~118との関係に注意が必要である。

第1段階：(岩瀬遺跡CD類)=(岩瀬遺跡AB類)

第2段階：(小田IV遺跡A類・小田V遺跡A類)

第3段階：(越上遺跡・湯元遺跡)

第4段階：(虫内II遺跡・虫内III遺跡A類)

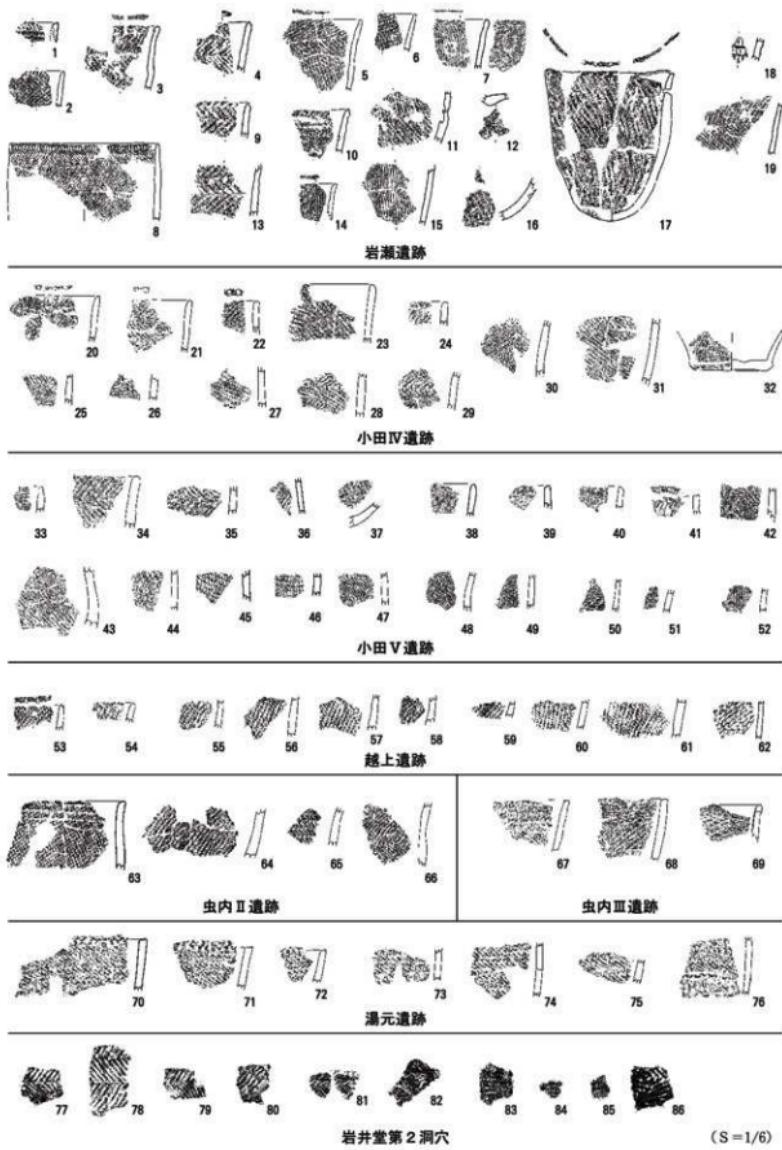
第5段階：(虫内III遺跡B類)

3 県内資料の分類と系列整理

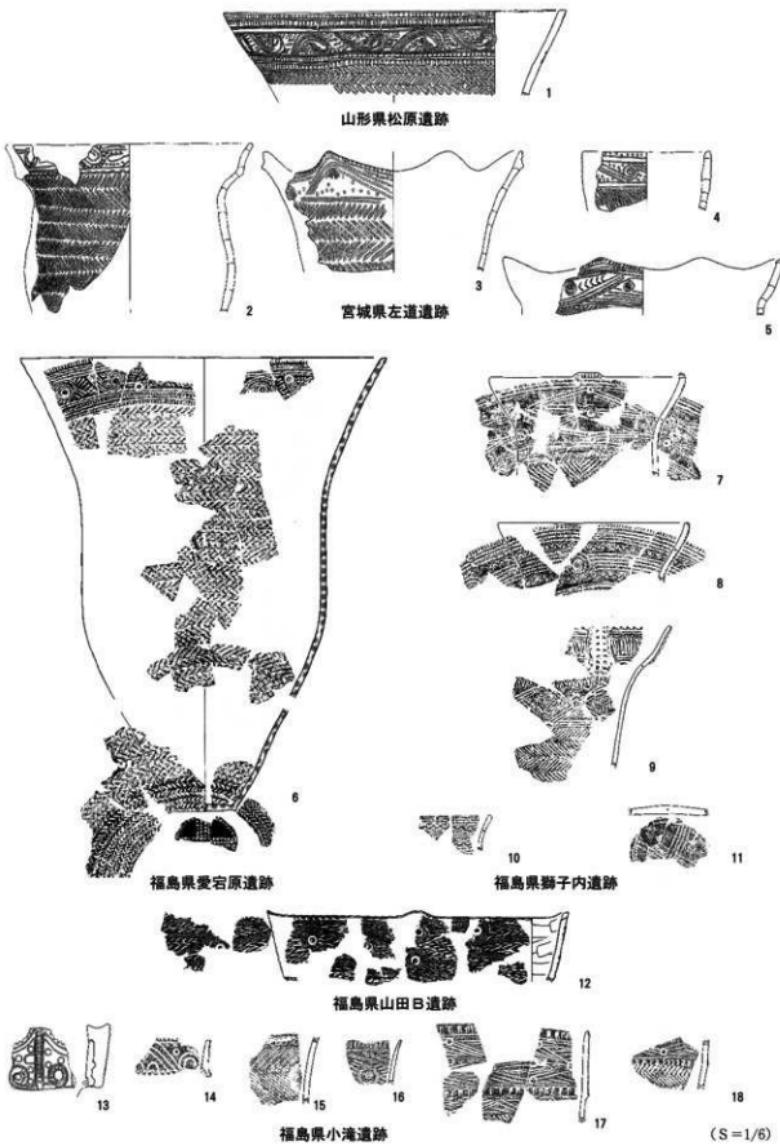
前項で県内資料を概観したなかで、県北・県南の地域差を越えて幾つか類似する土器群が存在することが明確になった。現在の型式名に比定すれば、上川名式(原頭II群)、長七谷地III群(特にAd類)、表館式、早稲田6類に相当する資料である。以下に、前項でみた各地域ごとの段階設定と主要土器群を核として各土器群の特徴を抽出し、系統関係を検討して系列として整理する。

(1) 長七谷地III群・早稲田6類系列の土器群(第14図)

第1段階：長七谷地III群Ad類に相当する資料である。比較的大型の資料である鳥野上岱遺跡(14



第12図 県南内陸部（雄物川右岸・上流域）の前期初頭～前葉期土器群



第13図 表館式成立期の東北地方南部の土器群（参考図）

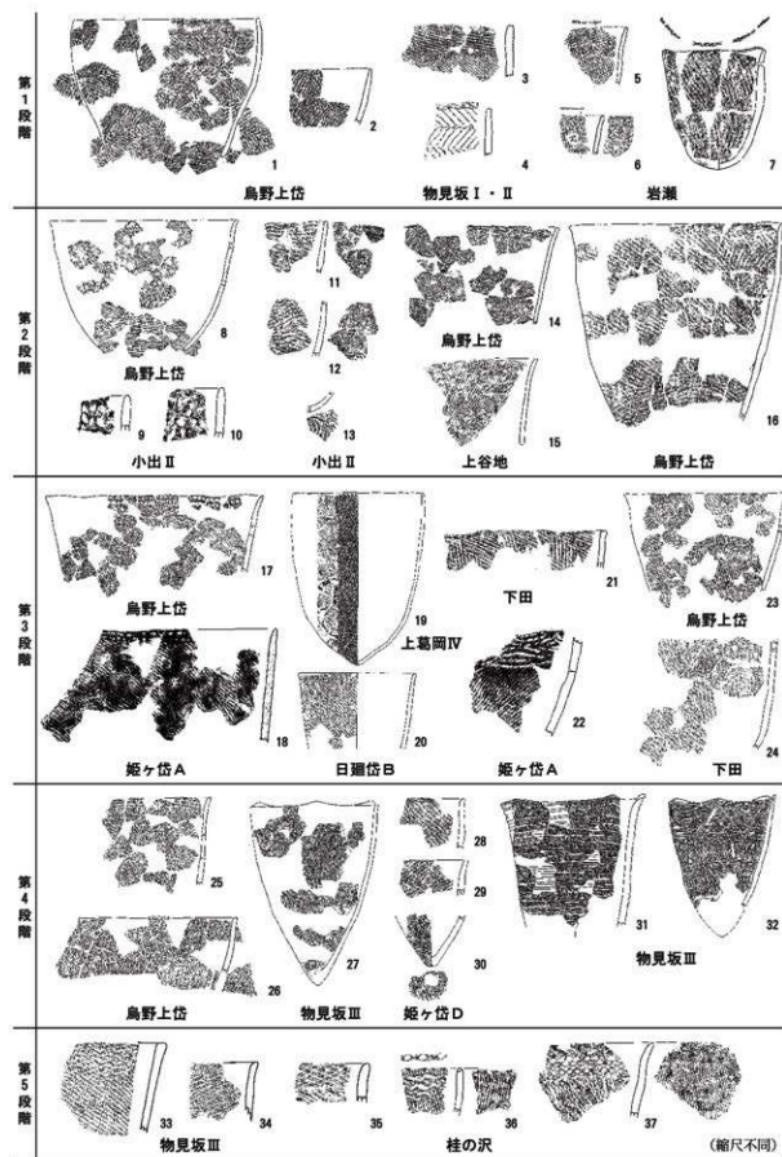
図1)、物見坂I・II遺跡例(14図3)が良好な資料で、県南部でも小出II遺跡(10図64)や岩瀬遺跡(14図5)で出土している。これらは、口縁部文様帯に横走の地文(縄文・撚糸文)を施すこと、確認できる範囲では丸底で比較的の口径の開く砲弾型器形を基本として胴下半部に横走縄文帯をもつこと、胴部地文は確認できる限り施文帯間の区切りが明瞭な非結束羽状縄文を施す土器が主体になる。地文の非結束羽状縄文では鳥野上岱遺跡で縦区画を伴うものが主流なのに対し、物見坂I・II遺跡で縦区画を伴わないものが主流になるという違いが見られる。両者の違いは口縁部横走縄文帯の上下幅でも前者が狭く、後者がやや広くなることでも見られ、これに対応して後者は口縁部横走縄文帯と胴部地文施文帯幅が同じ割合にあり、前者はそれがひらく傾向にある。なお両者とも同様な地文施文規制をもつ地文に特化した土器群(14図2・4)を伴う。

第2段階：まとまりがあるのは鳥野上岱遺跡II群2A類土器である。餅野遺跡(5図15～24)、上谷地遺跡(14図15)、小出II遺跡(14図9～13)から出土しているが、断片的な資料が多い。基本的に鳥野上岱遺跡報告において検討したように、A a種は丸底で比較的の口径が開く砲弾型器形と、口縁部文様帯・胴部中位地文帯・胴下半部横走縄文帯構成を引き継ぎ、工具文施文を取り入れる。B a種は口縁部付近のみ縦区画の非結束羽状縄文帯を、B d種は胴下半部横走縄文帯や地文の縦区画と末端結束回転文の融合、B e種は全面横走縄文帯をもつ土器群である。

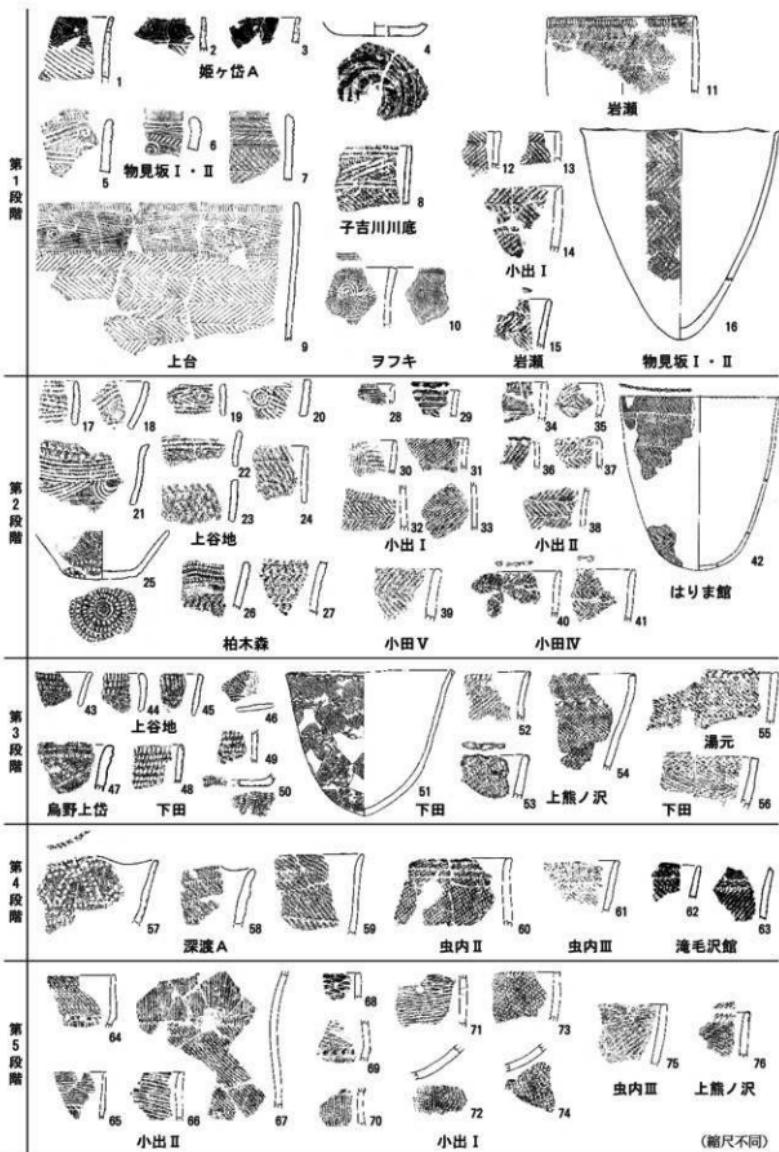
第3段階：基本的に早稲田6類として扱われる土器群である。口縁部文様帯を有する土器には2系統あると考えられる。一つは前段階から継続する狭い口縁部文様帯に、押引状の連続刺突文を施す系統(14図17・18)である。前段階と大きく違うのは、口唇部が先細りになり、使用原体の条がやや細くなる点である。もう一つは、前段階B a種から変化した口縁部付近のみ交差状縄文(7図14・15)、鋸歯状縄文(14図21)に代表される、地文により新たな口縁部文様帯を作出する系統である。この系統が地文地に幅広の口縁部文様帯(または胴上半部文様帯)を獲得したことにより、文様置換や表盤式のモチーフの移入などによって、14図22や32が成立すると考えられる。また縦走縄文(7図16、11図66～68)が見られるが、これらは地文を主体とした文様構成のため、小片で出土した場合には判別が難しい。なお大湯環状列石では結束羽状縄文を地文とする4図32も出土していることから、この段階に結束羽状縄文を施文する土器が伴うと考えられ、14図19や20が併存すると考える。ただし、本系列における地文の変遷経緯では結束羽状縄文の発生過程が見てこない。結束原体を多用する東北南部の宇賀崎下層系土器群の影響が考えられる。

第4段階：典型的な早稲田6類と考えられる。物見坂III遺跡出土の14図32は、前段階の幅広口縁部文様帯の特徴を引き継いだ土器である。前段階との明確な差異は地文にループ文を多用することで、14図27は胴上半部がループ文、下半部は結束羽状縄文により地文を施す。この地文構成上に文様を描くのが14図32である。また尖底部付近には4図61で押引文を、14図27では縦方向の結束羽状縄文が認められ、底部文様を特殊化する傾向が認められる。一方鳥野上岱遺跡14図25は、前段階の幅狭口縁部文様帯を引き継ぐものである。

第5段階：上記土器群に連続するような型式内容をもつ土器群は現段階では明確でないが、早稲田6類を出土する物見坂Ⅲ遺跡、桂の沢遺跡、鳥野上岱遺跡、児桜貝塚では結節回転文や撚糸文施文土器が出土する傾向にある。これらの土器群は、円筒下層a式に比定される資料も含まれるが、桂の沢遺跡では内面に条痕文を伴う資料が出土していることから、円筒下層a式への過渡的様相をもつ土器



第14図 秋田県内の長七谷地III群・早稲田6類系列土器群の変遷図



第15図 秋田県内の上川名II式（原頭II群）・表館式系列土器群の変遷図

群として理解すべき部分があると考える。

以上が県内における本系統の変遷だが、本土器群は基本的に丸底・尖底の形態を維持する土器群で、第1・2段階では口縁が開く形態が主流で、第3・4段階は円筒形に近い形態へと変化していく。

(2) 上川名式(原頭II群)・表館式系列の土器群

第1段階：概ね上川名式(原頭II群)に相当する資料である。上台遺跡例(15図9)から、胴部上半は直立気味に立ち上がり、口縁部で弱く内湾する器形であることが分かる。口縁部文様帯をもつ系統は、主文様要素である側面圧痕文により1～数段の渦巻を起点とした横走・斜走文様、その内部への短斜沈線充填が共通する文様である。胴部には区画が明瞭な非結束羽状縄文を施す。口縁部文様帯上下端には短沈線による区画を施すものがある。14図10では口唇部や内面に側面圧痕文の施文を確認できる。また、地文に特化した土器群の特徴として、地文施文帶境界部に微隆起線状の明瞭な区画をもつ非結束羽状縄文や、施文帶最上段部の上下幅を狭くして特殊化する点が挙げられる。

第2段階：上川名式(原頭II群)と表館式の過渡期に当たると思われる土器群である。資料は大きく2系統に分かれる。一つは上谷地遺跡(15図17～22)や柏木森遺跡(15図26)に代表される連結刺突文系土器群である。最も典型的な特徴を示す14図20では、前段階の口縁部文様帯の幾何学文を連結刺突文に置き換えた資料で、この胴部は15図21・23から上下幅の狭い非結束羽状縄文であることが推測される。口縁部文様帯の状態は13図7に、胴部地文の状態は13図1・6に近似し、前段階とのつながりが強い資料と考えられる。これらは、主文様要素を早々と工具文(連結刺突文)に置換する系統である。もう一つは小出I・II遺跡(15図28)・小出II・III遺跡(15図34)に代表される、文様構成の崩れた側面圧痕文施文土器群である。小片資料のため判断を迷う資料であるが、前段階の極めて強い文様構成規制は存在しない。これらに対応すると思われるのが左道遺跡資料(13図2～5)で、側面圧痕文という文様要素を継続する系統である。小出I・II・III遺跡における後者の系統は、土器群中に占める口縁部文様帯保有土器が少なく、15図30・31・36・37のような地文特化土器群が優勢になる。これ以後、側面圧痕文施文の系統は消滅し、これらに伴っていた地文特化土器群が本系統を受け継ぐと考えられる。このことは下田遺跡の様相からも肯首されると考える。

第3段階：表館式に相当する14図43～50が前段階の上谷地遺跡A類を受け継ぐ土器群として存在する。ただし、実際の土器群の組み合わせでは、下田遺跡の土器群のように全体的な出土量及び型式学的な変化からみて、上谷地遺跡A類から変化する14図48～50の刺突文系は客体的な土器群であり、主体は小出I・II・III遺跡と関係が深い地文に特化した15図51～53の土器群が主体である。これは、丸底・尖底形態が基本であることからも、この時期県北部的な土器群が県南部地域に強く影響していると考えるべきであろう。これは、結束羽状縄文施文土器群が少ないとても関係しているかもしれない。なお少量であるが、上谷地遺跡(15図23)のような施文帶上下幅の狭い地文の土器が、15図56のような横位交差状の結束羽状縄文を生みだした可能性がある。また、上下密接のループ文も本段階に存在する可能性が高いが、現段階の出土資料では明確な位置付けは困難である。

第4段階：表館式から発展した簡略化した口縁部文様帯をもつ土器群である。本系列土器群資料は極めて少ない。物見坂III遺跡における地文ループ文土器群に対応する土器として、虫内II・III遺跡(15図60)や虫内III・IV遺跡(15図61)のような土器が存在するが、土器群の様相としては不明である。また県北部

の資料であるが、深渡A遺跡の15図57は無文地の上下を刺突列で区切って口縁部文様帶としており、内部に山形状刺突列を施すこと、胸部にループ文を施すことなどから、前段階の刺突文系土器群の系統を引く資料と考える。口唇部加飾もその考え方の補強になると思われる。

第5段階：極めて不確定な段階設定である。核になる小出I遺跡・小出II遺跡の土器群は、15図68～70の存在から、15図64・65・67・68～70が撫糸文による文様施文という点で66・71・72が同類と見なせるが、前段階からの変遷過程は不明である。網目状撫糸文が存在するため、大木2a式との関係が注意されるが、組紐回転文や丸底形狀であること、県北部の土器群との対応関係などから、今後の資料増加をまって総合的な見解から位置付けるべきと考える。

4 小結

秋田県における縄文時代前期初頭から前葉期にかけての土器群の様相を、今回の検討では5段階区分で概観した。土器群の基本的な様相は県北に長七谷地Ⅲ群A-d類系列主体の、県南に上川名式(原頭Ⅱ群)に端を発する土器群が2系列に分離するあり方と把握できるが、第2段階以降幾つかの系統に分裂して、遺跡ごとに様々な組み合わせを有することや、第2・第3段階と徐々に県北部的な様相が県南部においても優勢になること、第4段階は特に県南部で資料不足であるが、第5段階における丸底の存在などからこの傾向は引き続くものと推測される。また、第5段階の大木1式併行期や、円筒下層a式前段階の土器群には、絡条文や組紐による地文施文(または口縁部文様帶施文)が存在する可能性があることが分かった。

IV おわりに

本文は、鳥野上岱遺跡の報告書で掲載できなかった資料の報告に端を発したものであるが、鳥野上岱遺跡の主要な出土遺物である縄文時代前期初頭～前葉期の土器群や、県内のより詳しい様相についても検討することができた。断片的な資料を、他県で出土している略完形資料をイメージしつつ分類しているため、予測の部分がかなり多い考察である点に自省の念がつのるが、筆者としては今の状況で出来る限りのことをという考えを優先させて今回の検討を行った。該期蓄積資料の位置付けについて一定の方向性をつけられたとは思うが、今後の新資料の増加を待って再度検討してみたい。また、県外の同時期資料との比較は今後の課題である。

註1 鹿角市三ヶ田館跡では、縄文時代前期前葉に位置付けられると思われる内面条痕施文土器が複数出土している。同時期と思われる土器には、胴部に多段性筋節回転文を施すものが含まれることから、前期前葉期土器群後半期の様相を知る上で重要な土器群と考えられる。

なお、三ヶ田館跡の遺物については原執筆時点未だ報告がないため、今後は扱っていない。

註2 平底化については、鳥野上岱遺跡報告書まとめにおいて、上川名式(堂森B)段階中の丸底が徐々に平底に変える過程で、底部外面への圓文円形施文が文様置換により円形刻矢列へと変化する流れにおいて指摘した。この系統における平底出現は極めて漸進的で、かつ丸底から派生する外表面施文の意識を受け継ぐ要素と考えられる。

（引用・参考文献）

相原淳一 1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に－」
『考古学報誌』第76号第1号

1994「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉土器群の様相について」

『第1回縄文セミナー－早期終末・前期初期の諸様相』資料集・記録集

青森県教育委員会 1979「長七谷地貝塚」青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集

秋田県教育委員会 1973「餅野遺跡」鹿角市・小坂町大規模農道発掘調査報告書・秋田県文化財調査報告書第29集

1979「重兵衛田Ⅱ遺跡」秋田県遺跡分布検査調査報告書・秋田県文化財調査報告書第60集

1980「湯元遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第68集

1981「湯瀬館遺跡・上山田遺跡」「東北縦貫自動車道発掘調査報告書1」秋田県文化財調査報告書第78集

1982「上島Ⅳ遺跡・案内Ⅱ遺跡」「東北縦貫自動車道発掘調査報告書V」秋田県文化財調査報告書第91集

- 1984 「柏木森遺跡」「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ」秋田県文化財調査報告書第106集
 1984 「はしま館遺跡」「東北縦貫自動車道発掘調査報告書X」秋田県文化財調査報告書第109集
 1984 「案内VI遺跡」「鶴道田山・花輪輪関係遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第115集
 1985 「石坂台I遺跡」「七谷川遺跡」「東北縦貫自動車道発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第125集
 1987 「大杉沢遺跡」「一般国道13号御所野拡幅事業に係る埋蔵文化財発掘調査」秋田県文化財調査報告書第151集
 1988 「太田谷地跡 2次調査」「西山地区免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V」秋田県文化財調査報告書第185集
 1990 「竜毛沢遺跡」「一般国道7号二ツ井バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査」秋田県文化財調査報告書第188集
 1990 「下田跡」「東北横断自動車道田線発掘調査報告書IV」秋田県文化財調査報告書第189集
 1991 「大沢跡」「秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I」秋田県文化財調査報告書第204集
 1991 「小出I遺跡」・「小出II遺跡」「東北横断自動車道田線免農道発掘調査報告書V」秋田県文化財調査報告書第206集
 1991 「上ノ沢遺跡」「大川地区免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II」秋田県文化財調査報告書第213集
 1992 「野口遺跡」「JR北陸線改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V」秋田県文化財調査報告書第222集
 1993 「由内I遺跡」「東北横断自動車道秋田線免農道発掘調査報告書IV」秋田県文化財調査報告書第234集
 1993 「山上遺跡」「東北横断自動車道秋田線免農道発掘調査報告書XV」秋田県文化財調査報告書第235集
 1994 「小田IV遺跡」「東北横断自動車道秋田線免農道発掘調査報告書XVI」秋田県文化財調査報告書第243集
 1994 「戸戸山遺跡」「鶴道田山・花輪輪関係遺跡発掘調査報告書II」秋田県文化財調査報告書第248集
 1996 「小田山遺跡」「東北横断自動車道秋田線免農道発掘調査報告書X X I」秋田県文化財調査報告書第262集
 1997 「桂の沢遺跡」「下北前田停車場線地方道改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査」秋田県文化財調査報告書第247集
 2000 「精内C遺跡」「森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書III」秋田県文化財調査報告書第299集
 2000 「姫・岱D遺跡」「森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV」秋田県文化財調査報告書第300集
 2001 「岱E遺跡」「日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V」秋田県文化財調査報告書第314集
 2001 「松木台I遺跡」「日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IX」秋田県文化財調査報告書第326集
 2002 「精内A遺跡」「森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI」秋田県文化財調査報告書第334集
 2003 「向日田B遺跡」「森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IX」秋田県文化財調査報告書第347集
 2003 「ヤツキ遺跡」「鹿島町は場整備事業(大河川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II」秋田県文化財調査報告書第352集
 2003 「物見坂Ⅲ遺跡」「国道289号国道路改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第354集
 2005 「森吉ノ前C遺跡」「森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書X IV」秋田県文化財調査報告書第393集
 2005 「日船山B遺跡」「森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書X V」秋田県文化財調査報告書第394集
 2005 「上谷地跡」「日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XX II」秋田県文化財調査報告書第395集
 2005 「谷地中遺跡」「日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XX III」秋田県文化財調査報告書第404集
 2006 「鳥野上戸遺跡」「一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書X VI」秋田県文化財調査報告書第406集
 2006 「深渡A遺跡」「森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書X VII」秋田県文化財調査報告書第408集
- 秋田市教育委員会
 1965 「児童貝塚」
 石郡岡崎一・安田忠市 1999 「高清水丘陵の縄文、弥生時代の土器」「秋田考古学」第40号
 舟川 譲一 1971 「茂屋下岱土器群(繩文前期)」「大船越高等学校社会部考古部」
 鹿角市教育委員会 1990 「大湯状列石周辺遺跡発掘調査報告書(6)」鹿角市文化財調査報告書38
 1990 「下砂川遺跡発掘調査報告書」鹿角市文化財調査報告書39
 1999 「大湯状列石周辺遺跡発掘調査報告書(15)」鹿角市文化財調査報告書62
 2003 「大湯状列石周辺遺跡発掘調査報告書(19)」鹿角市文化財調査報告書72
 2006 「物見坂Ⅱ遺跡(2)・物見坂Ⅰ遺跡・中間地城跡台整備事業関連遺跡発掘調査報告書」鹿角市文化財調査報告書86
 置賜考古学社 1977 「松原」
 工藤 大 2002 「早稲田第6 瓶土器と表鉢式土器について」「リギングサイド. II」
 熊谷常正 1983 「岩手県における縄文前期土器群の成立 一条条文系土器群から羽状錐文土器群へー」『岩手県立博物館研究報告』第1号
 七ヶ浜町教育委員会 1991 「左道遺跡」
 鈴木俊男 1968 「院内若井堂遺跡の発掘調査」「北方考古」第1号
 谷藤保彦 2005 「表鉢式土器に関する一考察 一広域分布からみた視点ー」「葛西勲先生追憶記念論文集 北東の考古学」
 烏海町教育委員会 2002 「土子II遺跡」「東蔵文化財詳細分類調査報告書・土子地区 - 烏海町文化財調査報告書第2集
 2004 「畠畠III遺跡」「跡跡詳細分類調査報告書 - 岱子地区調査報告書 - 」烏海町文化財調査報告書第3集
 奈良良介・山下孫應・富権泰郎 1963 「雄勝郡雄勝町岩井堂穴跡遺跡発掘調査略報」「秋田考古学」23
 旗代市 1998 「近代市史 資料収集・考古」「能代市史編さん委員会」
 1986 「企石面発掘調査報告書」
 福島県教育委員会 1993 「「山の内遺跡」「東北横断自動車道遺跡調査報告2」」福島県文化財調査報告第292集
 1996 「「斎子I遺跡(第1次調査)」「猪上川ダム遺跡発掘調査報告」」福島県文化財調査報告第320集
 1997 「「山由B遺跡」「田馬開闢発掘調査報告」」福島県文化財調査報告第335集
 福島市教育委員会 1988 「本在市史 資料収集・考古」「福島市文化財調査報告第31集
 本在市 1984 「本在市史 史料編Ⅰ上」
 武藤康弘 1988 「東北地方北部の縄文前期土器群の縦年学的研究 一表鉢式・早稲田6 瓶土器をめぐってー」「考古学雑誌」第74巻第2号
 1990 「東北地方北部の縄文前期土器群の縦年学的研究Ⅱ 一円筒下唇 a式直前の土器群をめぐってー」「考古学雑誌」第76巻第3号
 森吉町教育委員会 1997 「地蔵傍跡」「JR馬關開発連絡調査報告書」「森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査~」
 1999 「平成10年度埋蔵文化財発掘調査報告書 上戸川B・C遺跡 横ヶ岱A・B・C遺跡 ~森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査~」
 山下孫應 1964 「秋田県雄勝町岩井堂穴調査概報」「洞穴遺跡調査会会報」10・11
 1967 「秋田県岩井堂岩陰」「日本の洞穴遺跡」

藏骨器を伴う中世火葬墓の一例

－大仙市水木田遺跡出土の事例から－

高橋 学*

はじめに

ここに紹介する資料は、大仙市〔旧中仙町〕中仙公民館長野分館が所蔵する須恵器系陶器の小壺と片口鉢（擂鉢）である。これら陶器の出自は、大仙市〔旧中仙町〕長戸呂字柳原在住の佐々木チヨさんが1959年5月16日、長野公民館（当時）資料室に持参したことを端緒とする。陶器出土の経緯・状況は、聞き取り調査を行った藤田秀司氏により、次のように記録された。

1958年秋、「自家の牛蒡畑を掘っていたところ地下約1m位のところから出た事、下には川原石が敷きつめられていた事、甕には擂鉢状の蓋がかぶさっていた事、中には3分の1くらい木炭が入っていたが、死体の骨を入れた骨壺ではないかなどという人もあったので流れに入れて洗ってから持ってきた」。

牛蒡畑の位置は、佐々木さん宅の北東側約400mの大仙市〔旧大曲市〕四ツ屋字水木田地内である。

筆者も2004年12月、佐々木さん宅を訪ね、聞き取りを行った。それによると、「川原石は一辺25cm前後であり、何個か掘り上げた。焼物（片口鉢）も当初は石だと思い、落として割ってしまった（現在接合してあるが、3片に割れている）。その後、慎重に掘ったところ、鉢の直下から壺が見つかった」。

本陶器は、『経攬』として大仙市〔旧中仙町〕の文化財指定（1993年3月30日付け）を受けているが、筆者が担当した大仙市払田柵跡第117次調査区での類似事例の検出を契機として、水木田の陶器が火葬墓の藏骨器ではないかと推測されるに至った。小稿では陶器の資料紹介と共に、出土類例を踏まえ、当該陶器を通して見えてくる中世火葬墓の一端について言及したい。

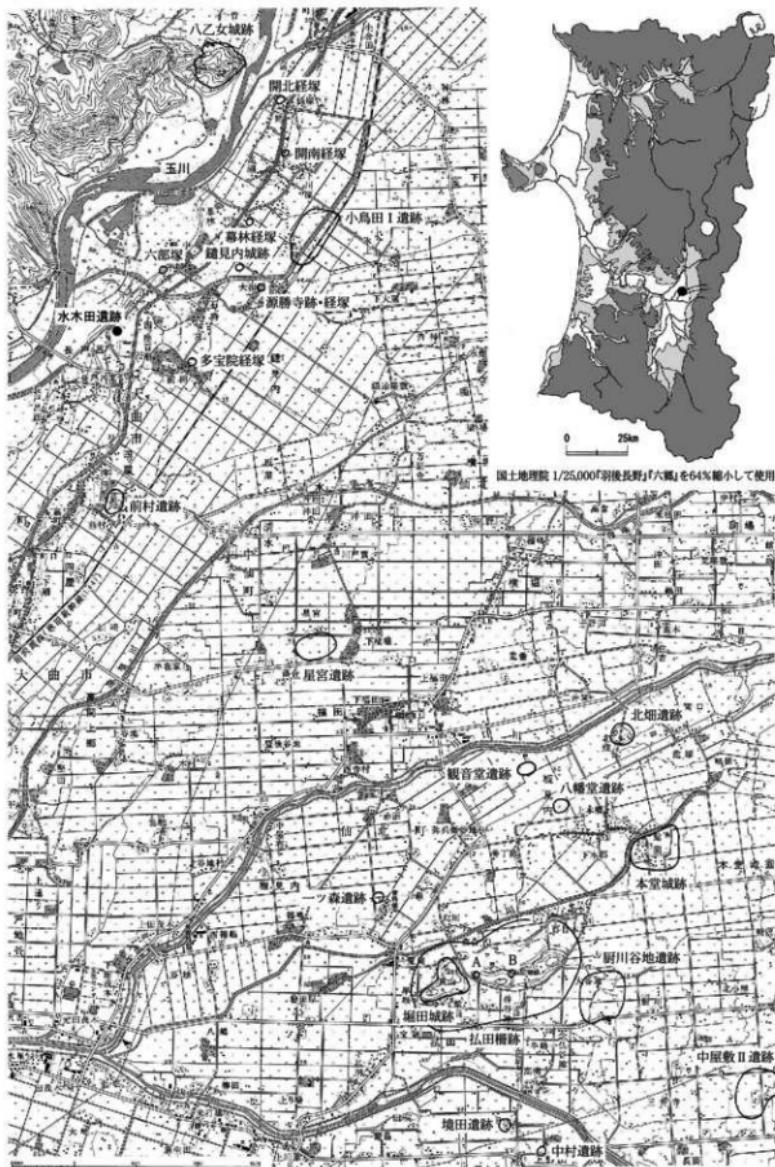
1 出土地点の位置・立地と周辺の中世遺跡

陶器の出土した水木田地区は、横手盆地の北部である旧大曲市域の北東端に位置し、旧中仙町長戸呂地区と近接する。両地区は、南北に走る旧国道105号線（近世：角館街道）と西に向かう県道四ツ屋神岡線（県道67号線）が交差するところであり、雄物川の支流である玉川左岸域の自然堤防上（沖積低地）に立地する。標高は約34mである。

水木田近辺における中世遺跡は、城館跡として八乙女城跡（大仙市長野）や前村館跡（大仙市四ツ屋）が周知されるものの、時期・館主・由来等は不明確である。また旧中仙町域では、小鳥田I遺跡（大仙市鍛見内）、旧仙北町域では、払田柵跡長森丘陵部（第1図A・B地区）、堀田城跡（大仙市払田）、星宮遺跡（大仙市横堀）、中村遺跡（大仙市上野田）、一ツ森遺跡（大仙市板見内）、旧千畠町域では中屋敷II遺跡（美郷町土崎）などで中世陶磁器が出土あるいは採集が報じられている。

一方、水木田の南西側約2.5kmの大仙市〔旧大曲市〕新谷地字了徳（近世：新谷地村了徳）の玉川縁では、銭貨が出土したとの記録を菅江真澄が残している。

* 秋田県教育庁払田柵跡調査事務所主任学芸主事（兼）調査班長



第1図 遺跡の位置と周辺の中・近世遺跡

2 出土陶器の概要

(1) 小壺（第2図1）

1はロクロ使用の小壺であり、底部のみが底抜け状態で欠落している。法量は口径9.2cm、頸部径8.0cm（内法径6.5cm）、最大径17.4cm、残存高19.0cm。器厚は体部最下位で1.8cm、中位で1.2～1.5cm、口縁部では0.7cm程度である。

底部欠落は内面からの意図的な強い打撃に因るものと観察される。壺の最大径は、体部中央よりや上となり、重心の位置が高くなる。頸部～口縁部は肩部より緩く外反しながら立ち上がり、口縁上部は丸味をもった嘴頭を呈する。内面肩部には粘土紐の接合痕跡が明瞭に残り、壺が二段成形であることを物語る。器面は、全体的にはロクロ調整により平滑に仕上げられているが、外面体部下半には横位のケズリが加わる。胎土は緻密、焼成良好であり、色調は灰～灰黄色を呈する。

体下部には寄贈時と見られる紙ラベルが貼付されている（第3図1b）。ラベルには、「陶壺／長戸呂、佐々木チヨ寄贈／発掘 四ツ屋字水木田畠／S.34.5.15」（／は改行）と記されている。

本例は吉岡康暢による型式分類では壺R種B類の無耳素文の長胴壺に当たる。^(注1)

(2) 片口鉢（第2図2）

2の片口鉢は完形である。法量は口径29.8cm、底径12.2cm、器高13.1cm。器厚は体部中位で1.0cm前後、口縁部では0.7cm程度である。

底部には静止糸切り痕跡を留める。その外縁辺には箋状工具による幅1.5cm程のケズリ調整が一周し、切り離し痕を消失させている。体部は底部からくらか内傾気味に立ち上がり、口縁上部（口唇外面）は面取りによる調整がなされ方頭状を呈する。注口は指2本分ほどの幅で外方に引き出される。注口外面両脇と下部には指頭による浅い圧痕が残る。内面には、櫛歯工具による直線的な卸目が8単位施用される。1単位の工具幅は2.3cmで、櫛歯は14本である。内面体部中位以下には器使用に伴う磨耗痕が顕著に観察され、ここでは卸目が完全に滅失している。胎土は緻密、焼成良好である。色調は灰～灰青色を呈し、内面全体に胡麻塗状の薄い白灰が見られる。

これら2個体の製作時期は、須恵器系陶器の編年に従えば13世紀代に収まると推測される。また小壺は、器形及び胎土の状況から、珠洲Ⅱ期相当とされる大仙市〔旧南外村〕大畠窯跡群^(注12)の可能性がある。

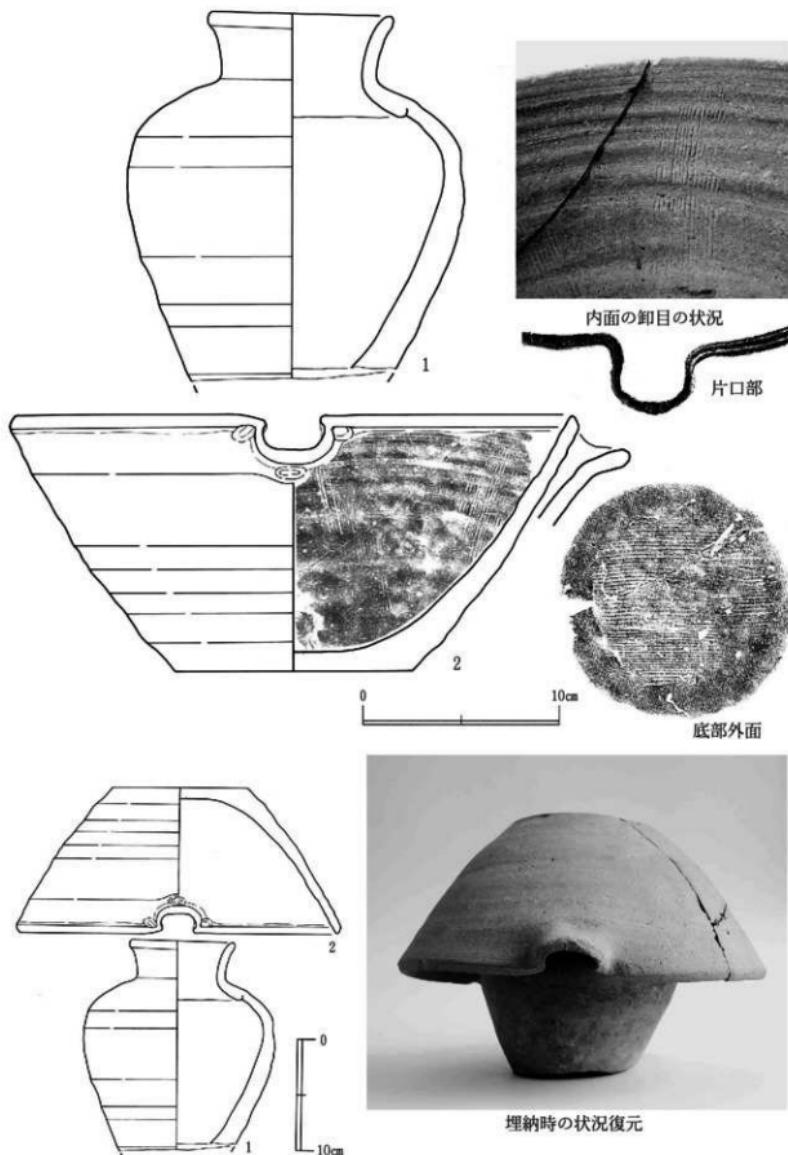
3 出土陶器の位置づけ

水木田地内より不時発見された陶器2個体は、経塚に伴う埋納物である経容器ではなく、火葬骨を収めた藏骨器と推測した。その理由は小壺の底部欠落にある。一般に経容器は底部穿孔もしくは底抜けの状態で使用する事例はなく、逆に藏骨器はある程度の頻度で認められるからである。^(注13)

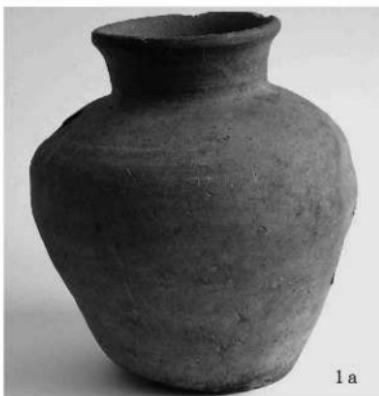
(1) 底部穿孔の藏骨器

藏骨器に穿孔を施す目的は、実用的な防湿・排水あるいは信仰的な意図が考えられるが、現在では、両者それぞれと考えざるを得ない事例が確認されることから、「もはや二者択一的な議論を重ねることは生産的でなくなっている」というである。^(注14)

水木田と同様に藏骨器とされる須恵器系陶器に穿孔が見られるのは、東北地方では山形県酒田市城



第2図 遺物（1）



1 b : 底部が見事に打ち抜かれている様子が観察される



縮尺 1 : 約 1 / 2.5
2 : 約 1 / 3

第3図 遺物 (2)

輪柵跡で出土した四耳壺（12世紀後半）の1例である。^(註15)

また古代の蔵骨器に穿孔が見られる事例は、秋田県2例、山形県2例、岩手県1例が報告される。^(註16)

秋田県では、大仙市〔南外村〕小出I遺跡S R06と払田柵跡第125次調査区（真山丘陵部）SK 1689である。両例とも底抜けとさせた土師器長胴壺を倒立埋設する。時期は、小出Iが10世紀前半、払田柵が10世紀前～中頃である。

山形県では、鮫海郡遊佐町宮山坂墳墓群の1号墳と9号墳にある。両者とも土師器短頸壺を正立埋設している。前者は底抜け、後者は径約6cmの穿孔が見られる。時期は、9世紀後半から10世紀である。

岩手県では、胆沢郡金ヶ崎町西根遺跡に認められる。本例は土師器長胴壺を倒立埋設させている。底部には径3cm以上の穿孔がある。時期は9世紀後半から10世紀前半である。

（2）蔵骨器の類例

水木田のように須恵器系陶器の壺を蔵骨器とし、片口鉢（擂鉢）で蓋をした事例は、東北地方に限定すれば、次の5遺跡に認められる。秋田県1遺跡（①）、山形県4遺跡（②）～（⑤）である。^(註20)^(註21)

①払田柵跡第117次調査区（大仙市払田字長森、第1図A地点）

古代城柵官衙遺跡である払田柵跡は、9世紀初頭に創建され、10世紀後半代には終焉を迎える。しかし長森丘陵部西側は13世紀に入ると墓地として場の利用が新たに開始されることが近年明らかになってきた。それは土壘・空堀で画された区域内一墓域に一墳墓（塚墓）・火葬墓が構築されることが判明したことである。墓域は丘陵部の馬背状の狭い平坦面から北側および南側緩斜面部にかけてを選地しているが、墳墓は平坦面上、火葬墓は南側緩斜面部にそれぞれ立地させている。

2基検出された墳墓のうち、1基（S X1264、一辺5m前後の隅丸方形プラン）の盛土中央部には、完形の小壺（器高16cm）の上に口縁部～体上部を打ち欠いて皿状に加工した擂鉢を被せる形で納められていた。壺内部には肉眼で骨等と見られる遺物は確認されなかったが、土壤を分析した結果、「火葬骨を埋納した可能性がある」と報告がなされた。また3基検出された火葬墓は、人骨と分析された焼骨（性別・年齢等は不明）のまとまりから、おそらく曲物（径25～30cm）を容器として埋葬されたものと推測される。

墓域の形成時期は、墳墓内や墓域内出土の陶磁器が、大畠窯跡群と目される須恵器系陶器や同安窯系の青磁碗であることから、13世紀前半代を上限とできよう。これに確認された埋葬施設の数と陶器の伝世・使用期間を考慮したとしても、下限は13世紀代に収まると推測したい。^(註22)

②七日台遺跡（鶴岡市田川字七日台）

遺跡は庄内平野の南西部にあたり、越後北部からの山地が庄内平野と接するところに位置する。墳墓群は標高70mの七日台丘陵尾根上にあり、10基の積石塚（1号～10号墳）が2m間隔で南北一直線状に並ぶ。壺と片口鉢がセットで出土したのは、3号墳と10号墳である。同遺跡は、『吾妻鏡』に泰衡郎従と見える田川太郎一族の墓所と推測されている。時期は12～13世紀。

③神社口遺跡（鶴岡市西目）

遺跡は鶴岡西方の荒倉山（西山）を主峰とする西部丘陵の東側、平野に面した一支丘、標高20数mの丘陵上に立地する。集石墓（ケルン状の石組）内から壺（T種・中壺）と擂鉢がセットで出土した。時期は13世紀代。

④長根遺跡（酒田市〔旧平田町〕田沢）

遺跡は最上川下流域の支流田沢川に面した丘陵上に立地する。集石墓とみられる遺構内より波状文壺と片口鉢がセットで出土した。時期は12～13世紀。

⑤袋樋遺跡（鶴岡市〔旧羽黒町〕羽黒町玉川）

遺跡は羽黒山の西方、北に伸びる丘陵支脈上に立地する。集石墓（直径7m×高さ1.5m）から、壺と擂鉢・浅鉢が2セット確認された。壺の内部には火葬人骨片が残っていた。同墓は、「羽黒山に密接に関係する者たちの墓であろう」とされる。時期は12～13世紀。

（3）小結

水木田蔵骨器の位置づけを探るために、前二項では底部穿孔と容器の組み合わせの視点で類例を抽出してみた。その結果は次のようにまとめられる。

底部穿孔の蔵骨器の使用は、古代～中世においては、岩手県西根遺跡例を除くと、横手盆地北部と山形県庄内地方に分布が偏ることが明らかとなった。また須恵器系陶器壺と片口鉢をセットとする蔵骨器もまた、横手盆地北部と庄内地方の丘陵部に立地し、時期も12～13世紀にまとまりをもつ。水木田例は、その分布域、時期において合致するものの、墓の立地が沖積低地であることが両地方例との相違点である。

なお蔵骨器を伴う事例ではないが、大仙市〔旧仙北町〕北畠の北畠遺跡では2005年の発掘調査で火葬墓を伴う中世集落が検出されている。^{（註25）}

おわりに

本火葬墓が発見された水木田・長戸呂地区は、現在の行政区画上では、大仙市として一括りにされている。しかし、2005年3月までは、大曲市と中仙町に分けられていたところであり、遡って近世・近代には四ツ屋村と長戸呂村（1889年〔明治22年〕に長野村の大字となる）として独立していた。^{（註26）}

一方、古代・中世墓の立地は、平安京や鎌倉の例を引くまでもなく、都市（町）郊外の境界部である山野（丘陵）・河原・街道脇とされる。また斎藤忠氏は、墓地としての立地の理想的な条件は、「人びとの集落地と接続せず、しかも、集落地といちじるしく隔絶していないところ」とする。^{（註27）}

改めて本火葬墓の位置を確認すると、そこは村境の自然堤防上（河原の近く）にあたり、近世期ではあるが街道沿いでもある。墓から北西方向を臨めば、河原の向こうには玉川が流れ、視線の先の山並には、古くから信仰の対象とされる長野山がそびえ立つ。中世の人びとにとって、このような景観地に墓を造ることは、ごく自然のことだったのかもしれない。

《謝辞》 小稿が成るにあたり、陶器の発見者である佐々木チヨさんには、聞き取りにご協力いただき、また下記の方々からも直接的なご教示・協力をいただきました。あわせて御礼申し上げます。

村木二郎（国立歴史民俗博物館）／山口博之（山形県埋蔵文化財センター）／山崎文幸（大仙市教育委員会文化財保護課）／今野沙貴子（秋田県埋蔵文化財センター）

註1 藤田秀司「中仙町の文化財（経塚）」『中仙町役場ホームページ』

http://www.hana.or.jp/nakasen/rekisi/bunka/bun_05.html

註2 水本田の陶器については、註1文献以外にもう2つの記述が見られる。これらの三者では、陶器の寄贈・出土時期が微妙に異なる。

①『中仙町史 通史編』には、「原始時代の中仙」という章があり、その中の“古墳墓”という項目には次のような記載がある（原文紙書）。

「昭和三十一年五月中仙町長戸呂の佐々木チヨ子氏が水本田の牛蒡畑より掘り出した須恵の骨壺をもつ古墳が発掘されてから数か月後公民館に届けられた。すぐ現地に行ってみたが残念ながら埋葬施設や封土の大半が掘りかえされ遺構を確認することはできなかった。遺跡は 平地の中の一寸高くなつて東は田圃につづく砂質壤土の野菜畑で、遺構からともに出土したという多数の木炭と、径二〇ミリメートルぐらいの川原石六個が掘り上げられていた。」

中仙町郷土史編さん委員会1983『原始時代の中仙』『中仙町史 通史編』

②遺物は現在、中仙公民館長野分館資料室に展示中であるが、資料の傍らに「中仙町文化遺産所在一覧」（平成5年3月17日）が添えられており、その解説には次のような記載がある（原文紙書）。

「昭和三十年戸呂佐々木チヨ氏寄贈 昭和二十八年墳右佐々木氏の牛蒡畑から発掘石と木炭で包まれていたといふ この須恵器壺は口縁が外反し、ロクロ整形をなす胴部は叩によって整形され叩板の文様がきれいに出てゐる 片口浅鉢を蓋として使用していた これらの遺物と出土状況から中世初期の経塚と考えられる。」

その他に、藤田秀司1989『中仙の塚』『中仙町史 文化編』には、「長戸呂出土経塚（長野公民館蔵）”として壺の写真が掲載されている。

註3 秋田県教育庁払田柵跡調査事務所2001『第117次調査の概要』『払田柵跡 第117・118次調査概要』／高橋 学2003『仙北町払田柵跡－中世前期の墓域－』『中世出羽の諸様相』東北中世考古学会秋田大会資料集

註4 秋田県1980『秋田県総合地質図縮尺角館』／秋田県教育委員会1988『角館街道』歴史の道調査報告書 XIV

註5 秋田県教育委員会1981『秋田県の中世城館』／秋田県教育委員会1987『秋田県遺跡地図（県南版）』

註6 秋田県教育委員会2005『小鳥田I遺跡』秋田県文化財調査報告書第385集

註7 仙北町教育委員会1999『星宮遺跡』仙北町文化財調査報告書第3集

註8 大仙市で遺物保管。須恵器系陶器壺（完形、13世紀代、大烟窯跡群產か）。

註9 千畳町教育委員会2004『中屋敷II遺跡』千畳町埋蔵文化財調査報告書第6集

註10 内田武志・宮本常一1978『月の出羽路（仙北郡八）』『音江真澄全集』第七巻 未来社

註11 吉岡康輔1994『消費資料の型式分類と編年』『中世須恵器の研究』吉岡弘文館

註12 南外村教育委員会1981『大烟窯跡発掘調査報告書』／南外村教育委員会1992『大烟・松山腰窯跡発掘調査報告書』／高橋 学2003『大烟・松山腰窯跡』『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院／小松正夫2003『大烟窯跡・松山腰窯跡－秋田県南外村中世窯跡群－』『中世出羽の諸様相』東北中世考古学会秋田大会資料集

註13 村木二郎氏の教示による。また鎌田 勉氏は、「壺の底部穿孔は藏骨器のみの現象」と明記している。鎌田 勉1997『岩手県内の経塚の検証2－経塚の意向と墳墓の遺構－』『岩手考古学』第9号

註14 吉澤 智2001『穿孔骨藏器にみる古代火葬墓の造営理念』『日本考古学』第12号 日本考古学協会

註15 佐藤祐宏1977『酒田市城輪柵跡出土の壺（1）』『庄内考古学』第14号

註16 秋田県教育委員会1991『小出I遺跡』『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ』

註17 秋田県教育庁払田柵跡調査事務所2005『第125次調査の概要』『払田柵跡 第125～128次調査概要』

- 註18 酒井忠一・川崎利夫1963「山形県飽海郡遊佐町宮山坂火葬墓群について」『考古学雑誌』49-3
- 註19 岩手県教育委員会1981「西根遺跡」『東北縱貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X（金ヶ崎地区）』
- 註20 中世墓資料集成研究会2004『中世墓資料集成－東北編－』による。
- 註21 山形県内の事例は、山口博之・稲田奈津子2004「山形県『中世墓資料集成－東北編－』中世墓資料集成研究会を参照した。」
- 註22 註3文献／秋田県教育庁払田柵跡調査事務所2004「第6次5年計画調査の総括」『払田柵跡 第122～124次調査概要』
／なお第1回B地点（第126次調査区）では、15世紀末から16世紀段階の土葬墓が2基検出されている。（秋田県教育庁
払田柵跡調査事務所2005「第126次調査の概要」『払田柵跡 第125次～128次調査概要』
- 註23 大仙市教育委員会文化財保護課からの情報による。
- 註24 新野直吉・遠藤巖（編）1980『角川日本地名大辞典5 秋田県』角川書店
- 註25 石井進・荻原三雄（編）1993『中世社会と墳墓』名著出版など
- 註26 齊藤忠1993「中世の火葬墓と一の谷中世墳墓群遺跡」『一の谷中世墳墓群遺跡』磐田市教育委員会



遺跡近景（南→）

中央の道路は近世角館街道、街道の右手が遺跡

遺跡の北西側には玉川を挟んで長野山などの信仰の山々が連なる

菅江真澄の記録した「塚」

—横手盆地の事例を中心に—

今野沙貴子*

秋田県における塚研究は現在、横手市雄物川町館野遺跡（註1）を最新として、塚の発掘調査事例を少しづつ蓄積している段階にあると言える。遺跡として認識されている事例も、まだそれほど多くはない。本稿では、今後の秋田県における塚研究の参考資料を得ることを目的とし、手始めに横手盆地内の事例を対象として、菅江真澄が記録した「塚」の集成を行うこととする。

今回集成の対象としたのは、真澄に「ツカ」という用語で呼ばれている事例のみであり、個々の名称に関しては、真澄が記録している呼称をそのまま引用している。このような基準で遺跡の選定を行った結果、今回の集成には所謂マウンドの形態をとる「塚」以外に、「塚」と呼ばれる石造物も含まれることとなった。「塚」と呼ばれなかった石造物については、今後の課題としたい。真澄の時代には既に遺構が残存していなかった事例（地名が「塚」の存在を伝えている事例等）に関しても、今回は扱わないこととする。ただし、判別の難しい事例のうち、遺跡の由来等の情報が比較的詳細に記されているものに関しては掲載することとした。本稿執筆のために使用した文献は、内田武志・宮本常一（編）の未来社版『菅江真澄全集』である（註2）。

番号	名称	所在地	内 容	巻・ページ
1	せんだん塚	湯沢市高松字三途川	天正(1573-1592)頃、長年の願いが満ちたとして、自ら焼け死んだ修行僧の墓。	5巻p14・65
2	幸左衛門塚	湯沢市高松字三途川	幸左衛門の墓。その下方に、幸左衛門湯という温泉がある。	5巻p15
3	石経塚	湯沢市高松字三途川	路傍に石仏が沢山あり、その辺りで一字一石碑が拾える。経塚が崩落したもの。	5巻p15・68
4	狮子塚	湯沢市松岡字坊中	昔「山村村」の狮子舞と松岡の狮子舞が闘った際、負けた方の狮子頭を埋めた。	5巻p35
5	糸団塚	湯沢市字切畑	佐々木家の古記録を埋めた塚。木が生えている。	5巻p43
6	面塚	湯沢市高松字中村	古い面を埋めた塚であるとの伝承。	5巻p60
7	塚原	湯沢市高松字中村	寺に伴った墓地。寺は消滅。墓地内に元禄(1688-1704)の碑がある。	5巻p61
8	古塚	湯沢市相川字中山	「中山村」に所在。2基存在。東側の塚には大木が、西側の塚には小木が生えている。この塚を掘った際、太い骨が沢山出土したという説が伝わる。	5巻p81
9	一里塚	湯沢市桑崎字中泊	木が生えており、その下に道祖神がある。	5巻p86
10	石塚	湯沢市相川字中山	宝慶元年(1751)、別当福寿院 8世宥応法印の代にこの塚を掘ったところ、大きな骨が出土したという伝承。	5巻p82
11	三十人塚	湯沢市(旧雄勝郡稻川町)	農上義光の使者らを文禄(1592-1596)頃討ち取り、遺体を埋めた所との伝承。	5巻pp.121-122
12	一里塚	湯沢市皆瀬	「本小安村」へ続く道の途中。季の木が道の両側に生えている。	5巻p130
13	十里塚	湯沢市閑口字寺沢	道沿いに立地。真澄の時代には、既に塚は消滅。	5巻p148・150
14	仏塚	雄勝郡羽後町	元稻田稲荷社本社より東、路傍にある。	5巻p192
15	蟻蛇堆	雄勝郡羽後町杉宮	大ムカデにまつわる伝承がある。	5巻pp.192-193
16	馬頭塚	雄勝郡羽後町杉宮	宝永(1704-1710)頃、「宿町」の佐々木理右衛門が廻り出した馬の頭蓋骨2頭分を供養した所であるとの伝承。「宿町」の久昌寺に所在。	5巻pp.187・ pp.193-194
17	琴塚	湯沢市寺沢	強盗の多い地に所在。強盗に討たれた人を路傍に埋めたという伝承。	5巻p214
18	塚	湯沢市(旧雄勝郡雄勝町)	官兵庫頭が銅っていた牛の塚(墓)。神として祀られた。	5巻pp.217-218
19	庚申塚	湯沢市秋ノ宮?	「役内村河連」に所在。旧雄勝郡雄勝町内。	5巻p223
20	由理備中の墓	湯沢市秋ノ宮字内城	墓であろう。真澄の時代、既に文字の判読が難しい状態であった。	5巻p224

* 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査・研究員

番号	名称	所在地	内 容	巻・ページ
21 振り塚	湯沢市柳田	「御瀬川」の川端に所在。宝永4年(1707)秋、村に流行していた疫病を封じ込めるため、湯沢長谷寺17世無難寛老和尚による供養を依頼。和尚が経を読み、「塚」を「安楽塚」と改名したところ。疫病は収まった。安永6年(1777)の洪水で塚が崩れた際、大きな人骨が大量に出土し、円通寺法師の骨ではないかと言われた。	5巻pp239-240	
22 塚	雄勝郡羽後町藤塚	吉三道心という僧の墓(塚)。	5巻p258	
23 旭塚	大仙市角間川町宇木内	「朝日神子」という巫女の入定塚であるという伝承。「寝松」が生えている。現在松の木はない。文政五年(1822)、「黒九ヶ惟季」建立の石碑が塚上に置かれる。(図版1)	6巻p17・pp.19-20	
24 塚	大仙市角間川町	館福荷明神社の傍に所在。塚の下に「白尊女」が住んでいるという伝承。	6巻p17	
25 塚	大仙市角間川町	淨蓮寺の弟子・椎齋の墓。真澄の時代に、塚上に椎齋遊士墓という碑を建立。	6巻p19	
26 左門塚	横手市大森町板井田	伊達左門貞家の墓。貞家は、伊達三河殿の養子とも伝えられる。墓碑に「王翁祖大神定門 寛永九年(1632)壬申四月二日」の銘。旧大森町指定文化財。(図版2)	6巻p29	
27 墓地	横手市大森町掩形	「子守山」と呼ばれる墓地。	6巻p32	
28 眠飯塚	横手市雄物川町沼越字宮ノ目	下河原村の西端から見ると、夕方過ぎ、眠飯塚の上に鬼火が見える。	6巻p56	
29 首塚	横手市雄物川町今宿	沼橋の戦いの際、千の首を埋めたという伝承。「首塚神社」として現存。(図版4)	6巻p47・pp.62-63	
30 領城塚	横手市雄物川町造山	由来は不明。梨の木が生えている。	6巻p72	
31 蝶夷塚	横手市雄物川町造山	由来は不明。昔蝶夷が住んでいた所か。	6巻p72	
32 塚松	横手市雄物川町会塚字石塚	「朝日の松」「夕日の松」という2本の古木。人の墓と推測させるような伝承あり。	6巻p84	
33 道祖神	横手市大森町猿田	小さな松の木の下に積石塚を築き、木製の「陰形」をすえて祀っている。	6巻p106	
34 めくら塚 (御座塚)	横手市大森町上満字巣川	盲人を埋めたとの伝承もあるが、保呂羽山の神奥を置いていた場所でもある。	6巻p111・170	
35 杉塚(行人塚)	横手市大森町上満	佐々木多総右衛門家の庭に所在。昔、そこに尼が修行した庵があった。庵の廃絶後、そこに仏具が埋められ、女・子供の立ち入りが禁じられるようになった。	6巻p114	
36 経塚	横手市大森町上満字中野	菅見沢の出口に所在。石経が埋められているとの伝承。	6巻p115	
37 塚	横手市大森町上満字中野	高松山修行院の上祖が塚を築き、大般若経などを読経して塚に納め供養した。	6巻p116	
38 太田塚	横手市大森町八沢木字中房	保呂羽山仁王門の近くに「塚松」がある。太田小治郎某といふ武士の塚(墓)。	6巻p121・169 8巻p167	
39 道祖神	横手市大森町上満字寺内	積石塚。立派な松の木も伴う。八沢木から由利へ向かう道に所在。	6巻p124	
40 三ツ塚	横手市大森町上満字觀音寺	3基の経塚のうち、1基から「久安五年(1149)己巳五月日僧良与」銘経筒が出土。	6巻pp.124-126	
41 生塚	横手市雄物川町二井山	入定塚。大きな松が生えていた。「塚の下」という地名の由来。	6巻p133	
42 石塚	横手市大森町八沢木字屋敷台	保呂羽山二の鳥居傍。『頭槌劍』の柄頭に似た石、1尺(約30cm)余りの「雷斧石」が出土。	6巻p168・189	
43 眇井塚	横手市大森町八沢木	保呂羽山一の鳥居下の方の路傍に所在。眇井内記候好の墓。	6巻p169・234	
44 経塚	横手市大森町	「塚切」という所に所在。大友氏某の奥方は仏教を厚く信仰した人で、保呂羽の神に読経を行っていた。奥方の死後、残された經典は塚に埋められた。	6巻p169・171	
45 下居塚	横手市大森町八沢木	田の中に小規模な塚がある。天平宝字元年(757)に、保呂羽山波宇志別神社が最初に建立された地であると言われる。	6巻p169	
46 梵天塚	横手市大森町	元々は赤松と桜の老木が生えていたが、枯れてしまった。後に若松が1本植えられた。昔、保呂羽の御神御遷幸の際に「ほんでん」を立てた所と思われる。	6巻pp.169-170・pp.180-181	
47 白石の碑	横手市大雄字鶴巻田	「六拾六部大乘妙曲」の碑か。磨滅しているため、定かではない。	6巻p221	
48 一重堆	横手市大雄字阿気	「梵天社」前に所在。大きな梨の木が1本あったが、雄物川の岸が崩落して消滅。	6巻p222	
49 一葉塚	横手市雄物川町薄井	「南頭社」前に所在。石碑に「一葉散る行衛や空に無一物 無外一叟居士」は矢野喜右二門のこと。現存しており、旧雄物川町有形文化財・歴史資料である。(図版3)	6巻pp.234-235	

番号	名称	所在地	内 容	巻・ページ
50	傾城塚	横手市大雄字田村	「傾城塚」に所在。1辺約7、2mの方形を呈する、2段構造の塚が2基ある。	6巻p256
51	狐森	横手市大雄字桜森	狐穴のといへん多い古塚。	6巻p269
52	大福塚	横手市下八丁	田の中に所在し、近くに白山姫社がある。大福院永康法印にちなんだ名称。	6巻p275
53	傾城塚	横手市平鹿町浅舞	浅舞の「五塚」の一つ。傾城(美人あるいは遊女)を生き埋めにした所とも、行き倒れた傾城の遺体を埋めて供養した所とも伝えられる。	6巻p285・292
54	念仏塚	横手市平鹿町浅舞	浅舞の「五塚」の一つ。念仏行者の供養塚、あるいは塚(墓)であるとの伝承。	6巻p285・292
55	坊塚	横手市平鹿町浅舞	浅舞の「五塚」の一つ。清光院の祖・修驗般若坊の塚(墓)という説がある。	6巻p285・292
56	獅子塚	横手市平鹿町浅舞	浅舞の「五塚」の一つ。昔大森の獅子舞と山田の獅子舞が鬭った際、敗者となった大森獅子舞の獅子頭を埋めた塚である。	6巻p285・pp.292-293
57	鷹塚	横手市平鹿町浅舞	浅舞の「五塚」の一つ。錦子清水のほとり。「御膳の杉」の下に所在。佐竹義隆の射ていた鷹が逃げた際、そこは知らず針一本でその廻の目を書き、射落とした浮浪人の逸話が伝わっている。射落とされた鷹を埋めた塚。	6巻p283・293
58	託宣塚	横手市平鹿町下鍋倉	由緒のある所であると言われるが、由来等、詳細は伝わっていない。	6巻p305
59	旭塚	横手市平鹿町中吉田	上吉田西法寺の西に所在。朝日という巫女の塚(墓)であるとの伝承。	6巻p310
60	ふきづか	横手市十文字町植田	「羽場」に所在。高さ6尺(約1.8m)、広さ(径?)3丈(約9m)ほどの塚で、上に大きな梨の木が生える。この塚を掘ったところ、板碑が多く出土した。	6巻pp.318-319
61	上海塚	横手市十文字町	「西野村」に所在。淨土院の祖の塚(墓)か。塚上に福荷明神社が鎮座?	6巻p339
62	宗本塚	横手市増田町増田字福嶋	路傍の森の中に所在。石碑に「来悟宗本禪沙弥覺位 元禄十六年(1703)拾月廿四日」の銘。増田本町の千田彦右エ門の塚(墓)。	6巻p350
63	経塚	横手市増田町増田字福嶋	石碑に「奉写一字三札大乗妙典經全部 寛永元年(1624)八月申廿四日云々」とある。上述の「宗本塚」と並んで所在。	6巻p350
64	塵塚	横手市増田町増田字福嶋	病を治すと信仰された廟があり、人々は病の治療後に米糠、藁などを根の周りに置いてお礼をした。柳が枯れても信仰は続き、塵塚が形成されている。	6巻p351
65	塚木	横手市増田町増田字福嶋	「渡辺柳」という柳の木。渡辺某という、由緒ある人の墓と言われる。	6巻p351
66	経塚	横手市増田町亀田	「虹が沢」という所に所在。梵字の書かれた小石が出土する塚。	6巻p383
67	塚	横手市平鹿町醍醐	「塚の下」という地名の由来となっている塚。どんな人物の塚(墓)なのかは不明。	6巻p396
68	己巳待塚	横手市十文字町梨木	「梨木羽場村」に1本の大杉があり、己巳待塚の印になっている。	6巻p397
69	獅子塚	横手市平鹿町	昔獅子頭を埋めた塚。梨の木が生えている。	6巻p439
70	七塚	横手市赤坂	藤原塚・鍛田塚・高橋塚・高山塚・佐藤塚・菅原塚・池田塚の七つの塚。昔、源氏か平氏の落人が土民となつた際、姓名を添えた系図表を埋めて塚とした。	6巻p460
71	しらみ塚	横手市前郷	「城見塚」とも言われる。また、村の草創帳に「しらげ塚」とある。その昔兵乱の際に、焼けてしまった多くの米を集めて塚にしたとの伝承もある。	6巻pp.486-487
72	経塚	横手市山内	「福万色」の薬師繪の上に所在。石経を埋めた所か?	6巻p595
73	御腰掛塚	大仙市協和荒川	松の大木の下。藤原朝臣利仁が休憩した塚で、踏むと病気になるとの伝承。	7巻p32
74	朝日神子塚	大仙市協和上淀川	峰吉川との境に所在。路傍にある杉の老木を指すのか。「旭の神子」は、「境邑」の光雲寺の巫女であるとの伝承。	7巻p36
75	塚	大仙市協和小種	「土源村」に所在。『享保郡邑記』に「境塚切」「間塚切」等、境塚を示す表現がある。	7巻p52
76	梨子木塚	大仙市強首字乙越	伊藤氏の先祖が、家系譜や武家の調度品を埋めたとの伝承。木の葉の大石で覆われてあり、石経とも言われる。塚の裾に梨の古木が生えている。	7巻p65
77	石経塚	大仙市大巻	寿命院という修験者が石経を書きし、埋めた塚であると言われる。	7巻p73
78	塚	大仙市協和峰吉川	滝の不動尊を貯てる途中、滝に落ちて死んだ老夫婦の墓。	7巻p78

番号	名称	所在地	内 容	巻・ページ
79	一里塚	大仙市刈和野	刈和野集落の近くにある一里塚。	7巻p93
80	古墳	大仙市刈和野	食川の岸、浄土宗寺院・西念寺が元々あった場所に所在。西念寺の墓地か?	7巻p101
81	七ツ塚(七ツ森)	大仙市土川字今泉	「心像村」との境、岩屋堂に所在。古橋の近くにあり、由来は不明。	7巻p106・109
82	七箇塚	大仙市土川字生内	「土川の岸」にそびえる岩山との境に所在。	7巻p113
83	山伏塚	大仙市土川	十二山の一つ、金山沢口に所在。この山より、錫杖が発掘されたこともある。	7巻p118
84	塚	大仙市北幡岡	旅人との決闘に敗れた法駕坊の墓。眞澄の時代には、既に塚は残存せず。	7巻p140
85	法駕貝塚	大仙市北幡岡	山伏・宝性坊の遺品である法駕貝を埋めた塚だという伝承。	7巻p143・156
86	塚(墓所)	大仙市南外南幡岡	慶長19年(1614)、合戦で討死した加藤重信の墓。稻荷神社の前にある。	7巻p150
87	経塚	大仙市南外字笠坊村	石經塚か。周辺は「きやうづか森」と呼ばれているが、由来は定かでない。	7巻p172
88	黄金塚	大仙市大曲西根	「切上」に所在。岩に生える「むかし松」の下に、黄金を埋めたという伝承。	7巻p252
89	東海房塚	大仙市大曲西根	東海坊という修行僧の入定塚であるとの伝承。別名「生塚」。入定後21日間、昼夜鼓を打つ音が続いたと言われる。「南蕃殿村」の東に位置。	7巻p253・265
90	蝦夷塚	大仙市大曲西根	『永慶軍記』の記録にある、弘治・永祿(1555-1569)頃、蝦夷80人の戦死体を埋めた塚か。「切上」の「稻荷山」近辺に所在。	7巻pp.253-255
91	太夫塚	大仙市大曲西根字中西根	同名の塚は、津軽の平内をはじめ各地に存在。	7巻p263
92	塚	大仙市内小友字館前	三浦治部少輔政重に斬られた鶴治屋の遺体を埋めた塚。塚上に杉を植えた。	7巻p281
93	加茂次郎義維塚	大仙市内小友字館前	石碑。加茂次郎義維の墓であろう。寺院境内に所在。	7巻p282
94	手向かい塚	大仙市内小友字館前	「大比靈神」。信仰の対象となっていた杉を「手向かい塚」などと呼んでいた。	7巻p282
95	山伏の墓碑	大仙市内小友字館前?	「荒町村」の村境に、庚申塔と共に所在。現在では館前集落に入る領域か?	7巻p284
96	古墓	大仙市四ツ屋字諸又	要之助が斎主を務める水神社に所在。	7巻p293
97	庚申塚	大仙市四ツ屋字新屋敷	「荒屋敷昌」に所在。この村ができるのは正保(1644-1648)頃か慶安(1648-1652)頃と考えられるため、塚の築造はそれ以降か?	7巻p293
98	段録塚	仙北郡美郷町天神堂	永治2年(1142)4月18日銘の石碑。毎年この日に、村人が水神として祀る。	7巻p367
99	樅の塚	横手市金沢中野字十二社	十二種の生贋を埋めて塚としたとの伝承。現在の「十二社」という地名の由来。	8巻p25・38
100	みのり塚	仙北郡美郷町飯詰	石経を埋めた経塚であるとの伝承。	8巻p25
101	高名塚	横手市金沢中野	「翁立杉」と呼ばれる大杉。権五郎景正の高名塚とも言われる。高さは2~3丈(6m~9m)ほどで、根には「化石」と呼ばれる石がある。「矢立の塚」とも言う。	8巻p25・39 ・42・84
102	印塚	仙北郡美郷町飯詰	『享保郡邑記』に、塚塚の存在を示す記述。	8巻p47
103	塚	仙北郡美郷町飯詰	「天郎ノ原」という所に大杉が1本ある。人の塚(墓)であると言われ、ここを掘れば人骨が沢山出土すると伝えられる。後三年の役で死んだ兵士の墓か。	8巻p48
104	塚	大仙市高梨	母子の墓と言われる。2つの石が立つ塚。	8巻p98
105	蛇塚	大仙市板見内字蛇塚	蛇を殺し、崇りに悩まされた男が蛇を神として祀った。その殺した蛇を埋めた塚。	8巻p112
106	天学塚	大仙市豊岡字権	昔「天覚院」という、天台宗あるいは真言宗の寺院があった場所と伝えられる。	8巻p206
107	法華経塚	大仙市栗沢	「森下清水」に所在。法華経を埋めた塚。築造時期は不明。	8巻p207
108	山伏塚	仙北市角館町雲然荒屋敷(荒屋舎)	「荒屋舎」の西の方に所在。入定塚であるとの伝承。	8巻p272

注1 伊藤和美・高橋直樹2005『大見内遺跡・館野遺跡』秋田県文化財調査報告書第386集 秋田県教育委員会

注2 内田武志・宮本常一(編)1975『菅江真澄全集』第5巻、同1976『菅江真澄全集』第6巻、同1978『菅江真澄全集』第7巻、同1979『菅江真澄全集』第8巻 未来社



図版1 大仙市角間川町旭塚（No.23）北から



図版2 横手市大森町左門塚（No.26）南から



図版3 横手市雄物川町一葉塚（No.49）西から



図版4 横手市雄物川町首塚（No.29）西から

秋田県考古学関係文献抄録（7）－旧石器時代－

利部 修*

1960. 11. 大和久震平「大乘院遺跡発掘調査報告」『横手郷土史資料』第33号 横手郷土史編纂委員会
1961. 2. 加藤稔「東北の無土器文化研究のために—ナイフ形石器を中心に—」『秋田考古学』第17号 秋田考古学協会
1962. 6. 富樫泰時「秋田県横手市発見の彫刻器」『若木考古』第63・64号
1963. 9. 富樫泰時「秋田県羽後町土館新成発見の石器」『上代文化』第33号 国大考古学会
1963. 9. 富樫泰時「羽後町五把出山発見の石器について」『秋田考古学』第22号 秋田考古学協会
1967. 2. 豊島昂「第二章 先土器文化」『秋田県の考古学』 吉川弘文館
1975. 3. 秋田県教育委員会『米ヶ森遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第34集
1975. 5. 富樫泰時「米ヶ森遺跡」『日本の旧石器文化』第2巻 遺跡と遺物（上） 雄山閣出版株式会社
1976. 8. 富樫泰時「東成瀬村発見の有舌尖頭器」『秋田考古学』第33号 秋田考古学協会
1976. 8. 武藤康弘「協和町下淀川字車田出土の旧石器」『秋田考古学』第33号 秋田考古学協会
1977. 協和町教育委員会『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』
1977. 4. 大和久震平「第二章 無土器文化」『秋田県史』考古編 秋田県
1979. 3. 秋田県教育委員会『館下I遺跡』秋田県文化財調査報告書第62集
1979. 8. 西谷隆「東北地方日本海側におけるナイフ形石器文化の様相」『秋田考古学』第36号 秋田考古学協会
1979. 10. 藤原妃敏「東北地方における石刃技法を主体とする石器群研究の問題点」『考古学ジャーナル』No. 167 ニュー・サイエンス社
1981. 12. 岩見誠夫「第一節 旧石器時代」『若美町史』 若美町史編さん委員会
1982. 3. 秋田市教育委員会『下堤D遺跡発掘調査報告書』
1983. 3. 藤原妃敏「東北地方における後期旧石器時代石器群の技術基盤」『考古学論叢』 I 芹沢長介先生還暉記念論文集刊行会
1983. 3. 秋田市教育委員会「下堤G遺跡（先土器時代）発掘調査概報」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤G遺跡・野畠遺跡・湯ノ沢B遺跡』
1984. 3. 藤原妃敏「米ヶ森技法」『考古学ジャーナル』No. 229 ニュー・サイエンス社
1984. 3. 秋田県埋蔵文化財センター『土井遺跡発掘調査報告書—山村基幹農道整備事業八森地区埋蔵文化財発掘調査一』秋田県文化財調査報告書第111集 秋田県教育委員会
1984. 3. 秋田県埋蔵文化財センター『此掛沢II遺跡・上の山II遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第114集 秋田県教育委員会
1984. 9. 富樫泰時「二 繩文時代前期以前」『平鹿町史』 平鹿町史編纂委員会
1984. 10. 藤原妃敏「東北地方における石刃石器群について」『太平臺史窓』第三号 史窓会
1985. 3. 秋田県埋蔵文化財センター『七曲臨空港工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
*秋田県埋蔵文化財センター南調査課課長

書』秋田県文化財調査報告書第125集

1985. 10. 河辺町「第三節 七曲の遺跡群」『河辺町史』
1985. 11. 烏海町史編纂委員会「第一節 旧石器時代」『烏海町史』
1986. 3. 秋田市教育委員会『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 地蔵田B
遺跡・台A遺跡・湯ノ沢I遺跡・湯ノ沢F遺跡』
1986. 大野憲司「秋田県の旧石器時代における剥片生産技術について」『日本海地域における旧
石器時代の東西交流』 北陸旧石器文化研究会・近畿旧石器文化交流会
1986. 11. 秋田県埋蔵文化財センター『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 I 石坂台IV遺跡・
石坂台VI遺跡・石坂台VII遺跡・石坂台VIII遺跡・石坂台IX遺跡・松木台III遺跡』秋田県文化
財調査報告書第150集 秋田県教育委員会
1987. 7. 富樫泰時「先史・古代」『図説秋田県の歴史』 河出書房新社
1987. 12. 奥村吉信「立野ヶ原石器群と米ヶ森技法」『大境』第11号 富山考古学会
1989. 9. 奥村吉信「後期旧石器前半石器群の技術基盤の諸様相」『考古学ジャーナル』No. 309
ニュー・サイエンス社
1989. 9. 藤原紀敏「米ヶ森技法の石刃技法」『考古学ジャーナル』No. 309 ニュー・サイエンス社
1990. 2. 秋田県埋蔵文化財センター『竜毛沢館跡発掘調査報告書 一般国道二ツ井バイパス建設事
業に係る埋蔵文化財発掘調査』秋田県文化財調査報告書第188集 秋田県教育委員会
1990. 3. 山内村郷土史編纂委員会「第一項 旧石器時代」『山内村史』上巻 山内村
1990. 7. 永瀬福男「第二節 ナウマンゾウを追って」『琴丘町史』通史編 琴丘町史編さん委員会
1990. 11. 加藤稔「東北日本の細石刃核—「湧別技法=角二山型」以前の諸型式について」『考古
学古代史論叢』 伊東信雄先生追悼論文集刊行会
1991. 3. 奥村吉信「立野ヶ原系石器群と米ヶ森技法」『大境』第13号 富山考古学会
1991. 3. 秋田県埋蔵文化財センター『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書VII一小出I遺跡・小
出II遺跡・小出III遺跡・小出IV遺跡』秋田県文化財調査報告書第206集 秋田県教育委
員会
1991. 7. 六郷町史編纂委員会「第一節 旧石器時代」『六郷町史』上巻・通史編 六郷町
1992. 3. 小林恵美子「八竜町館の上遺跡出土のナイフ形石器について」『秋田県埋蔵文化財センター
研究紀要』第7号 秋田県埋蔵文化財センター
1992. 3. 秋田市教育委員会『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 犀崎B遺跡
秋大農場南遺跡』
1992. 5. 渋谷孝雄「東北地方における石刃技法出現期の石器群について」『東北文化論のための先
史学歴史学論集』 加藤稔先生還暦記念会編
1992. 11. 秋田県埋蔵文化財センター『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調
査報告書III一鶴子台遺跡・八幡台遺跡一』秋田県文化財調査報告書第230集 秋田県教育
委員会
1993. 3. 秋田市教育委員会『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 犀崎B遺跡・
地蔵田A遺跡』

1993. 3. 告瀬村史編集委員会「第一節 旧石器時代」『告瀬村史』 告瀬村
1993. 8. 富樫泰時「旧石器時代の石器二例」『秋田考古学』第42・43合併号 秋田考古学協会
1994. 3. 秋田市教育委員会「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 地蔵田A遺跡」
1995. 3. 大野憲司「此掛沢II遺跡」『能代市史 資料編 考古』 能代市史編さん委員会
1995. 3. 武田孝義「逆川遺跡」『能代市史 資料編 考古』 能代市史編さん委員会
1995. 3. 永瀬福男「館下I遺跡」『能代市史 資料編 考古』 能代市史編さん委員会
1995. 3. 秋田県埋蔵文化財センター「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XIX—古野遺跡—」
秋田県文化財調査報告書第253集 秋田県教育委員会
1995. 渋谷孝雄「東北地方における石刀技法出現期の石器群について」『古代探叢IV—滝口宏先生追悼考古学論集』 早稲田大学出版部
1996. 1. 小林克「第一節 先史時代」『十文字町史』 十文字町史編纂委員会
1996. 3. 佐々木土郎「第一節 人類生活のあけぼの」『西目町史』 西目町史編集委員会
1996. 8. 伊藤攻「坊台遺跡出土の旧石器について」『秋田考古学』第45集 秋田考古学協会
1996. 須田良平「東北・北海道—東北地方を中心にして」『石器文化研究』5
1997. 6. 大野憲司「第二節 旧石器時代の増田」『増田町史』 増田町史編纂委員会
1998. 3. 工藤直子・高橋学「米代川流域の旧石器時代資料—能代・山本地方を中心として—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第13号 秋田県埋蔵文化財センター
1998. 3. 秋田県埋蔵文化財センター「家の下遺跡（2） 旧石器時代編—県営は場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書III—」秋田県文化財調査報告書第275集 秋田県教育委員会
1998. 3. 西目町史編集委員会「第一節 旧石器時代の遺跡」『西目町史』資料編
1998. 5. 梅川知江「米ヶ森型台形石器について」『石器に学ぶ』創刊号 石器に学ぶ会編集部
1999. 3. 秋田県埋蔵文化財センター「脇神館跡—県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I—」秋田県文化財調査報告書第284集
1999. 3. 秋田県埋蔵文化財センター「潟前遺跡（第1次）—県営オートキャンプ場建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I—」秋田県文化財調査報告書第290集
1999. 10. 吉川耕太郎・児玉準「男鹿市大烟台遺跡出土のエンド・スクレイバーについて」『男鹿』第5号 秋田県文化財保護協会男鹿支部
2001. 2. 富樫泰時「第一章 旧石器時代と西目町」『西目町史』通史編 西目町史編集委員会
2001. 3. 宇田川浩一「大館市松木高館平遺跡出土の旧石器について」『秋田考古学』第47号 秋田考古学協会
2001. 3. 吉川耕太郎「協和町岸館採集の槍先形尖頭器」『秋田考古学』第47号 秋田考古学協会
2001. 5. 富樫泰時「1 秋田のあけぼの」『秋田県の歴史』 山川出版社
2001. 12. 大野憲司「秋田空港周辺の旧石器—河辺町七曲台の旧石器群—」『第15回「東日本の旧石器文化を語る会」予稿集』 渋谷孝雄編集
2001. 12. 菅原俊行「秋田市内の旧石器」『第15回「東日本の旧石器文化を語る会」予稿集』 渋谷孝雄編集

2001. 12. 高橋学「秋田県琴丘町家の下遺跡」『第15回「東日本の旧石器文化を語る会」予稿集』渋谷孝雄編集
2002. 3. 吉川耕太郎「上部旧石器時代遺跡の研究—遺跡構造論とその周辺—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第16号 秋田県埋蔵文化財センター
2002. 3. 菅原俊行ほか「第1節 旧石器時代の遺跡と遺物」『秋田市史』第六巻 考古・史料編 秋田市
2003. 3. 秋田県埋蔵文化財センター『堂の下遺跡 I 旧石器時代～弥生時代篇—日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XV—』秋田県文化財調査報告書第356集 秋田県教育委員会
2003. 6. 富樫泰時「第二節 旧石器時代と南外村」『南外村史』通史編 南外村
2003. 10. 吉川耕太郎「東北地方における後期旧石器時代初頭の文化」『日本旧石器学会第1回シンポジウム予稿集 後期旧石器時代の始まりを探る』 日本旧石器学会
2003. 12. 吉川耕太郎「秋田県能代市縄手下遺跡の調査」『第17回「東日本の旧石器文化を語る会」予稿集』 渋谷孝雄編集
2004. 3. 秋田県埋蔵文化財センター『龍門寺茶畠遺跡・向山遺跡—主要地方道本荘岩城線ふるさとづくり推進事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一』秋田県文化財調査報告書第373集 秋田県教育委員会
2004. 10. 吉川耕太郎「縄手下遺跡の旧石器時代調査」『考古学ジャーナル』No. 521 ニュー・サイエンス社
2004. 6. 神田和彦・吉川耕太郎「矢島町採集のナイフ形石器について—「中原型」ナイフ形石器類似資料の検討—」『秋田考古学』第48集 秋田考古学協会
2005. 3. 石川恵美子「米ヶ森型台形石器」『地域と文化の考古学』I 明治大学考古学研究室
2005. 5. 吉川耕太郎・米田寛「東北地方の様相」『石器文化研究11シンポジウム「ナイフ形石器文化終末期」再考—ナイフ形石器文化終末期石器群の変動—』 石器文化研究会
2005. 12. 吉川耕太郎「秋田県芹沢館跡の調査」『第19回「東北日本の旧石器文化を語る会」予稿集』 渋谷孝雄編集
2006. 3. 北秋田市教育委員会『森吉B遺跡 二重鳥A遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』 北秋田市埋蔵文化財調査報告書第2集
2006. 5. 吉川耕太郎「東北地方における『ナイフ形石器文化終末期』について（補論）」『石器文化研究13シンポジウム「ナイフ形石器文化終末期」再考—ナイフ形石器文化終末期石器群の変動—コメント集』 石器文化研究会
2006. 6. 麻柄一志『日本海沿岸地域における旧石器時代の研究』 株式会社雄山閣
2006. 9. 吉川耕太郎「秋田県における後期旧石器時代石器群の編年的検討」『木越邦彦先生米寿記念シンポジウム年代測定と日本文化研究予稿集』 株式会社加速器分析研究所
2006. 11. 吉川耕太郎・神田和彦「秋田県の石刃石器群—後期旧石器時代後半期相当の石刃石器群を中心として—」『第20回「東北日本の旧石器文化を語る会」東北日本の石刃石器群』 渋谷孝雄編集

秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第21号

発行年月 平成19年3月

発行機関 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802

秋田県大仙市払田字牛嶋20番地

電話 (0187)69-3331

FAX (0187)69-3330

URL http://www.pref.akita.jp/gakusyu/maibun_hp/index2.htm

E-mail maibun@pref.akita.lg.jp

印 刷 株式会社仙北印刷所



